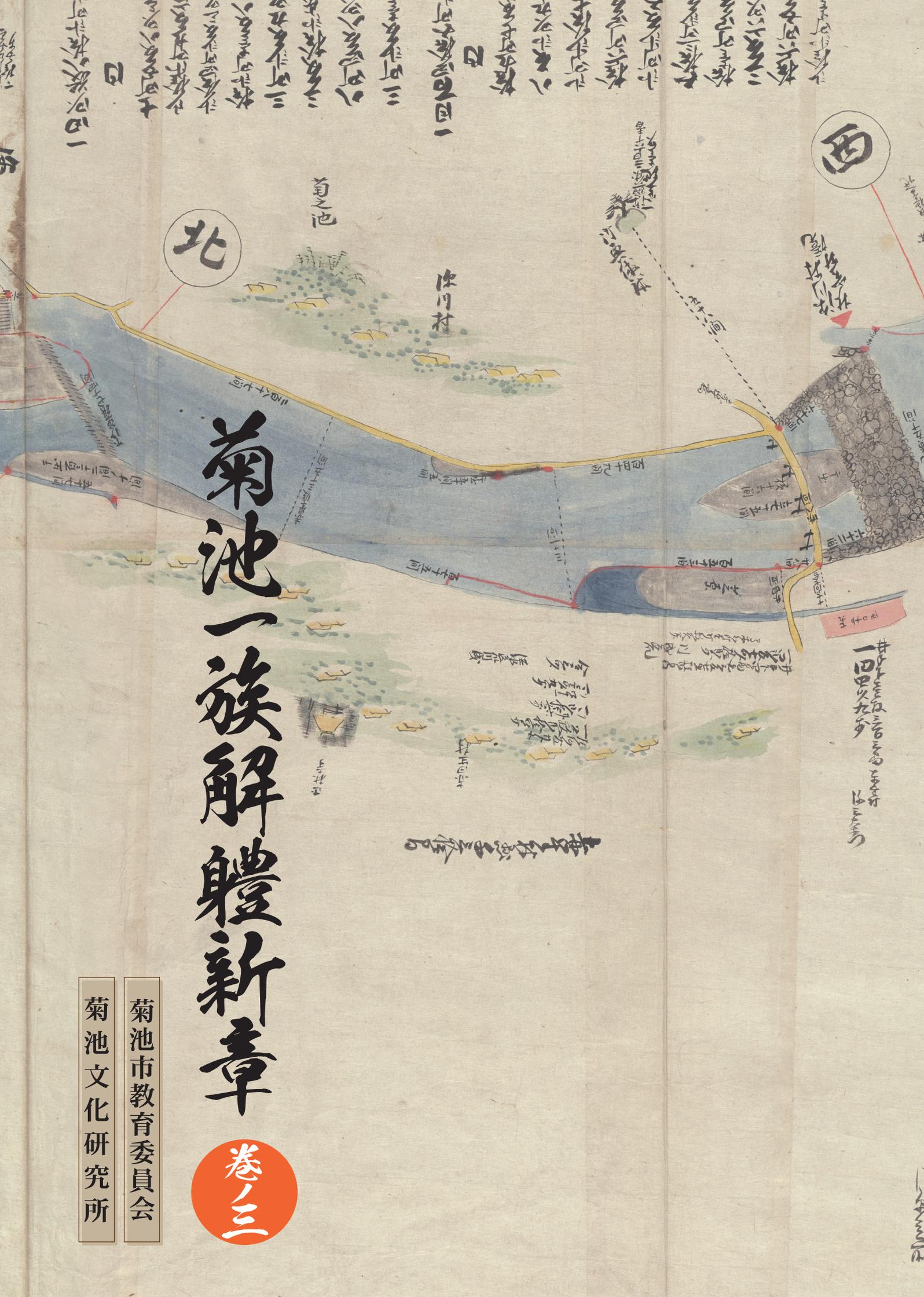


西

北



菊池一族解體新章

卷之三

菊池市教育委員会

菊池文化研究所

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

序 文

菊池一族は、平安時代の後半から戦国時代の頃(1070年～1532年)まで約450年もの間、菊池地方を中心に栄えた武士の一族であり、最盛期には、九州一円に影響力を及ぼすほどの勢力を誇っていました。

市内各地には本丸跡の菊池神社をはじめ、一族の墓碑、菩提寺が点在し、その痕跡が色濃く残されています。また、その軌跡は九州一円から全国へとたどることができます。

菊池市教育委員会では、菊池一族をはじめとする菊池市の歴史・風土・文化を調査、発掘し、後世に引き継ぎ、広く市民に還元するとともに、学習活動への貢献を行うことを目的として、令和元年度に菊池文化研究所を設置しました。

その取り組みのひとつとして、菊池一族に関する研究の深化・蓄積と、菊池一族に関連する分野に携わる若手研究者を広く支援するため、菊池一族に関連する歴史・文化の調査研究事業を行っています。

この度、令和3年度の研究の成果を「菊池一族解體新章 卷ノ三」としてまとめました。

この論文集が、菊池市の歴史・文化、ひいては中世歴史文化の研究をさらに進展させるとともに、その歴史的価値を一層明らかにする一助となれば幸いです。

おわりに、菊池一族に関連する歴史・文化の調査研究事業の実施にあたり、ご理解とご協力をいただいた各研究者並びに指導及び助言をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

例 言

- 1 本書は、菊池文化研究所が令和3年度に公募した「菊池一族調査研究事業」により、選考された研究者による調査研究論文を収録したものである。
- 2 本書の作成にあたり、服部英雄氏、稲葉継陽氏には、研究者の選考及び調査における指導において、ご尽力を賜りましたこと厚く御礼申し上げる。
- 3 本書の作成にあたり、掲載資料の提供などで多くの機関並びに個人に御協力をいただいた。掲載した資料の出典については各章末論文ごとに記した。

目 次

第1章 隈府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究

天草市観光文化部文化課

中山 圭 1

第2章 墓石類からみた江戸時代における菊池氏の顕彰

九州近世大名墓研究会

野村 俊之・美濃口 雅朗 35

第3章 石造物からみた菊池一族について

—菊池市亙輪足山松林院東福寺を中心として—

太宰府市教育委員会 文化財課

高橋 学 67

菊池一族解體新章 卷ノ三

発行日 令和6年3月20日
編集・発行 菊池市教育委員会 菊池文化研究所
熊本県菊池市隈府 872-1
TEL 0968-25-1111
印刷・製本 (資) 橋本印刷

限府土井ノ外遺跡出土の土師器に関する研究

中山 圭

はじめに

熊本県菊池市の中心部に位置する限府土井ノ外遺跡（以下、土井ノ外遺跡）は、県立菊池高校の校舎改築に伴い平成一七〜一八年にかけて、約四四〇〇㎡の発掘調査が実施された。その結果、方形に区画された溝の内外に掘立柱建物跡、柵列跡が検出され、中世後期の大量の土師器皿や輸入陶磁器が出土した（熊本県教委二〇〇九）。当該地近辺は、南北朝期に南朝を支え、戦国期には肥後国守護として君臨した菊池氏の本拠地があったと考えられており、東端の菊池神社・菊池公園を有する丘陵「城山」を起点に、東西軸の守護城下町が展開したと想定されている。現在の字界を見ても、「御所小路」等数本の軸的街路に面して方形区画が整然と展開しており、その名残を見ることができるといえる。

菊池氏の居城は、元来、城山上の「菊池城跡（限府城）」と理解されてきたが、平成八年に青木勝士氏が、全国で進展しつつあった中世都市研究の成果を基に、限府町内に残る字名「屋敷」に着目、平地の守護館有力地として比定した（青木一九九六）。この「屋敷」に東接する字が「土井ノ外」であり、南北朝期に下向していた懐良親王が手植えしたとされる「將軍木」もその区画に含む。その後に行われた土井ノ外遺跡発掘で上記成果が見られたため、当然、菊池氏居館としての可能性が論じられることとなった。ただし、調査報告

書内ではその比定については慎重な見方をしており、一方、青木氏は同遺跡を守護館の一部と評価している（青木二〇二〇）。

このような中、筆者は、報告書の実測図等から青磁琮形瓶など輸入陶磁器の奢侈品が出土していることを知り、これら遺物は土井ノ外遺跡の空間特性の復元上、大きな影響を与えるものとの認識を持つたが、そのことを指摘した先行研究は見られなかった。そのため、菊池市教育委員会が進めている「菊池一族の歴史文化資料の調査研究」事業の採択を受け、熊本県教育委員会が所蔵する土井ノ外遺跡の輸入陶磁器の研究を行い、成果を前稿にまとめたところである（中山二〇二一A）。

結果、限府土井ノ外遺跡の輸入陶磁器について、未報告資料の抽出・図化提示を出発点として、青磁の優品である各種瓶類や酒海壺他の奢侈品が多数含まれていること、青磁器台・青磁播鉢・法花壺・褐釉磁器等全国的に見ても希少な輸入陶磁器が出土していること、天目茶碗以外にも、風炉・茶臼・茶臼・茶入等の茶道具が過不足なく揃っている状況等を確認することができた。また、遺跡出土破片を、各地の美術館伝世品や他遺跡出土遺物と比較検討することで、その希少性・重要性が把握された。特に首里城跡京の内の一括資料の組成と近い遺物を抽出できた点は、今後の比較研究への進展や南方との交易交流を考える上で、重要な基礎資料と位置付けることができたと考えている。出土した青磁瓶（花生）・水注類や茶道具等の使用状況に

ついで、中世段階の花飾りの故実書『立花図巻』や座敷飾りの規定書『君台観左右帳記』の記録と対比し、限府土井ノ外遺跡には、守護館クラスの会所が存在した可能性が高いことを指摘することができた。

一方、課題として「輸入陶磁器破片の点数計測による、碗皿の出土状況を通じた遺跡の存続年代の見直し、盛期の捕捉」を掲げ、これについても、一応の見通しを別稿で論じた（中山二〇二一B）。

また、もう一つの課題として、限府土井ノ外遺跡出土遺物の大部分を占める、土師器の分析の必要性も掲げた。土師器は、硬質で長期間の使用に耐える輸入陶磁器に比べ、耐久性が低く、在地で生産される特性から大量消費されることが多く、結果としてモデル更新の間隔が短い。このため編年の基準資料として優れているが、その形態変遷を追求するためには、大量の破片資料が必要となる。限府土井ノ外遺跡では出土量が多く、その要件を満たしている可能性が高い。また、土師器は様々な用途に使用されるが、特に主殿空間等における献杯儀礼での消費が特徴づけられてもいるため、輸入陶磁器と併せて、出土地点周辺の空間復元に有効な資料となり得る。本稿では、引き続き限府土井ノ外遺跡の特質をより明らかにするため、出土土師器の分析から、遺跡の時代変遷や出土空間の再構成を目指すものである。

一 輸入陶磁器の出土状況からみる土井ノ外遺跡の年代観

(一) 報告書の輸入陶磁器評価に関する問題点と未報告資料の抽出
土師器の分析の前に、まず輸入陶磁器供膳具（碗・皿）の出土状

況と沖縄編年に照らした年代観の確認作業を行っておく。

調査報告書では、龍泉窯系青磁について四〇点が凶化されており、それ以外の輸入陶磁器は八点と少ない。そのうち、年代の指標になりそうな青磁碗を見ると、無文端反碗（沖縄編年、IV―〇類もしくはV―〇類）、無鎬蓮弁文碗（同V―一類）、雷文帯碗（同V―二類）、細線蓮弁文碗（VI―一類）が見られ、特に雷文帯碗と細線蓮弁文碗が主体として掲載されていた。

近年、豊富で多様な輸入陶磁器の出土状況を基盤として、年代観の活発な議論を重ね、編年の細密化が進展している沖縄編年から（瀬戸二〇一七）、これらの年代観を位置付けると、IV―〇類・V―〇類・V―一類は概ね瀬戸四期（二三五〇～一四二〇年頃）、V―二類は瀬戸五古期（一四二〇～一四六〇年頃）から瀬戸五新时期（一四六〇～一四八〇年頃）、VI―一類は瀬戸六期（一五世紀末～一六世紀前半）の基準資料として該当する。

このため、報告書掲載の輸入陶磁器からみると、少なくとも一四世紀中葉から一六世紀の前半まで遺跡が存続していると考えられる。調査報告書では遺構の切合い関係を基軸に、遺構の消長をⅢ期に区分し、それぞれⅠ期を一四世紀後半～末、Ⅱ期を一四世紀末～一五世紀初頭、Ⅲ期を一五世紀初頭～前半と設定しており（熊本県教委二〇〇九）、この時期区分では、土井ノ外遺跡が一世紀に納まることとなり、また、各面期は三〇年程度となり、いささか窮屈となる。遺構の時期決定に関する基準が不明瞭で、本稿で取り扱う土師器は、未だ熊本地方では中世後期の詳細な編年は組まれていないため年代決定に利用しがたく、おそらく輸入陶磁器の既存の年代観を指標に年代を定めたものと推測されるが、依拠した陶磁器編年も明

らかでない。報告書の遺構年代観と、先の沖縄編年との齟齬は五〇年以上に及び、例えばⅠ期内（一四世紀代）で廃絶するとされる溝SD九九は、出土遺物の主体がⅤ―Ⅱ類の雷文帯碗であるので、沖縄編年に照らせば廃絶は早くとも一五世紀中葉以降と考えられ、報告書内の画期と相当のズレが生じる。

以上のように、報告書内の年代観は、再考が必要と思われる状況にあった。このため、これまでの調査において、未報告資料も含む全輸入陶磁器の破片を实見し、沖縄分類に照らして、点数計測を行った。その結果、青磁・白磁のみならず、青花磁も一定量出土しており、数は少ないものの、青花E群碗や漳州窯産青花磁など一六世紀後半に出現する輸入陶磁器の存在も確認できた。このため、隈府土井ノ外遺跡の存続年代は、ほぼ室町時代全体にわたる可能性も出てきた。

（二）輸入陶磁器の出土数

出土している陶磁器片について、種別・器種・分類ごと、及び出土地区・遺構・グリッドごとに点数をカウントし整理したものが表一・二である。カウント作業は、土井ノ外遺跡の遺物を収蔵する熊本県教育委員会文化課文化財資料室内で実施した。収蔵コンテナ（未報告資料）は、出土地区ごとに、土師器類・瓦質土器類・石製品（石そのものも含む）・青磁類（一箱）・陶磁器類（青花・近現代合、五・六箱分あり）に分類され収蔵されており、概ね、輸入陶磁器を含むと思われるコンテナを確認した上で、破片のカウントを実施したが、すべての収蔵コンテナを完全に実見できたわけではないこと、現地での作業時間が限られており分類照合にやや曖昧な点があったこと（特に青磁の無文部位破片）等から完璧に正確な点数計上・分類が成果

としてできたとは言いがたい。それでも、概ねの傾向としては、的外れなものではないと考えている。

両表左列の地区・遺構名・グリッド名は、それぞれ破片が収納されていたビニール袋に同封されていたラベルの記述を第一の指標とし、ラベルがない場合は破片の注記を元に名称を復元した。表中、「Ⅰ区Ⅴ―EG」等とあるものは、グリッドごとの取り上げと推察されるが、報告書にグリッド名の明記がないため、現段階では詳細な出土位置が不明である。同じ理由で、ラベルに遺構名が記してあるものの、報告書上、当該遺構の名称が見られないものもあり、これも出土地点が判明しない。このため、本稿では個別遺構の年代的評価に踏み込まず、一～三の各調査区の概ねの出土傾向を中心に検討せざるを得なかった点をお断りする。表中、左列は上から一区・三区・二区の順に配列しているが、これは一・三区が隣接しており一体的な位置空間と考えられたため、それに対し、二区はやや離れた調査区になるため、地域ごとの傾向を見る上で都合がよいため、このような配列とした。よって、土井ノ外遺跡は、一・三区と二区の大きく二エリアに区分されると捉えている。

なお、分類の基準は沖縄分類（瀬戸ほか二〇〇八）、一部中世前期の遺物は太宰府分類（太宰府市二〇〇〇）を適用している。

（三）カウント結果の分析

輸入陶磁器は総計六六五点が確認された。内訳は、青磁四六五点、白磁五九点、青花一〇四点、その他三七点であり、主体は一五世紀代の龍泉窯系青磁が占める。青磁の組成で、最も多い種類は雷文帯碗（Ⅴ―Ⅱ類）で四六点である。次いで、細線蓮弁文碗（Ⅵ―Ⅰ類）

が三八点、無文玉縁・直口碗三四点（V―〇類）、無鎬蓮弁文碗（V―一類）一八点となる。明瞭に、IV―〇類と確認できた破片は五点のみでV類破片よりかなり少ないため、V類段階から陶磁器が増加するのは確かであるが、主に端反口縁部の破片で、筆者の同定力不足によりIV・IV・V類分類不可としたものも二六点あり（註一）、今少しIV類もしくは、IV類段階からの遺物が多くてもおかしくはない。白磁は四都窯系のD類と景德鎮窯系のE類がほぼ拮抗している。白磁D類は瀬戸四期・五古期・五新时期（概ね二三五〇～一四八〇年頃）に使用され、白磁E類は六期（一五世紀末～一六世紀前半）になり白磁の主流となる。

青花はB一群皿が二六点と最も多く、次いで端反り碗一六点、E群碗一〇点となる。B一群碗は四点と計上しているが、今回、確実にB一群碗の特徴を備えているものだけをB一群としているが、「端反碗」と計上した破片の中で、B一群に含まれるものが多数あると思われる。端反り碗・B一群碗は、柴田圭子氏の整理図によれば（柴田二〇一一）、概ね一五世紀代に属すると理解して支障はない。であれば、青花類も、土井ノ外遺跡では盛期は一五世紀にあると考えられる。白磁もこの様相に齟齬は無い。

瀬戸六期の指標となる青花C群碗・皿、七期の指標となる青花E群碗・皿、漳州窯系青花皿類の出土も、未報告資料の抽出の中で確認できた。C群碗・皿が各六点、E群碗が一〇点確認できている。このことから、瀬戸六期以降も限府土井ノ外遺跡は機能していたことが確実である。遺構との関係ではC群・E群ともSD四・五から出土がみられており、このことから同溝は一六世紀後半まで機能していた可能性がある。ただ、全体の数としては、青花C群の数量は非常

に少なく、盛期である一五世紀中葉に比べると衰微気味であったことは間違いない。

これら青磁・白磁・青花各碗皿の出土状況からは、土井ノ外遺跡の存続年代は、概ね瀬戸四期（一三五〇～一四二〇年頃）から始まり、瀬戸五古期（一四二〇～一四六〇年頃）～五新时期（一四六〇～一四八〇年）にかけてピークがあり、六期（一五世紀末～一六世紀前半）以降は衰退しつつも、細々と継続する、とみることができよう。

さて、改めて表に戻ると、青磁奢侈品（盤・瓶・壺・袋物型物類）の数が七〇点にのぼり、全体の点数から見ても一割を超える比率を占める。前稿（中山二〇二一A）で確認したように、その中には、瓶・水注・鉢など列島での類例が限られる希少な破片が多く、その特殊性がうかがえる。また、青花大皿や法花壺、褐釉磁器、朝鮮象嵌梅瓶等も同じく希少な遺物といえるだろう。そのほとんどは、一区もしくは三区から出土しており、二区からは香炉や若干の盤が出土している程度にすぎない。このことから推測するに、一・三区周辺に、会所等の室礼具を多数保有する空間が展開していた可能性が高い。現段階では、個別の建物遺構のどれが会所遺構にあたるか、等については比定が困難であるが、今後、個別の遺構出土の遺物等から空間復元を検討していく必要もあるだろう。

出土遺物の多くが、包含層やカクラン層からの出土とされているので、各奢侈品が一時期にどの程度併存していたかは担保できないが、確認できた希少な遺物群を見ると、一・三区には唐物奢侈品を多数飾り立てる空間がかつて存在した蓋然性は高い。そう考えると、土井ノ外遺跡は守護館レベルの居館であった可能性は高いものと考えられる。

さて、輸入陶磁器は、全国各地の中世遺跡から出土しており、年代の物差しとして共通の編年が利用できる点で、利用価値が高い。一方で、食器としての耐久性が高いことから、入手から廃棄までのスパンが長期間になる可能性が考えられる。このため、少点数の輸入陶磁器片に依拠した遺構年代は、往々にして見誤ることがある。これに対し、素焼きの土器である土師器は、もろく汚損しやすい。このため、一度から数度の利用で廃棄されることが多く、生産から廃棄までのサイクルが短い。生産年代と廃棄年代がニアイコールとなり、より正確な遺構年代の捕捉に役立つのである。

しかし、土師器を編年の参考として使用するためには、当該地域における土師器の形式変遷を明らかにし、さらに絶対年代に当てはめる必要がある。このような土師器編年は全国各地で構築されているが、熊本県下においては、中世前期こそ美濃口雅朗氏により設定されているが（美濃口一九九四）、中世後期については未編成である。さらに土師器は在地性が強く、旧国単位（現在の県レベル）でも地域ごとの差異が顕著で、比較検討が難しい。本研究において、取り上げた隈府土井ノ外遺跡の土師器の形状も、筆者が日常的に調査研究に携わっている天草地域の土師器とは、全く形状が異なっている。おそらく中世後期における土師器の生産と流通は、支配勢力単位や平野ごとなどの地理的単位、あるいは都市・集落単位の、ローカルで完結している場合が多いのであろう。以下、出土土師器の検討を通じて、菊池地域における中世後期の編年案を提示したい。

二 出土土師器の分析

(一) 出土土師器の特徴と分類

報告書（熊本県教委二〇〇九）に掲載された土師器の点数は三七二点で、輸入陶磁器報告数四〇点の九倍強である。土師器は破片になると実測に耐えない資料も多いため、未報告資料分はコンテナに多数収蔵されている。収蔵状況を瞥見した印象から、輸入陶磁器の総点数六六五点に対して、土師器破片の点数総数は報告書比率である九倍以上、点数として一万点を超える可能性がある。他の出土遺物として播鉢などの瓦質土器も多数あるが、出土遺物の大多数を土師器が占める傾向は確かである。

土師器は、概ね口径一〇～一二cmほどの坏、口径七～九cmほどの小皿の二種類があり、中世後期の各地の傾向に整合している。今回は、器形の特徴が把握しやすい坏の特徴を中心に分析を行い、遺構出土の土師器を抽出し変化の方向性を見出すこととする。隈府土井ノ外遺跡では、文献記録と対比できる土層など絶対年代の手がかりに乏しいのが実状だが、共判する輸入陶磁器や広域流通品（備前焼播鉢等）などを参考に相対年代を推定したい。通常であれば、大友氏館跡や大内氏館跡などのように、周辺地域も含めた多数の発掘調査を経て、一括性の強い遺構から出土した遺物を素材に、器形の連続性やセリエーションから、編年を構築するべきであるが、隈府土井ノ外遺跡は一度の調査しか経ていないため、良好な遺構が少なく資料的制約が多い。牽強付会との批判は覚悟の上で、それでも、一応の編年案を提示しておくことは今後の菊池一族に關係する遺跡調査の発展のため

に無為ではないと思われる。今後の議論の基礎になれば幸いである。

図三は、豊後大友氏館跡から出土した土師器の系統分類図である（長二〇一・一A）。中世前期から続く断面箱型の在地系土師器のA系統、工具を使用した同心円状の内面の調整が特徴的なB系統、さらに京都の儀礼受容をエポックとして導入されたと考えられる、回転台を用いない手づくねによる「京都系土師器」のC系統が確認されている。これらの土師器は、時期的変遷により消長があり、一四世紀代から一五世紀末までA系統土師器が主体であるが、一五世紀末にB系統土師器がこれを駆逐し、さらに一六世紀初頭にC系統土師器が導入され、一六世紀代はB系統とC系統が併存しながら、それぞれに器形を変化させていくことが明らかにされている（図四・五）（長二〇一・五・二〇一八ほか）。これに政治的な結びつきがあった山口の大内氏関連地から持ち込まれたと考えられる大内式土師器が加わる構成となっている。

さて、図三に見られるA系統土師器はプロポーションが多様だが、これによく類似したものが限府土井ノ外遺跡からも確認される。その理由は定かではないが、当時、地域を越えた土師器の普遍性があったものかもしれない。これらのグループは、限府土井ノ外遺跡でも坏A類と位置付けておこう。坏A類には、口径と底径の差が少なく体部が内湾して立ち上がるタイプ（Ae）、体部が直線的に開くタイプ（Ah）などが見られ（図六上）、さらに口縁部形状にバリエーションが見られる。それぞれに対応する小皿も類型がある。これらは、菊之城跡などから出土した中世前期土師器の系譜を引き継いだものと捉えられよう。

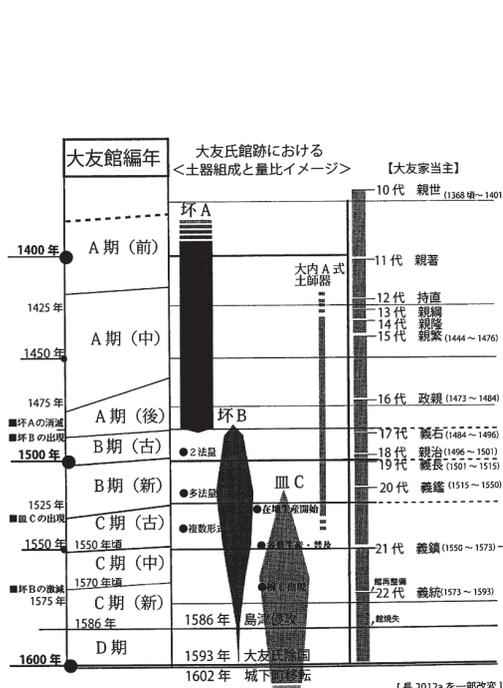
これに対し、限府土井ノ外遺跡で特徴的な土師器も見られる。体

部の中ほどが強く外へ屈曲し、外面に明瞭なナデの痕跡が残る土師器坏がそれであり、本稿では坏B類とする（図六下）。この種の土師器は、土師器を一括廃棄した土器だまり遺構である、SK八・九・一〇、SK一六・一七や溝遺構SD一八などで数多く出土しており、限府土井ノ外遺跡の土師器の主体を占める。またプロポーションや焼成状況による変化も看取される。器形が似ているが細部に違いがある坏BrとBsの先後関係の把握が重要になる。なお坏Bfは在来系のA類に位置付ける方が妥当という可能性もあるが、胎土・焼成の状況、見込みの盛り上がり方などにBsとの接点があるように考えられたため、ひとまずB類に位置付けておきたい。

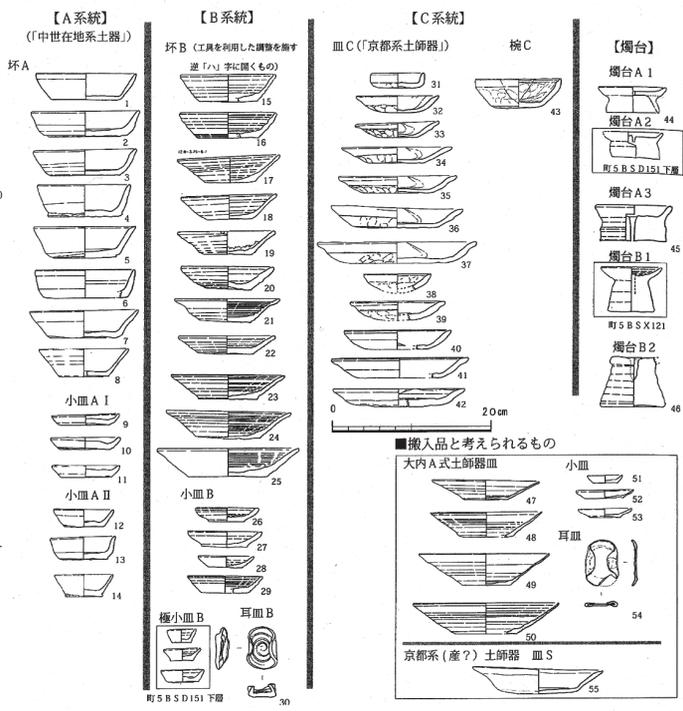
（二）坏B類の変化

坏Brと坏Bsは共に体部が大きく折れる器形が共通しているが、異なる点も見られる。まず、胎土・焼成について、Brは硬質焼成で堅緻ながら、内外器面に凹凸がびっしりとみられる例が多い。これは、Brの胎土がやや粗いために発生した現象の可能性があり、見込みにヒビ割れや糸切り底面に穴状の窪みが確認される事例も多い。また、外側屈曲点に対応する内器面の変化点に明確な稜が見られる例が多く、このため口縁部は鐙状の受け縁的な様相を呈している。見込み部分は、ボタン状に盛り上がるものと盛り上がりがないものとそれぞれがあるが、特に見込みが盛り上がりがないタイプに、見込み部の焼成ムラが看取できる。焼成時に何らかの物質を見込みに載せて焼いたために発生した焼けムラのように思われる。いわば備前焼の「ボタモチ」的なものである（図六Br写真）。

これに対して、坏Bsは、不純物の少ない胎土のため、器面の凹凸



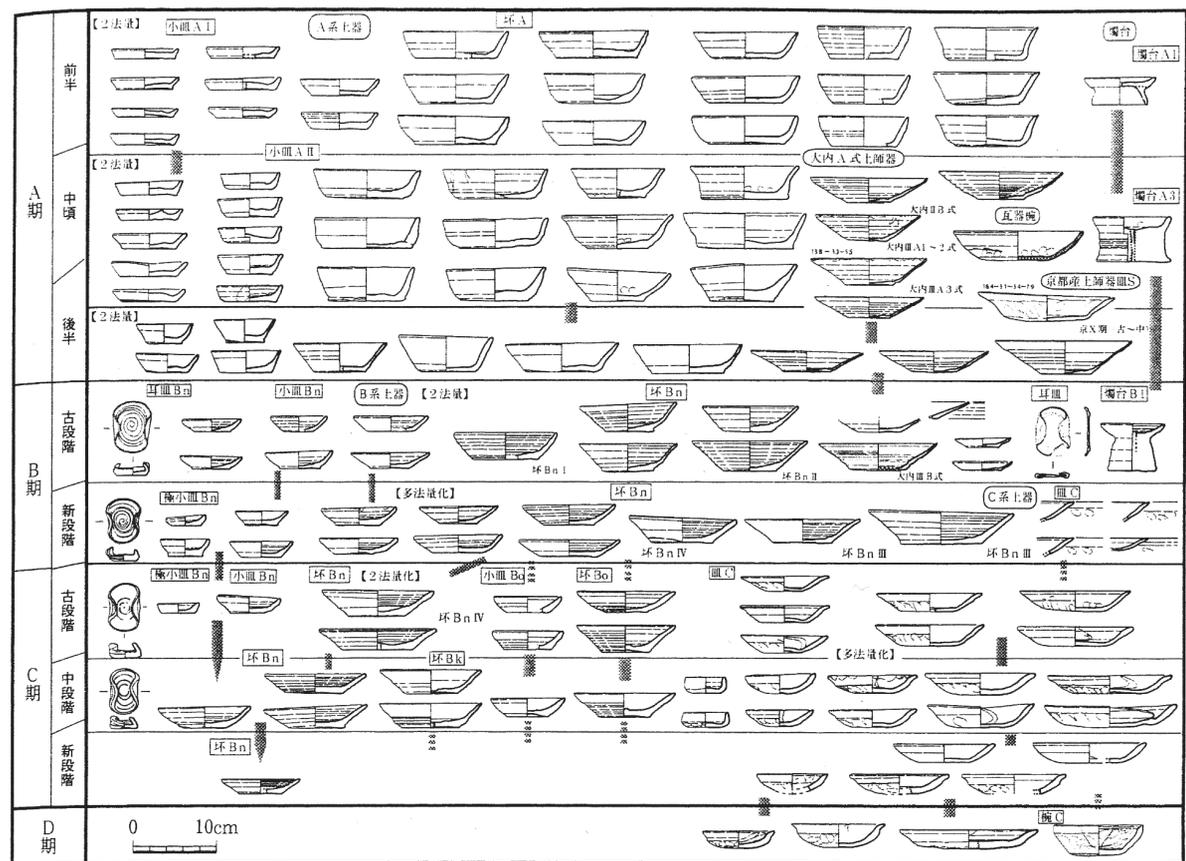
長 2015 より



長 2011A より

図4 大友氏館跡土師器編年と当主の関係図

図3 大友氏館跡出土土師器の系統分類図



長 2018 より

図5 大友氏館跡出土土器変遷図

が少なく、焼成はBrよりは軟質で橙色のものが多く、底面の窪みは少なく、見込みはボタン状に盛り上がるタイプが多い。その際、凸部の周縁にヘラで刻んだ圏線が二、三周廻るものが多い。この特徴は、同じ焼成の小皿でも特徴的で、坏Bsとセット関係にあることを示唆している。外側屈曲部に対応する内器面の屈曲はなだらかで、稜の強いBrと異なっている。器高はBrの方が全般的に低い。

坏Bfは、体部が朝顔状に外に向かって反りながら開く。器高が高い反面、底径はやや小さい。黒色の煤もしくは使用の汚れが付着しているものが多いため、胎土や焼成色が不分明なものが少なからずあるが、概ね橙色もしくは褐色であるものが主流である。見込みは盛り上がるものとフラットのものがある。外面に強いナデが見られるものがあり、橙色の色調から坏Brに類似しており、坏Bに分類した。

報告書掲載の坏について、出土遺構ごとに各分類の平均値を表にしたものが表三である。これには参考例として菊之城跡トレンチ一包含層出土の平均値を付した。菊之城跡のトレンチ出土土師器は、包含層であるので概ね一三世紀頃と、おおざっぱな年代しか言及できないが、口径二二・九八cm、底径九・六二cm、器高三・四五cmとなっている。これに対し、例えば、SK一〇の坏二六点の平均値は、口径一〇・六八cm、底径六・〇九cm、器高二・六二cmを測る。器高については坏Bfのように高いものもあるので、一概に言えないが、中世後期の平均は前期の土師器より口径・底径とも二、三cm小さくなるものと理解できよう。つまり、中世後期には土師器坏は小型化の傾向にあると考えられ、これは全国的に共通している。

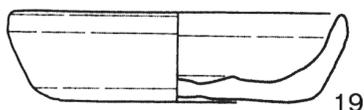
坏Brは主にSD一八から多く出土しており、出土二二点の平均は、上から口径・底径・器の順にそれぞれ、一一・二二cm、六・七〇cm、

表3 限府土井ノ外遺跡出土土師器坏の遺構・分類ごとの平均法量値一覧 単位 = cm

	計測点数	口径	底径	器高	備考
菊之城跡トレンチ1包含層	24点	12.98	9.62	3.45	13世紀頃・参考値
SD33 坏Ae (内湾)	8点	11.12	8.01	2.83	
SD33 坏Bf (深端反)	1点	11.00	6.20	3.40	
SD33 坏Br(腰折/凹凸)	1点	11.81	6.00	2.50	
SD18 坏Br(腰折/凹凸)	22点	11.21	6.70	2.55	
SD18 坏Ah (逆ハ字)	6点	11.41	6.95	3.06	
SD121 坏Bs (腰折/滑らか)	15点	11.55	6.38	2.98	
SD121 坏Bf (深端反)	5点	10.90	5.94	3.43	
SD121 坏Ae (内湾)	1点	10.80	8.00	3.30	
SD85 坏Bf (深端反)	1点	10.80	6.10	3.60	
SD85 坏Ae (内湾)	6点	10.71	7.50	2.89	
SK8 坏Bs (腰折/滑らか)	36点	10.37	5.91	2.66	
SK9 坏Bs (腰折/滑らか)	14点	10.82	6.22	2.75	
SK10 坏Bs (腰折/滑らか)	26点	10.68	6.09	2.62	
SK116 坏 大内系?	1点	12.80	4.20	3.50	
SK116 坏Bs大型 (腰折/滑らか)	1点	13.40	7.50	3.70	
SK116 坏Bs (腰折/滑らか)	20点	10.52	5.91	2.80	
SK117 坏Bs (腰折/滑らか)	1点	10.80	6.10	3.00	
SD186 坏Ah (逆ハ字)	4点	11.92	6.80	3.57	
SD186 坏Bf (深端反)	9点	11.33	6.33	3.60	
SD186 坏Br(腰折/凹凸)	1点	12.30	7.20	3.20	
SD272 坏Ah (逆ハ字)	2点	12.65	8.45	3.15	
SD99 坏Bf (深端反)	1点	10.80	5.50	3.10	

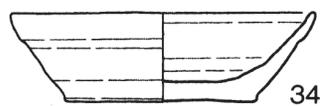
坏 A 類

Ae SD33 出土



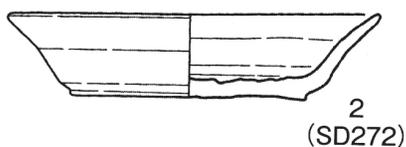
- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部が内湾気味に立ち上がり口縁部は直立
- ・胎土は桃色が多く、赤色粒を含む

Ah SD18 出土



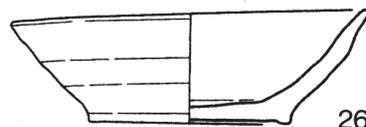
- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部が直線的に立ち上がる
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むもの多い

Aeh SD272 出土



- ・口径と底径の差が少ない
- ・体部は端反器形になる
- ・胎土はベージュ系。出土数少ない。

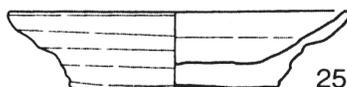
Ahh SD186 出土



- ・逆ハ字形に開く器形
- ・体部は腰部でやや張り、口縁は端反
- ・胎土は褐色形で、金雲母を含むものあり

坏 B 類

Br SD18 出土



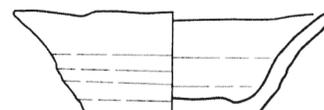
- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・口径はBsより広く、器高は高め
- ・外部は強いナデ
- ・見込みは盛り上がりずフラット
- ・屈折部の内器面側は稜が明瞭
- ・胎土は砂粒が多く、焼成が高度のためか器面が荒れ、凹凸がある。

Bs SK8 出土



- ・腰部で強く折れ曲がる
- ・外部は強いナデ
- ・見込みの中央がボタン状に盛り上がるか、見込みの際に沈線が入るもの多
- ・屈折部の内器面側はなだらか
- ・胎土は橙色で、焼成良好のもの多

Bf SD121 出土



- ・体部は直線的に開く
- ・体部の器厚が一定
- ・器高が高い
- ・底径が小さい
- ・見込みは中央部が盛り上がるか際に沈線が入るもの多
- ・胎土は良好で、橙色系多



坏 Br



坏 Bs

図6 隈府土井ノ外遺跡出土土師器分類案

二・五五cmとなっている。坏BsはSK八・九・一〇・一一六・一一七の土器一括廃棄遺構から主に出土している。遺構としてSK二一六はSK八に、SK二一七はSK九にそれぞれ切られており、このため、SK一一六・一一七がSK八などより古いと考えられる。坏が一点しか出土していないSK二一七以外の複数平均値は、SK八は三六点で二〇・三七cm、五・九一cm、二・六六cm。SK九は二四点で二〇・八二cm、六・二二cm、二・七五cm。SK二〇では二六点で二〇・六八cm、六・〇九cm、二・六二cm。SK二一六は二〇点で一〇・五二cm、五・九一cm、二・八〇cmを測る。SK八・九・一〇と、SK二一六の数値には、若干SK二一六の方が器高が高いものの、他に顕著な差は見られない。

坏Brと坏Bsでは、口径・底径は坏Brが一回り大きく、逆に高さは坏Brの方がやや低いと捉えられる。イメージ的には坏Brは、坏Bsを上から押しつぶしたようなスタイルと言えようか。その後関係の推定は、共伴遺物も加味して判断する必要があり、次節で考えることとしよう。

(三) 共判事例の抽出

次に各遺構の廃絶年代の検討から土師器の年代観を考える。本来であれば、短期間で遺構が形成され廃絶した遺構を抽出することが望ましいが、隈府土井ノ外遺跡ではSK八やSK二一六などに限られている。そこで、本稿では次いで土師器がまとまって出土している各溝遺構(SD)も対象として分析を進めたい。本来、溝遺構は利用期間が数十年にもわたる可能性があり、廃絶の作法も徐々に埋まってしまう場合があり、この点は現地で土層の堆積から判断されるものであり、本研究では言及できない。各溝から

出土した輸入陶磁器を見ると、複数の形式破片が確認されるものがあり、その場合は最も新しい遺物を廃絶年代の参考とするのが妥当である。以上の点に留意して、各遺構の土師器と共伴遺物の関係を類推する。遺構の位置は図七を参照されたい。

●SD八五・二二二(図八・九・一一)

一区中央部に位置し、主要な掘立柱建物跡群を区画するように約二〇mほど南北に走っている。SD八五・二二二・二三九と三つの遺構番号に区分されているが、実際には一本の溝と考えられている(熊本県教委二〇〇九)。輸入陶磁器は、SD八五から無鎚蓮弁文碗(V―一類)と見込みに梅月文を描く青花碗が出土している。この種の青花碗は、一四五九年に失火で廃絶したとされる首里城京の内跡SK〇一に含まれており(図一〇)、このことから、当該遺構の廃絶は一五世紀の第三四半期頃と想定しておきたい。土師器は深皿形坏Bfや屈折良胎の坏Bs、内湾する坏Aeを主体とするが、坏Brも数点含まれている。

●SD三三(図一一・一三)

一区南西部の溝で、SD二九と並走する。長さ約四m分が残っているが、南側の延長は攪乱層で破壊されている。出土遺物は内湾の坏Aeが八点あり主体となる。口径の平均値は一・一二cm、底径の平均値が八・〇一cmで、口径と底径の差が少ない。見込みのボタン状の盛り上がりが顕著である。その他の坏は、坏Bfと坏Brがそれぞれ一点ずつ確認できる。共判遺物が少なく、わずかに未報告の資料に中国天目碗破片があるが、遺構単体での年代推

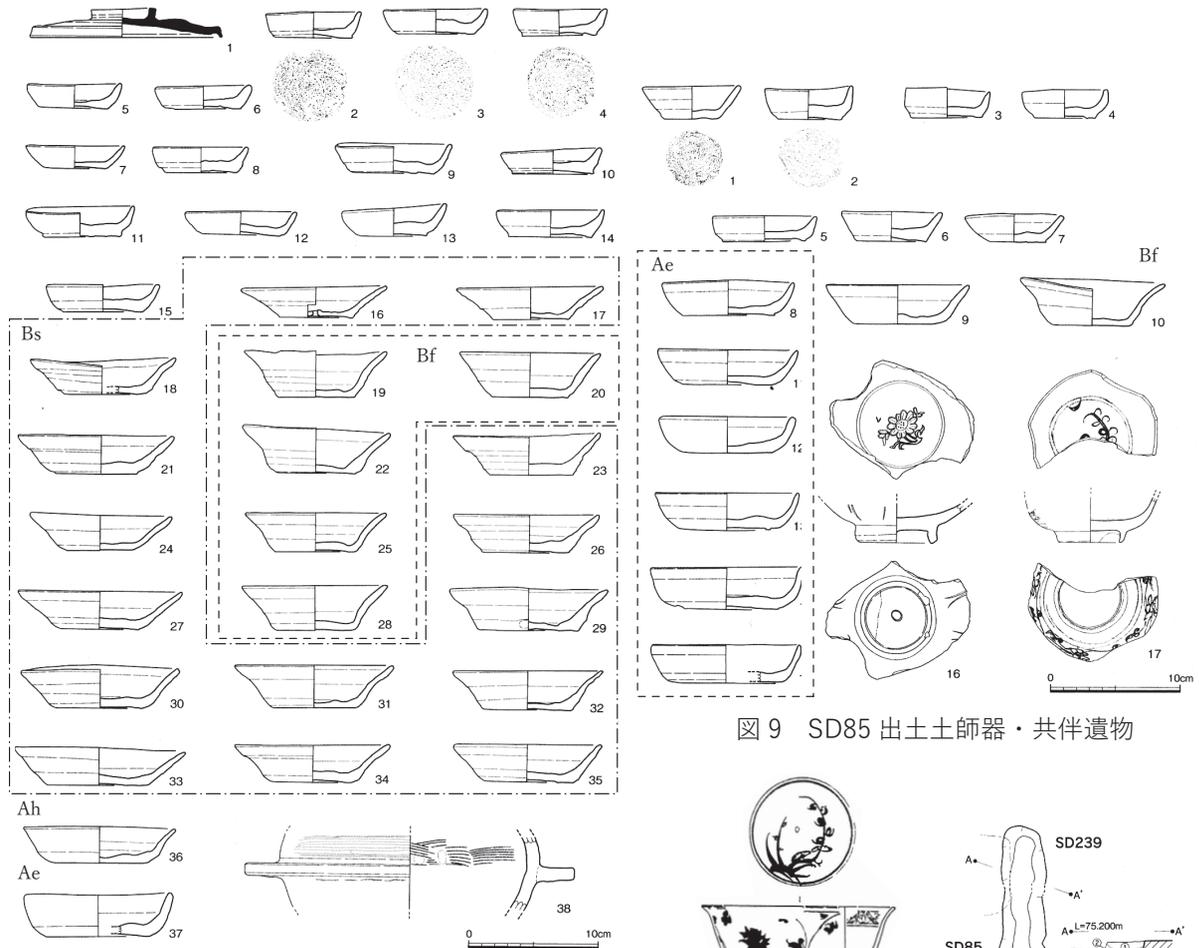


図8 SD121 出土土師器・共伴遺物

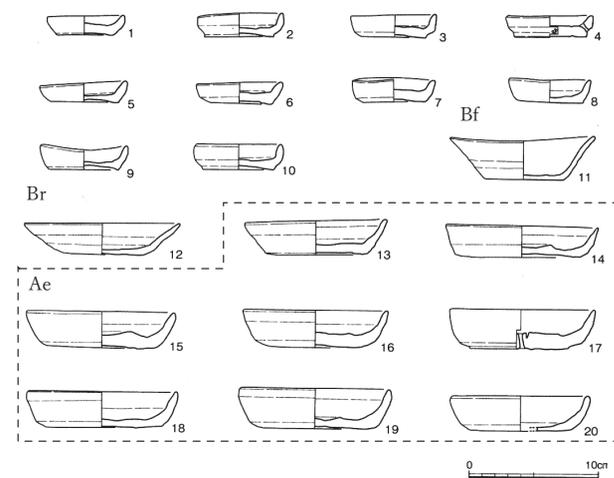


図13 SD33 出土土師器・共伴遺物

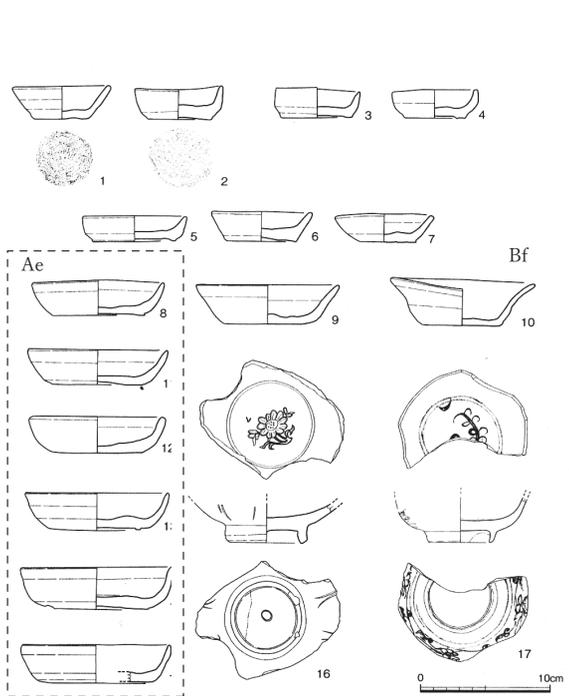
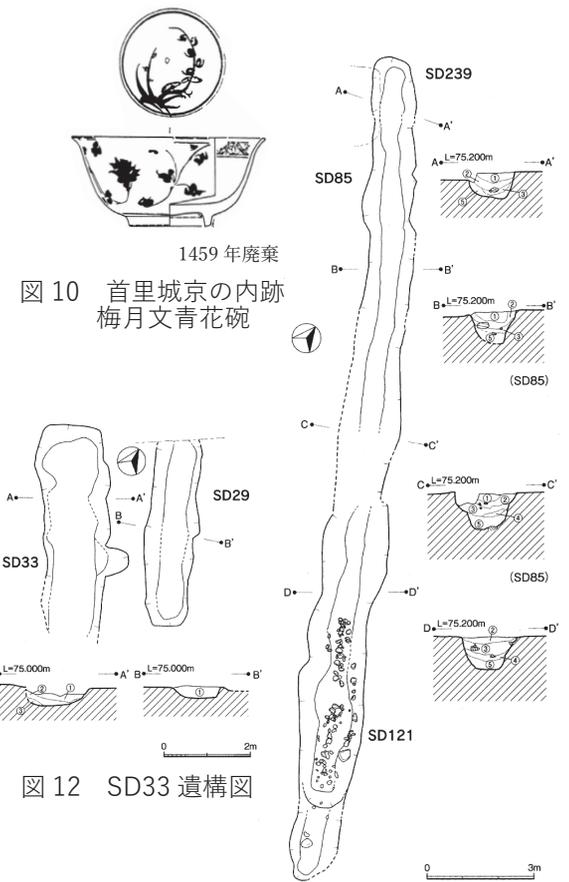


図9 SD85 出土土師器・共伴遺物



1459年廃棄
図10 首里城京の内跡
梅月文青花碗

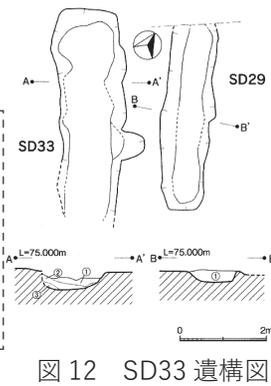


図12 SD33 遺構図

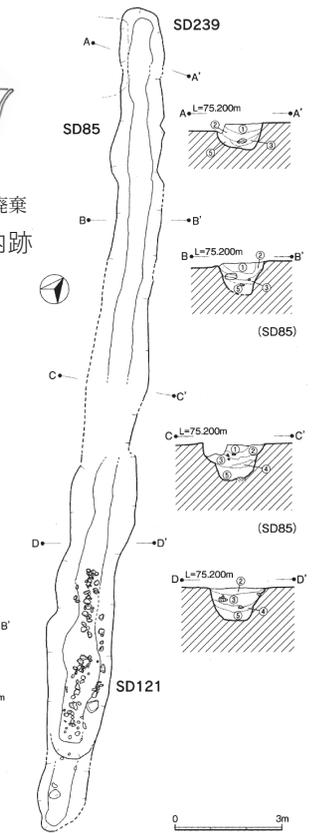


図11 SD85・121 遺構図

定は難しい。

●SD一八(図一四・一五)

一区北西部に位置する溝遺構。約7m分が残っており、溝の西側肩部に石敷状の不明遺構SX一二が付属している。

屈折する坏は、すべて坏Brで統一されており、坏Bsは含まれていないが、No.三五はボタン状の見込や胎土が坏Bsに類似する。No.三一・三二・三四・三六・三七は坏Ahでいずれも褐色系の胎土で、中世前期からの系譜を引き継ぐタイプの坏である。一部には金雲母を含むものがある。No.三五は判断に迷ったが、器形から坏Ahグループに含める。

報告書に釉だまりを持つ中国天目碗が掲載されており、また未報告の遺物に、内面口縁部に雷文帯を有する青花端反碗の破片がある(写真)。大きく一五世紀中葉と捉えることができよう。

●SK八・九・一〇(図一六・一八～二一)

SK八と九・一〇は、多数の土器が出土した土器だまり遺構で、一区南西部、SD三三の付近で検出されている。SK八は長軸〇・八四cm・短軸〇・六八cmの円形土坑で、より古い土器だまり遺構SK一一七を切つて構築されている。同様にSK九・一〇(同一の遺構)は、より古い土器だまりSK一一六を切っている。このことから、SK一一七とSK八の土師器、同じくSK一一六とSK九・一〇の土師器には先後関係があるはずである。

SK八・九・一〇のいずれも、坏はBsがほとんどを占めるが、SK八では三点(No.四四・五七・六二)、SK九では一点(No.二五)、

SK一〇でも一点(No.二三)とそれぞれ、坏Brが確認できた。SK一一七のサンプル数が少ないのが難点だが、SK一一六・一一七はすべて坏Bsで、坏Brは含まれないため、SK八等の廃棄時点が、坏BsからBrへの変遷の過渡期にあつたと考えたい。

SK八・九・一〇出土遺物は、ほぼ土師器で占められるが、唯一、SK九から龍泉窯青磁が一点出土している(No.三八)。この青磁は、高台付近しかない破片で、素地・釉層とも分厚い。外底は蛇の目釉剥ぎで、釉色は水色である。おおよそ一五世紀代の青磁であるが、報告書では碗とされているものの、器形から皿と判断される。見込みおよび残存の外面は無文である。高台付近からわずかに腰折れして立ち上がる屈曲が認められる。沖縄分類では皿V一〇・三類とされ、腰部部位の径がおおよそ一一・四cmを計測するため、大ぶりのタイプであろう。あるいは欠損している口縁付近では八角形を呈する可能性もある。無文の腰折皿V一〇類は、瀬戸四期(一三五〇～一四二〇年)から現れるが、当該期はかなり長めの期間であり、実際には、SK一一六との関係から、やや新しく見て一五世紀前半頃としておく。

●SK一一六・一一七(図一七・二二・二四)

SK一一六はSK九・一〇によって切られ、SK一一七はSK八によって切られている。これはいずれも土師器の廃棄土坑であり、隈府土井ノ外遺跡では他に土器だまりは確認されていないことから、土器の処分場所が定められていた可能性が高い。

SK一一六は小皿二〇点、坏二三点が出土しており、また一点のみ口径三・二cmの極小小皿がある(No.一)。坏二三点のうち、二一点は

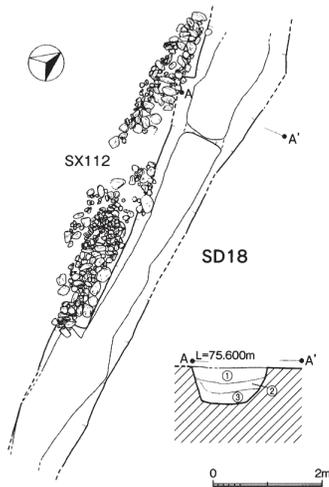


図 14 SD18 遺構図

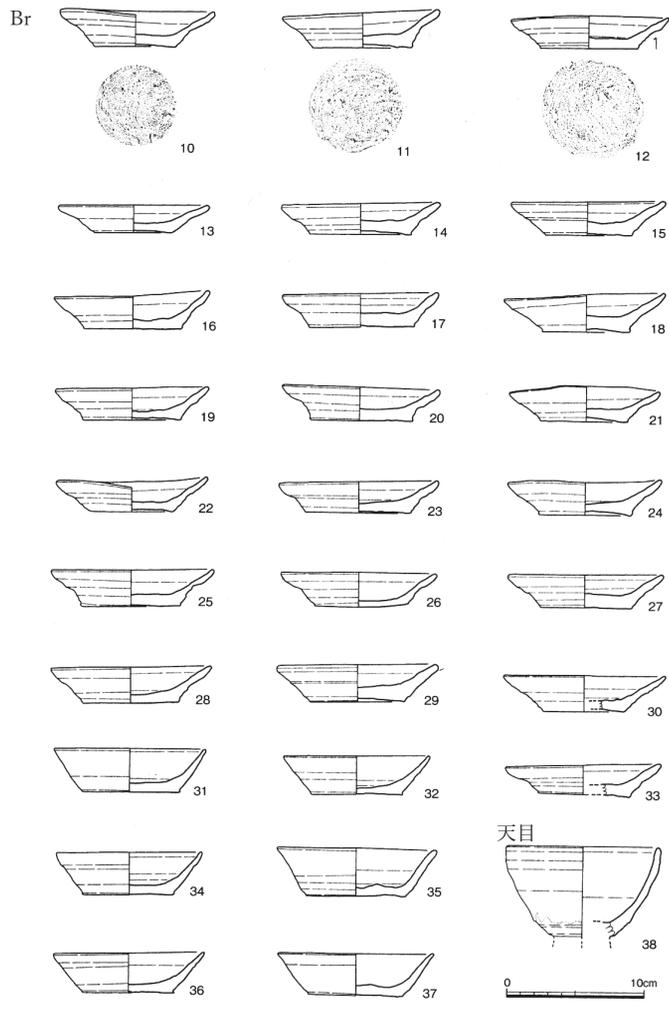
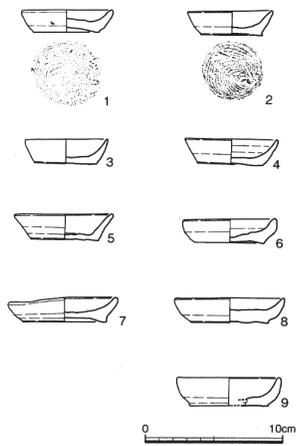


図 15 SD18 出土土師器・共伴遺物

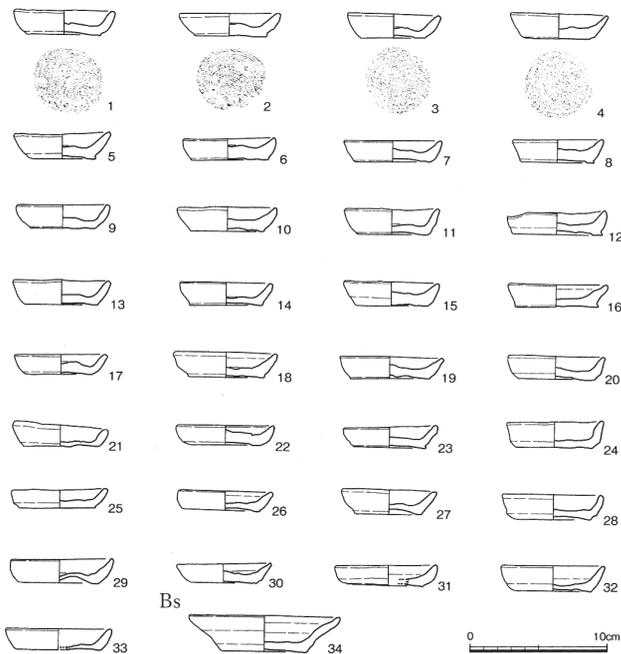


図 18 SK8 出土土師器 1

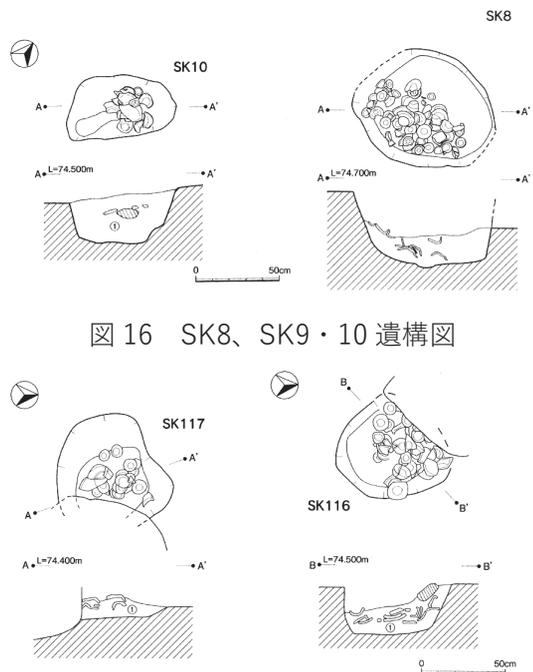


図 16 SK8、SK9・10 遺構図

図 17 SK116、SK117 遺構図

坏B sで胎土が良質なものが多い。見込みにボタン状の盛り上がりがあるものは、ボタン部外周に沈線が廻るものがある。No.二三は特徴は坏B sに等しいが、口径二三・四cm・底径七・五cm・器高三・七cmと通常の坏B sより一回り大きい。極小皿の存在とあわせ、法量の差は興味深い。No.二三は、他に類例のない特殊な器形で、口径は一二・八cmを測るのに対し、底径はわずかに四・二cmに過ぎない。器壁は薄く、体部が緩やかに大きく開き、全体的に内湾気味ながら直線的に立ち上がる。総じて、ナデが丁寧である。色調は淡い桃色である。隈府土井ノ外遺跡の土師器坏としては非常に特異で、他に同様の土師器は確認できていない。このため、搬入土器の可能性を考え、類例を探索したところ、プロポジションとしては山口県の大内館跡で設定されている大内II A式の坏にもつとも近似しているといえる(図二三)。ただし大内館跡の土師器皿は白色土器が多いため、色調が適合するかは不明である。あるいは、大内館跡のものではなく周辺の町家等で用いられたタイプかもしれないが、このあたり未確認で、今後の課題である。なお、北島大輔氏の編年によれば、大内II A式は一四世紀末から一五世紀前半に該当すると設定されており、SK一一六も一応、その時期としておきたい。SK一一七からは坏はB s一点のみの出土で、年代決定に資する共伴資料は確認できていない。SK八とSK九・一〇による遺構の改変状況を見ると、SK一一六とSK一一七はほぼ同一時期の遺構と判断してよいものと思う。

●SK五八・五九(図二五・二六)

平面プランが隅丸方形の土坑。いずれも長片が東西に長く、SK五八は掘立柱建物跡SB一二の、SK五九はSB九一の南側に平行し

て検出されている。SD四・五やSD八五・一二一などは直交する向きになる。出土土師器は少ないが、それぞれに耳皿が出土している。また、報告書ではSK五九で青磁雷文碗(V―II類)の出土も明らかにされている。未報告資料では、SK五八で白磁E群皿の高台部小片、SK五九で青花C群碗の破片(写真)が確認できた。このことからいずれも瀬戸六期(一五世紀末から一六世紀前半頃)の遺構と推定する。耳皿は体部に強いナデ痕跡が線状として残っており、SD九九の坏B fに見られるナデに類似するように看取される。

●SD一八六(図二七・二八)

調査区二区で検出された溝遺構で、九〇度の屈曲を伴う溝である。出土土師器は、坏B fが九点、胴部が張る坏A五点等が確認されている。輸入陶磁器では、端反青磁碗・雷文青磁碗・文様型打ちの雷文青磁碗も二点報告されている。未報告資料の確認中、SD一八六から出土した備前焼播鉢と青磁細線蓮弁文碗の破片を確認している(写真)。この備前焼播鉢は、口縁部が直立化しつつ「く」の字に内傾しつつある段階のものと考えられ、乗岡実氏の編年では、中世五b期に該当するものと考えられる(図二九)。乗岡編年では中世五b期を一五世紀末としている。この年代は、瀬戸六期に該当する青磁細線蓮弁文碗破片と矛盾はない。SD一八六は、一五世紀末頃の廃絶と推定しておく。なお、SD一八六の坏A h群は薄手で灰黄色に近いものが多い。また、図二八―No.二四は、やや器高が高いが、器壁に荒れがあり、見込みがフラットであり、坏B rである。

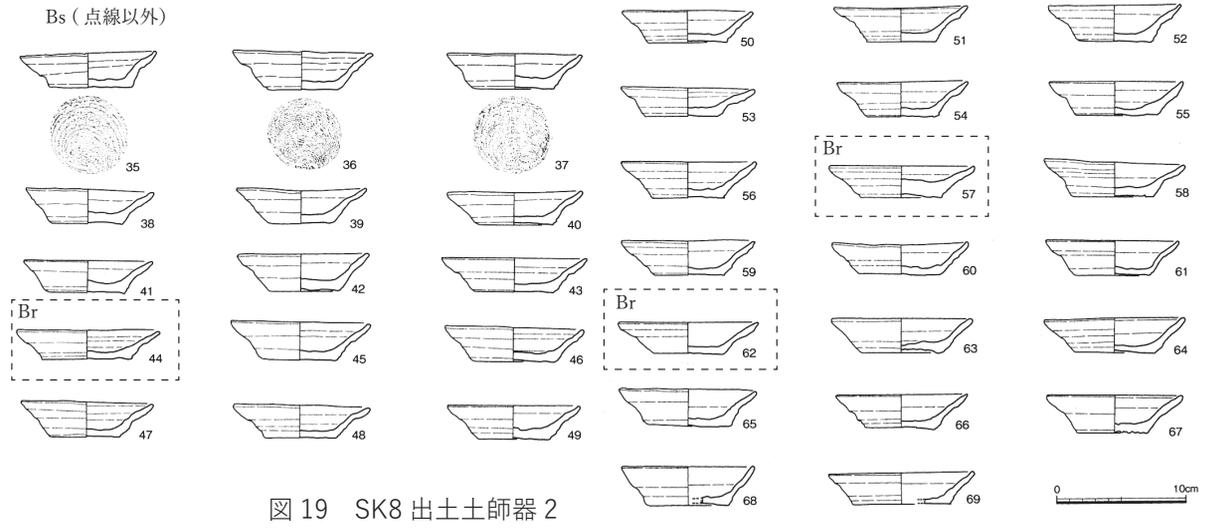


図 19 SK8 出土土師器 2

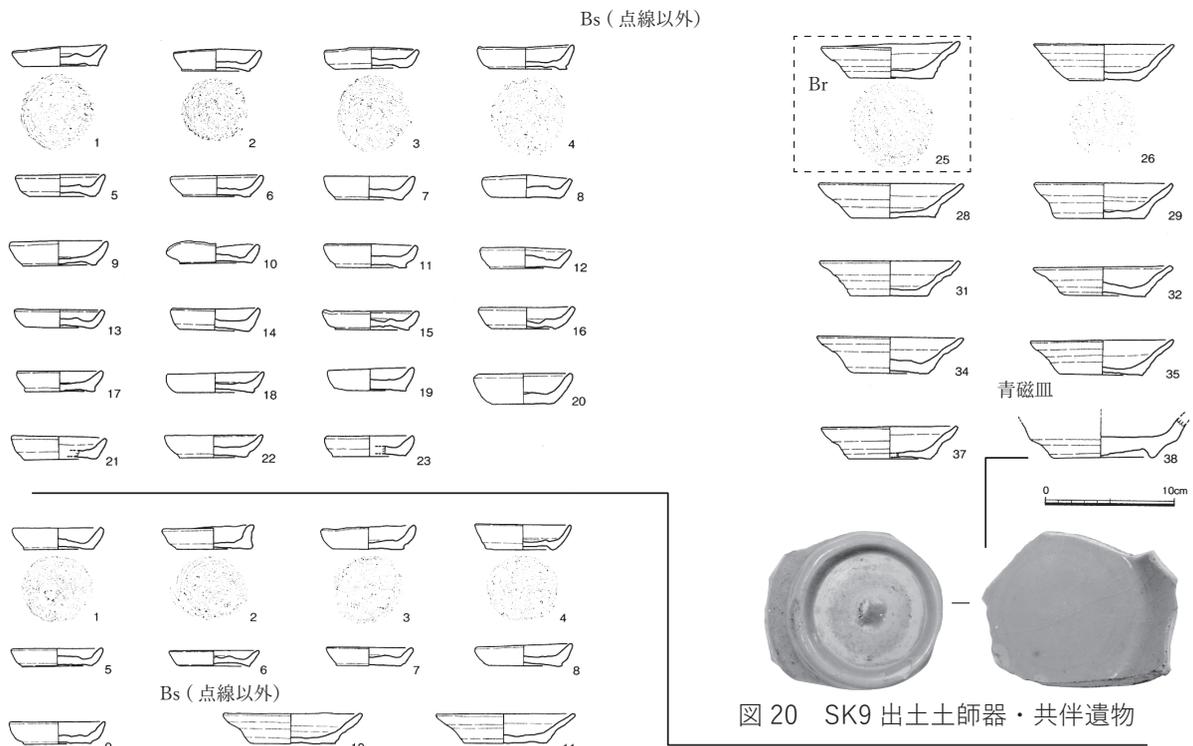


図 20 SK9 出土土師器・共伴遺物

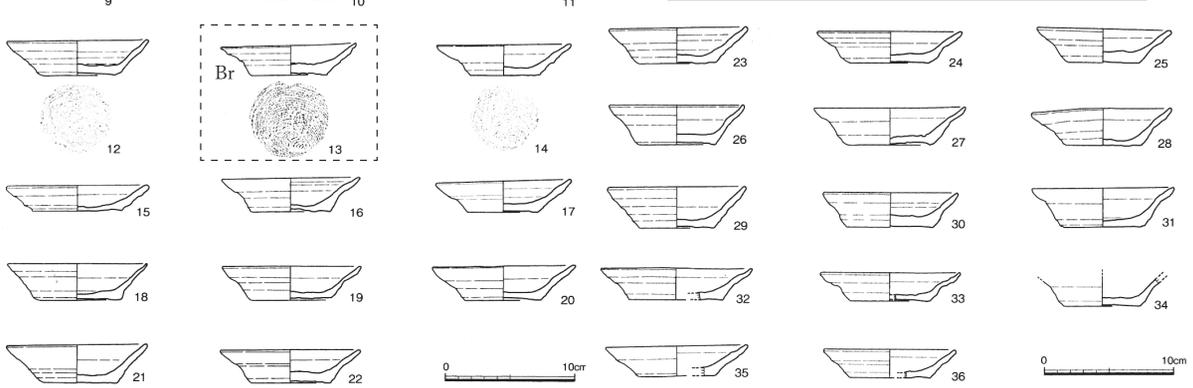


図 21 SK10 出土土師器

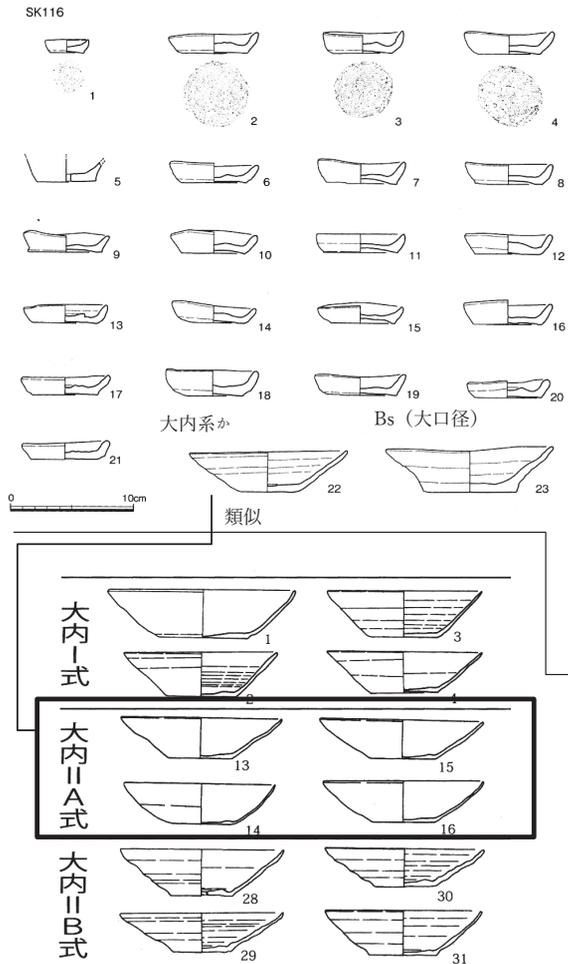


図 23 大内II A 式土師器 北島 2010 より

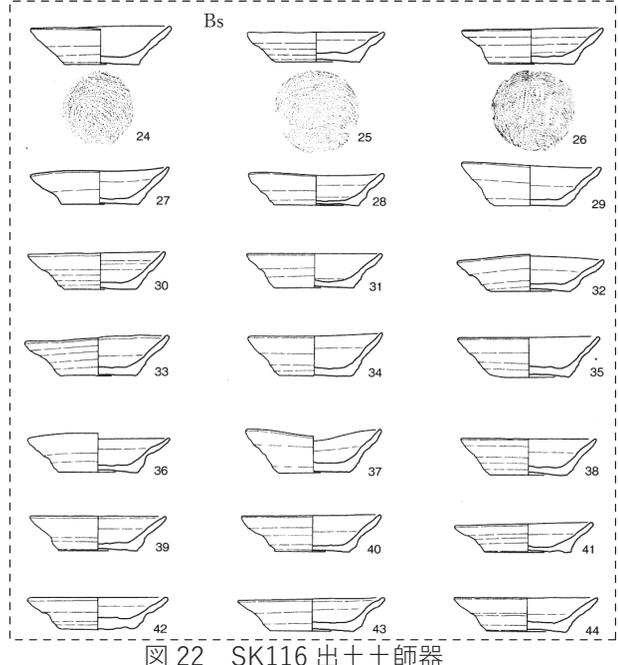


図 22 SK116 出土土師器

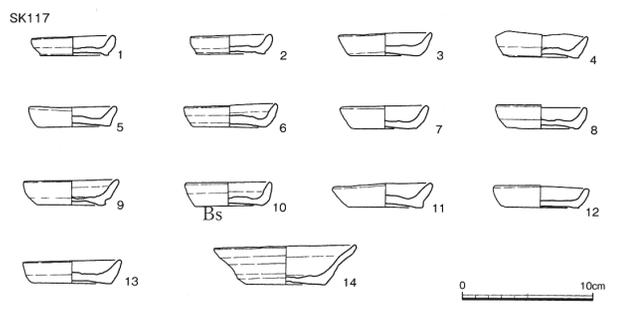


図 24 SK117 出土土師器

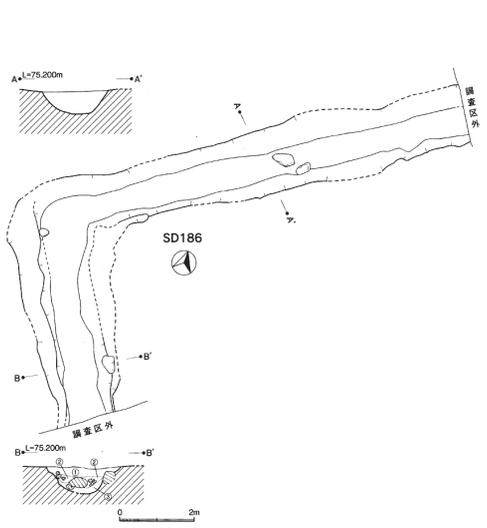


図 27 SD186 遺構図

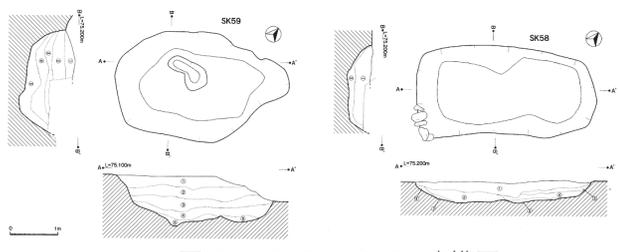


図 25 SK58、SK59 遺構図

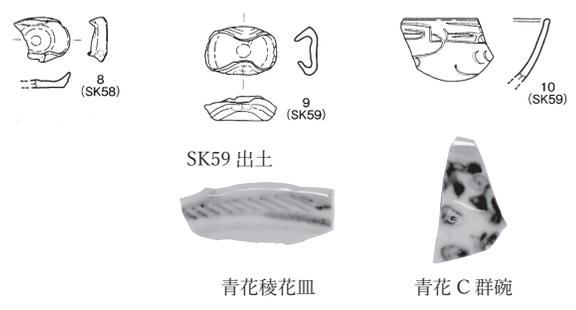


図 26 SK58、SK59 出土土師器・相伴遺物

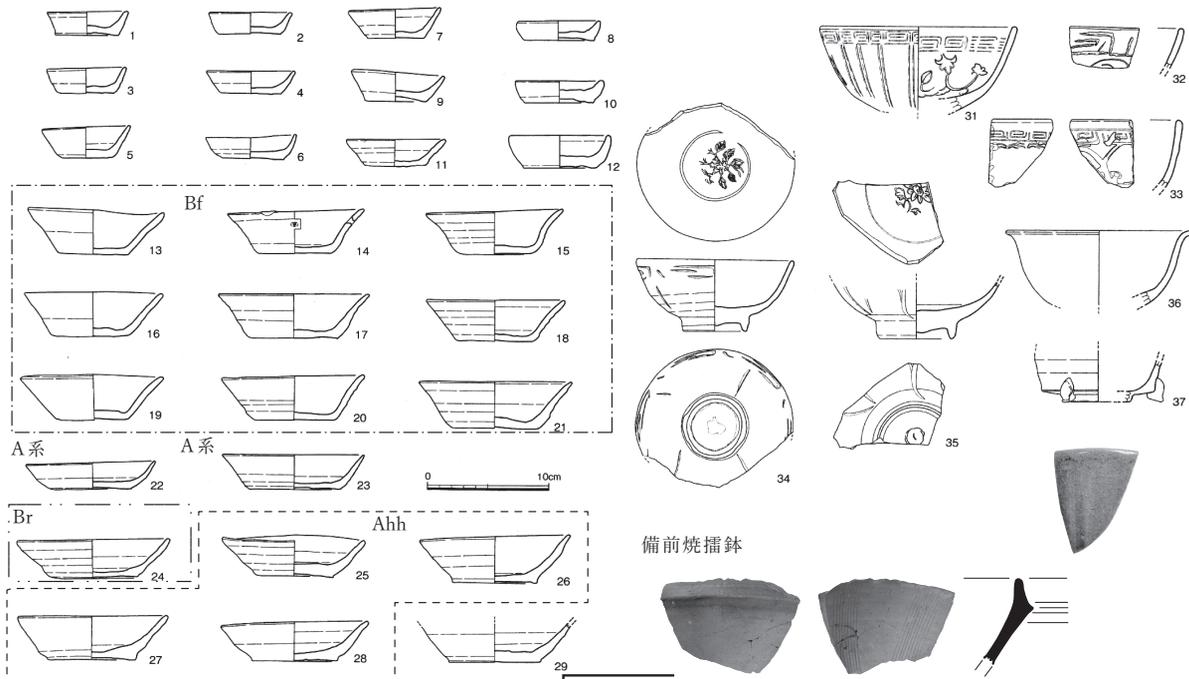
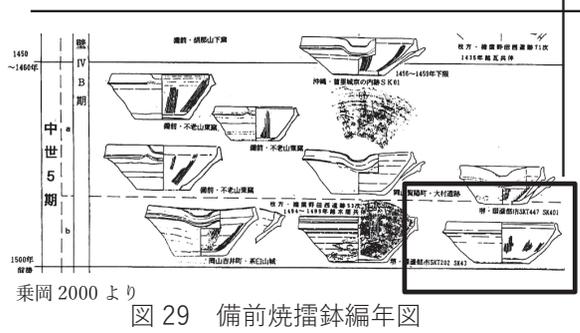


図28 SD186 出土土師器・共伴遺物



乗岡 2000 より
図29 備前焼播鉢編年図

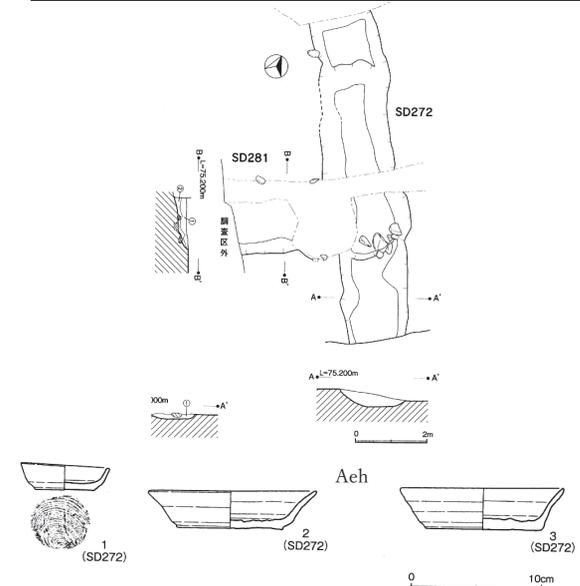


図31 SD272 遺構図 / 出土土師器・共伴遺物

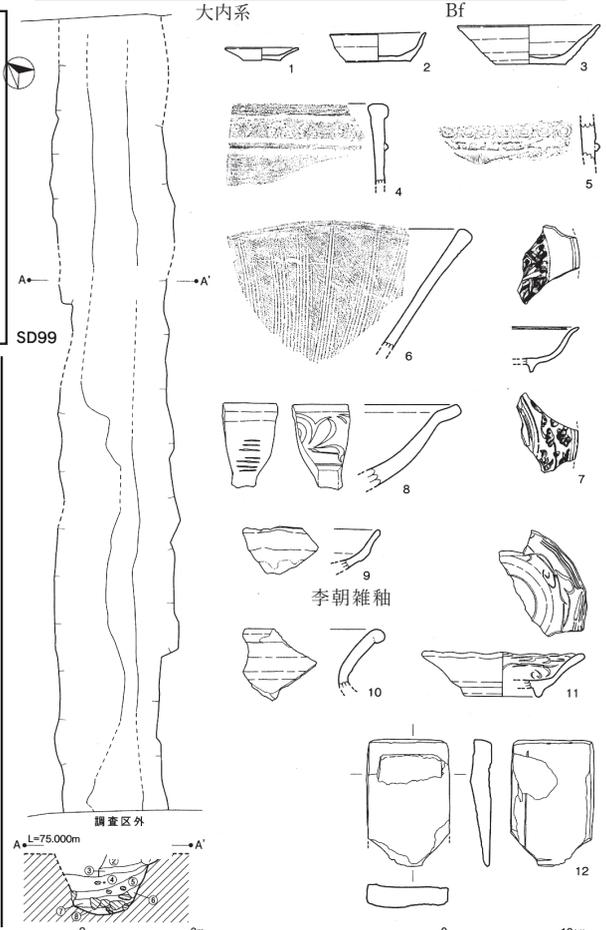


図30 SD99 遺構図 / 出土土師器・共伴遺物

●SD九九(図三〇)

調査区二区を東西に貫く大型の溝遺構。報告書では、一区を南北に走るSD四・五と接続すると確認されており、屋敷地を区画する大溝と考えられている。

まず輸入陶磁器は青磁盤や朝鮮半島系雑釉陶器、石硯等とともに、端反の青花B一群皿、青磁VI類とされる腰折稜花皿が出土している。遺構の廃絶は瀬戸六期(一五世紀末から一六世紀前半頃)と推定される。未報告資料はこれより古い年代の破片が多い。また、この溝からは前稿で報告した茶臼が出土している。

出土土師器は少ないが、一点確認されている坏は、橙色系で外面に強いナデがある。体部は直線的に立ち上がる。見込みは盛り上がりがほとんどないが、中央部は渦巻状の回転痕跡がある。器高が低いが、坏Bfに位置付けておきたい。なお、薄手で体部が開き、器高がきわめて低い小皿No.一は、類例の少ない白色系の胎土で、大内系など搬入品の可能性が高い。大内ⅢB式に実測図が類似する小皿が確認できる(北島二〇一〇)。大内ⅢB式は一五世紀末に位置付けられており、矛盾がない。

●SD二七二(図三一)

二区の北西に南北に走る溝で、延長は約七m。南側をSD九九に切られており、また中央部をSK一六二に切られる。SD九九は、SD四・五と並んで、屋敷地の基盤となる区画の大型溝であるので、かなり長期間使用されていたはずである。とすれば、SD二七二は限府土井ノ外遺跡の中でも、初期に位置付けられる遺構の可能性がある。出土した坏二点は、坏Aのバリエーションとして坏Aehと位置付

けたが、二点の法量が、それぞれ一二・八cm・八・一cm・三・〇cm、一二・五cm・八・八cm・三・三cmである。大きさからは中世前期に近いサイズで、また唯一共伴する輸入陶磁器が、華南系の青磁で兜巾状の高台の破片であり、いわゆる同安窯系青磁の可能性がある。これらの状況からはSD二七二の土師器は一四世紀以前に位置付けられる可能性がある。

(四)土師器編年の設定

ここまで見てきた溝と土器だまりの共伴遺物年代から、土師器編年を図三二のとおり設定した。重ねて言うが、年代設定に用いた資料の限界から、あくまで暫定的なもので、今後、新資料の増加と共に、全く様相が変容する可能性も十分にある。

基本的には、一四世紀代および一六世紀代の確実な遺構が確認できなかつたため、ほぼ一五世紀代の中での変遷と捉えた。

在来系土師器である坏A類は、類似する器形が散見される大友氏館跡のA系統土器を参考にすべきだが、長直信氏が「一四・一五世紀の坏Aの形態は極めて多様性に富み、「A期中頃と後半の土器群の時期区分については、改めて検討が必要」と指摘している(長二〇一五)。限府土井ノ外遺跡の坏A類でも、連続性などの把握に至らなかつたため、本稿では坏B類を主体として設定した。

未報告資料も含めて、土師器の破片は大多数を通覧したが、手づくね生産による、いわゆる「京都系土師器」は見いだせなかつた。これは、限府土井ノ外遺跡では、大内氏や大友氏で京都系土師器を導入した時期に該当する一五〇〇年以降の確実な遺構が無いこと、あるいは菊池氏が京都系土師器の導入に積極的でなかつたこと、などの

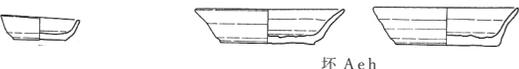
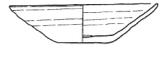
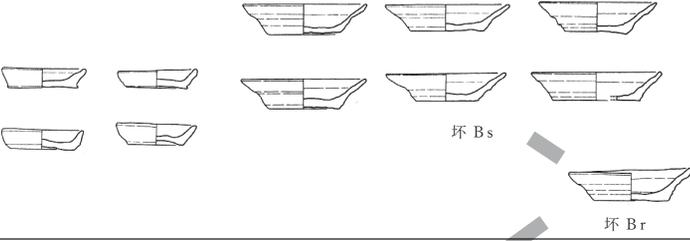
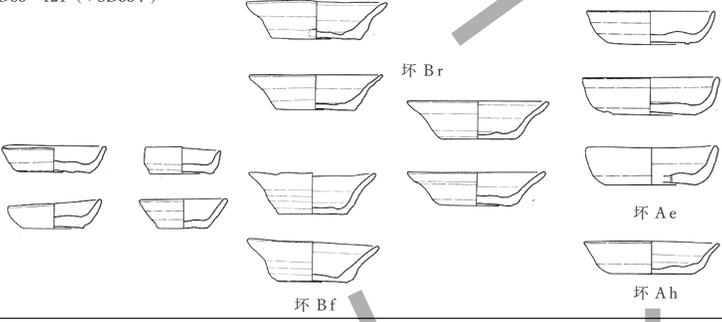
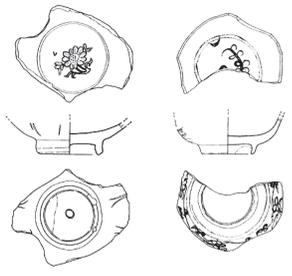
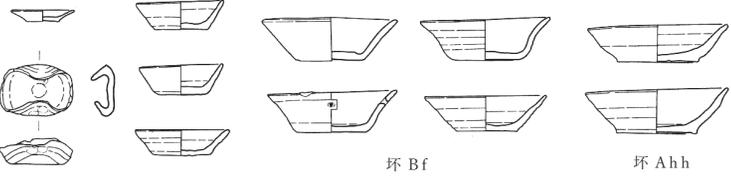
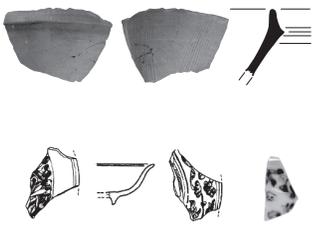
	土師器	共伴遺物
一四世紀	SD272 	
一四世紀末 一五世紀第一四半期	SK116・117 	
一五世紀第二四半期	SK8～10・SD18 	
一五世紀第三四半期	SD85・121 (+SD33?) 	
一五世紀第四四半期 一六世紀初頭	SD99・186・SX58・59 	

図 32 限府土井ノ外遺跡土師器編年案

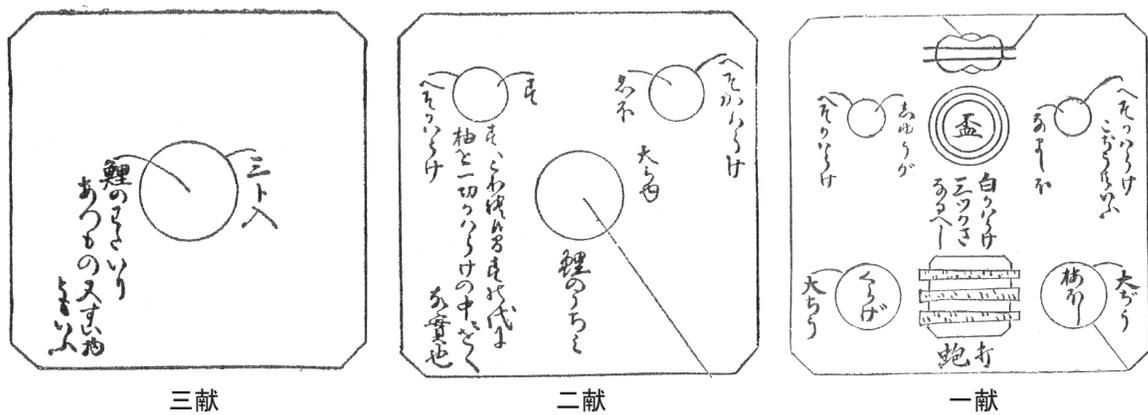


図 33 『宗五大艸紙』に見る式三献の配膳図

理由が考えられるが、あくまで想像の範疇である。輸入陶磁器には一六世紀代の遺物がいくらか確認できたとは言え、当該期の遺構の存在が全く不明であり、また一六世紀代に設定できる土師器の形式が見出せなかったことは、主殿・会所の機能が別の空間に移転したことを想起させる。一六世紀に入ると、文亀元年（一五〇一）の菊池能運の島原亡命から、阿蘇武経や大友重治らの相次ぐ家督継承など変転の中で、豪華な青磁唐物のディスプレイや饗応による多量の土師器消費などで殷賑を極めた限府土井ノ外遺跡も、政治中枢としての機能を喪失した可能性がある。

三 文献史料からみる土師器使用

(一) 武家儀礼・饗宴と土師器

土師器の皿や坏は、戦国期の武家儀礼に主に用いられていたことが、さまざまな故実書から明らかである（脇田一九九七）。全国の守護居館遺跡、もしくはそれに準ずる遺跡でよく見られる土師器の大量出土、とりわけ一括廃棄遺構の存在は、この故実書の内容を裏付けている。居館の主殿で催される君臣の身分確認儀礼「式三献」から、それに続く会所での饗応・酒宴に至るまで、一連の儀礼にあつては、酒の器としても肴の皿としても、主に土師器皿坏が使用されており（図三三三）、その使用実態は、特に朝倉氏や三好氏などの大名屋敷への將軍御成時に詳細が記録されており、把握することが可能である（埴二〇二三）。守護居館は、幕府の御所空間をモデルとして、建物の配置や機能を寄せた造りになっており、また、そこで行われる儀礼・

行事もセットで模倣、ハード・ソフトひっくるめて空間ごと導入を図っているケースが多い。これにより武家棟梁の権威を自地域に重ね、領国経営を正当化する依り代としたのである。

破損や汚れの付着などにより役割を終えた土師器は、居館内もしくはその周辺の土坑などにまとめて廃棄され、これが土器だまりとして発掘調査により検出されることになる。

このような場において、土師器が盛んに用いられた背景として、かつては「一度きりの使用で処分し、清浄さを強調した」と考えられてきたが（藤原一九九七）、酒がしみた時に交換する給仕作法や肴を載せる際に「かいしき（搔敷）」を敷いて載せることが『酌并記』等に記されていることから、中井淳史氏はある程度の回数を使用したうえで廃棄された可能性が高いことを指摘している（中井二〇一一）。このため、可能な限りは繰り返し使用がなされたものとも認められる。とはいえ、日常の飲食器を担った漆器、中国陶磁器や瀬戸美濃系陶器等の什器に比べれば、その寿命は著しく短く、せいぜい数回の利用で汚損し、その都度、新しく補充されたものと考えられる。

先にいささか触れたが、將軍家の御座所があつた京洛では、京都系土師器と呼ばれる手づくね土師器が出土するが、一六世紀頃になると大内氏館跡や大友氏館跡でもこれを模倣した非ロクロ成形の土師器が導入されており、室町幕府に近い関係にあつた両氏が將軍家に由来する武家儀礼を自家でも実践することで、幕府の権威に接近したものと評価されている。京都系土師器の生産・消費の開始時期は、両遺跡の土師器編年から、大内氏では一五一〇年前後、大友氏では一五三〇年頃と想定され、二〇年ほどのタイムラグを以て大内氏が

先行していると考えられている（長二〇一八）。法量の細分化と共に、式三献などの儀礼を少しでも將軍家のスタイルに寄せ、その権威を再生産しようとしたものと捉えられる。

式三献に関する文献史料を確認した小野貴史氏は、大内氏に関して、大内政弘が伊勢貞藤から作法を教示された『御成次第故実』、永正六年（一五〇九）に、大内義興がやはり伊勢氏から礼法故実の指南を受けた『大内問答』の存在を挙げる。また、大友氏に関しては、同じく永正六年に大館氏から伝えられた『殿中年中行事』と大永三年（一五二四）に小笠原光清から伝えられた『小笠原光清秘聞書条々』の入手を例示する（小野二〇〇一）。概ね一五世紀末から一六世紀前第一四半期におさまり、なお、大内氏が太友氏より先行する流れは、両氏の京都系土師器の導入と大きく齟齬は無いように思われる。

これに対して、限府土井ノ外遺跡では、今回確認した限りでは、京都系土師器の出土は確認できず、出土土師器のほぼすべてが回転台土師器で占められていた。ここまで見てきたように、土井ノ外遺跡では一六世紀の遺構は皆無であるので、京都系土師器の導入前に居館が終焉を迎えた可能性が示唆されるが、菊池氏側からの足利幕府に対する距離感についても視野に入れ、今後、検討を重ねなければならぬ。

（二）絵巻に表現された土師器

次に、中世に描かれた絵画資料から、土師器使用の様子について確認しておきたい。

図三四は、『前九年合戦絵巻』（写本）の酒宴場面である。絵巻自体は一一世紀中葉の陸奥守源頼義と安倍氏との合戦を描いたもので、

絵巻の成立は一二世紀末頃とされている。「將軍」と記される頼義を中心に、子息義家や大宅光房、藤原景通など主従が車座になって飲食に興じている場面を描くが、正面感で確認できる頼義・義家・光任らの膳を見ると、食器・酒器共に土師器皿が利用されており、また箸置も土師器皿と思われる。頼義の膳は、肴と箸が足付の膳、酒の膳は足の無いものとなっている。義家の膳は足付だが、膳はひとつのみしか配置されていない。光任もまた単膳で、こちらは足の無い膳のみである。ここからは、主従のヒエラルキーが膳の数と足の有無で表現されており、飲食器がいずれも土師器であることが理解できる。頼義の対面には、酒容器を持った小姓が控えている。

この絵巻の姿は一一世紀の姿というよりも、一三世紀末の食膳状況を適用させた可能性も十分に考えられる。

図三五は『慕婦絵詞』（写本）に見られる食事及び調理の風景。『慕婦絵詞』は、西本願寺三世の覚如上人の伝記を絵巻としたもので、室町時代初期にあたる正平六年・観応二年（一三五二）の作とされる。僧の前に置かれた二膳はそれぞれ足付の大小があり、奥側の膳には料理が盛られ、箸置の上に箸が置かれる。土師器皿には大中小の法量差が確認できる。手前の膳は土師器が二点配される。いずれも、膳の器は土師器のみで構成されている。対面する客人の膳は全景が窺えないものの、やはり土師器が確認できる。台所から従僧が対面の間へと、足付折敷を運んでおり、その膳には肴が盛られた土師器が三点載る。台所では四名の僧侶が調理に励んでいる模様が描かれ、料理を盛る鉢・大皿類は、黒色と緑色のものが確認できるので、これは青磁と漆器なのであろう。液体を入れる壺類も青磁である。調理している僧たちの奥には、配膳済の折敷類が三セット用意さ

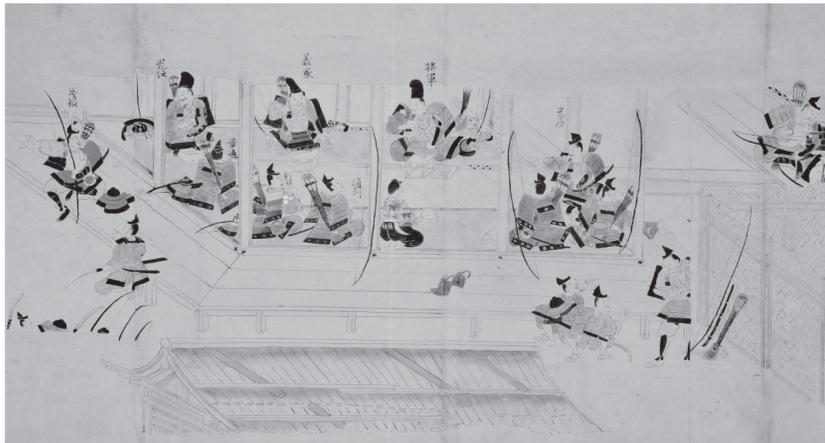


図 34 『前九年絵巻』の飲食風景

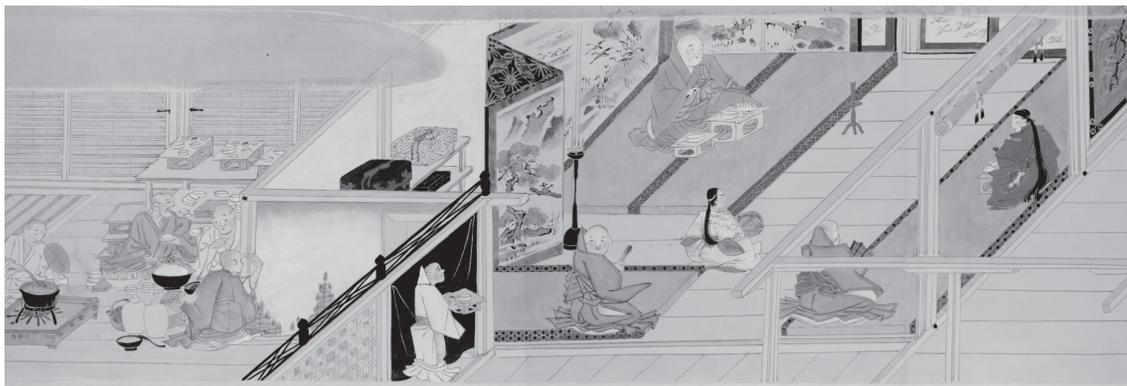
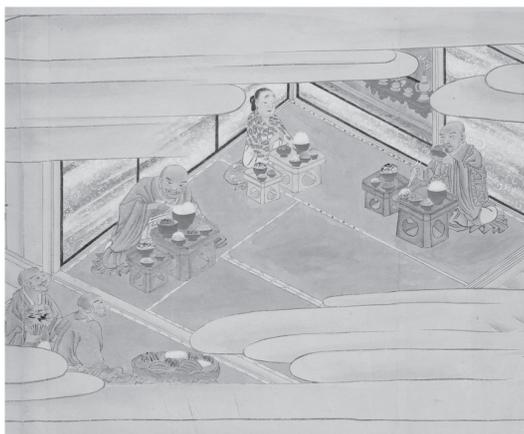
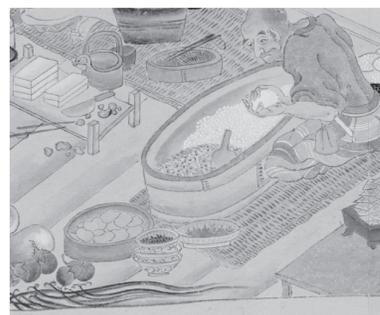


図 35 『慕帰絵詞』の飲食風景



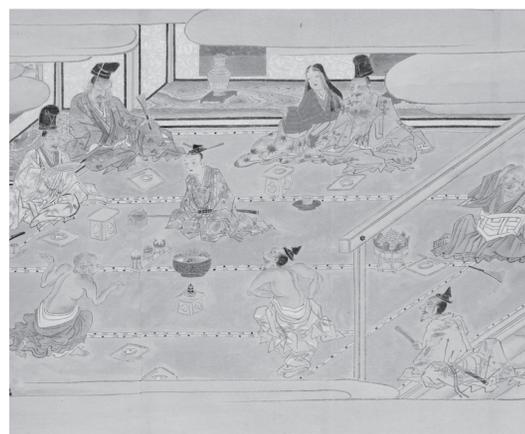
2 飯好きの人々



1 青花皿



4 飯・酒両方を嗜む人々



3 酒好きの人々

図 36 『酒飯論絵巻』の飲食風景

れており、いずれも土師器に盛られている。箸の中央にはやはり土師器小皿を使った箸置が置かれている。周囲には重ねられた土師器類が乱雑に積まれ、一つ一つの皿に料理をよそっている最中であることが理解できる。武家ではなく寺院の様子であるが、やはり食器の主体を土師器類が担っていることが理解できる表現である。

図三六の各絵は、それぞれ『酒飯論絵巻』に描かれた飲食の様子である。下戸で飯好きの僧、酒好きの公家、両方を嗜む武家の三者が対比されて描かれ、三者の主張が、実際は仏教宗派のあり方をなぞらえたものと考えられている（三瓶二〇〇八）。成立は一六世紀中葉とされており、それ以前の絵巻で描かれることの少なかった中国青花皿の表現が確認できることから（図三六一一）、一五世紀後半以降の青花の普及という時代背景と整合している点が興味深い。

三者の膳に使用された飲食器もそれぞれに対比的で、図三六一二の「飯好きの人々」は、それぞれに足付折敷二膳を前にし、いずれも赤漆の食器に飯・肴が山盛りに盛られた描写になっている。これに対し、図三六一三の「酒好きの人々」は、赤ら顔で酌の只中という様相だが、食器類は質素で、足付もしくは平置の折敷に、それぞれ土師器一皿分のつまみが載っているだけの状況である。左手の武家は、明らかに食べ物の土師器より二回りほど大きな土師器大盃で、酒をあおっている。座には青磁香炉が置かれ、部屋の棚部には、青磁の花生、鉢が調度品として飾つてある。図三六一四の「酒・飯両方を嗜む人々」は、各々の前に三つの膳が配され、やや低めの四方足付の折敷二膳と平置折敷一膳の組み合わせになっている。料理・食器とも多彩で、赤漆の汁椀と青磁の皿類が主に用いられている。座の中央には、おそらく酒器である土師器が一点のみ置かれ、柄付の酒容器を手にした侍

女が気を配っている。奥の棚には、軸物と青磁の花生が飾られる。

『前九年合戦絵巻』『慕帰絵詞』では、膳に使用された飲食器がすべて土師器であるのに対し、『酒飯論絵巻』では、食器類のバリエーションが豊富で、漆器・磁器類の使用もわかる。これらは時代による差もあるだろうが、それ以上に、中世では空間のあり方や違いによって、飲食器の使い分けが行われていたことを示唆しているものと捉える方が的確であろう。

（三）式三献・酒宴の内実

室町時代の武家儀礼は、まず主殿での式三献から始まり、その後、会所に場所を替え、夜を徹して酒宴を行うというのが通例であったようだ。酔いが回ると、まさに『酒飯論絵巻』に描かれた「酒好きの人々」のような饗宴が展開されていたのであろう。

將軍の御成の栄に浴した大名たちは、こぞって豪華なもてなしを競い、永禄三年（一五六〇）に足利義輝を迎えた三好義長は十七献、永禄十一年（一五六八）に足利義昭を迎えた朝倉義景も同じく十七献、明応九年（一五〇〇）に足利義植を山口に迎えた大内義興に至っては『明応九年三月五日將軍御成雑掌注文』から二十五献以上の肴と酒を供した記録が残っている（江後二〇二一）。単に飲食を重ねるだけではなく、合間合間には、双方からの進物の応酬、御馬御覽、能の観劇等が催されていた。かような様々な趣向を実施するに恥ずかしくない舞台装置が、守護館であったと言えよう。

さて、ここでは永禄十一年に、石見の益田藤兼・元祥親子が、毛利元就を饗応した「益田藤兼・同元祥安芸吉田一献手組注文」（東大史編二〇〇三）から饗応の内容について見てみよう。藤兼は、元就

との関係強化を図るため、次子次郎の元服に際し、元就から一文字拝領を受け「元祥」と名乗らせた。そして貴重な品々の献上と祝宴の主催を行ったのである。この祝宴に関する料理の献立が当該文書に記録されている。

宴の最初は「御引渡」と記されている。これは具体的な料理内容が述べられていないが、式三献のことであろう。『宗五大艸紙』では式三献の膳内容を図指する中で、「此うちあわはびをひきわたりと云」と述べている(塙二〇一三)。武家の式三献では、「敵に打ち勝ち、喜ぶ」の語呂合わせから、「打鮑」「勝栗」「昆布」を並べることが通例で、「梅干し」「海月」に替わる場合もあった(二木一九九九)。『宗五大艸紙』の図では、白かわらけ三点、へそかわらけ二点、大中二点、みみかわらけ(耳皿)一点が並べられており、初献だけで八点の土師器が利用されている(図三三)。

郡山饗宴では、次に、「御湯漬」として、鹽引・覆面鯛・貝鮑・酒浸(さかひて)・香の物・はむ(はんぺん)・蒲鉾が出されている。同年の朝倉邸への義昭御成の場合は、式三献後に、会所へ移動して、三膳ほど飲食をしてから湯漬に至っており、饗宴により膳の順序や献数には差があった。

湯漬二献目は鮓・雉・螺貝・汁(集煮)・烏賊・鮭。三献目は鯨子(かどのこ)・海鼠腸(このわた)・汁(羹・かわうそ)・海月が供されている。その後、箸休めも兼ねたのであろう、御菓子七種が出されている(内容が不明)。再び膳に戻り「御肴」として、小串・雑煮・削り物(鮑などを小さく削った物)が記されている。二献目として「むしむき」に白鳥を添えたものが出され、三献目はさしくらげ・鯛・こうるか(子鰹鯪?)であった。四献目は鳥の足・鼈羹・刺身、五献目は塩ひき・

雉・烏賊、六献目は草片・鰻頭・「はるも」と続く。終いにはん(はんぺん)・鮎・からすみが七献目として出され、献立が終わっている。地方領主が大名を饗応した例のためか、膳の数からすると将軍御成に比べ控えめではあるが、それにしても海から遠い吉田郡山城にあって、あらゆる山海の珍味を手を尽くして準備したことが読み取れる。石見益田から運んだ物も多くあったのであろう。

益田元兼の饗応で興味深い点は、準備物を記したものの記録が残っていることで、特に「御かわらけの物三せん」という文言が注目に値する。一回の饗応に三三三の土師器が用意されていた事実を物語るこの記述は、居館遺跡における大量の土師器出土に対し、一定の裏付けを与えてくれるものである。ここに記した肴の合計は四十四種を数えるが、御引渡の肴数は明記されておらず、また酒の盃も相当数を必要としたであろうことは想像に難くない。四十四にこれらを適当に加え、ひとりあたり七〇枚の土師器を使用したと仮定すると、三千枚の土師器で四〇名ほどがまかなえる計算になる。少なくとも一五・一六世紀頃においては、廃棄土師器の数量と、その空間における武家儀礼の頻度は比例するものと考えて大過はないと思われる。

(四) 耳皿について

すでに少し触れたが、式三献や饗宴における膳の配置法について言及した各種の故実書、例えば『奉公覺悟之事』『宗五大艸紙』(塙二〇一三)や『山内料理書』(倉林一九八五)等において、箸置は「みみかわらけ」と記されている。「みみかわらけ」は無論、「耳皿」のことであり、土師器の小皿の両端を折り曲げ、箸置として妥当な形状にあつらえた土師器である。大内氏館跡、大友氏館跡、いずれの

土師器編年にも組み込まれていることが、編年図からわかるので（北島二〇一〇・長二〇一八）、守護館であったことが確実な両遺跡から一定量出土していることが理解されよう。熊本県内では山都町浜の館跡の出土遺物に耳皿を一点確認している（未報告）。浜の館跡は戦国期の阿蘇大宮司居館跡である。

限府土井ノ外遺跡の出土例としては、管見の限り、先述のSK五八・五九の二点のみであった。全ての土師器破片を確認できたわけではないものの、未報告資料も含め、大部分は通覧したので、仮に未見資料に耳皿が含まれているにせよ、劇的に数が増えるものではない。このことから、耳皿は極めて出土数の少ない希少器種と推測される。これについては『山内料理書』の次の記述が参考になる。

一 はし台はみゝかわらけをく事大名さまの外あるへからす。みゝかわらけのうへに紙かいしきのやうにかみををく。

箸台としての「みみかわらけ」は大名以外には使用してはならない、とのしきたりがあったようである。『山内料理書』は明和六年（一四九六年）にはすでに成立しており、料理内容を相伝した山内三郎左衛門尉は管領斯波氏の家中にあったことから、幕府中枢で適用されていたしきたりとみて問題ない。考古学では「無いことの証明」は非常に困難であるが、限府土井ノ外遺跡での、全体の土師器出土量（おそらく破片数としては一万点前後）における、二点という出土例の少なさは、必ずしも大名とは限らないが、耳皿が貴人向けにのみ限定されて供されていた可能性と矛盾しないものと言える。

それぞれ一点ずつ耳皿が出土したSK五八・五九は、いずれも主要

建物（SB一二・同九一）に南接する隅丸方形の土坑で、規格性が高く建物に付随する遺構とみられる（図七）。共存遺物は、すでに述べたように少なく、わずかに青磁雷文碗の破片（報告書掲載）、青花C群皿・白磁E群皿の小破片（未報告）がある程度である。式三献に類する献盃儀礼もしくは饗宴の膳において、貴人が使用した箸置が廃棄されたものの可能性があり、土師器資料の中でも注目に値する資料である。

ただし、肥前では、島原半島の有馬氏の居城であった日野江城跡で大量の土師器皿・坏の報告の中に約四〇点もの耳皿が見られ、まとまった量の耳皿出土が確認されている（南島原市二〇一一）。この事例からは、耳皿の貴人向け限定が絶対的なもの、とは断言できない。地域差や時期差により、その価値感は大きく異なっていたのかもしれない。

おわりに

本稿ではまず限府土井ノ外遺跡から出土した輸入陶磁器の破片点数のカウントと分類から、遺跡の存続時期について言及した。日常に利用された碗皿類の出土数から、精緻な陶磁器編年が設定されつつある沖繩編年にあてはめて、遺跡の存続年代を再検討した結果、調査報告書で示された一四世紀後半～一五世紀前半という遺跡の年代観に大きく修正を迫ることとなり、一四世紀後半～一六世紀後半まで継続していたこと、中でも遺跡としてのピークは一五世紀中葉から後半にあったことを示した。

次に、大量に出土した土師器について、器形から個別分類を設定し、そのうち坏B群の形態変化を追うことで、主に一五世紀代の土師器の変遷案を提示した。不十分な面も多いが、これまで全く提示されることのなかった熊本県下での中世後期の土師器編年に一定の道筋を示すことができた。

また、出土した土師器類の用途について、故実書や絵巻の事例などを引用し、式三献や会所での宴会に利用されたものである可能性を示した。特に益田元兼と毛利元就の饗宴で、多数の料理が供され、その際に土師器皿三千枚が発注されていることに着目し、地方大名のひとつの饗宴においてどの程度の土師器が利用されたかの裏付けと考えた。また、箸置としての耳皿の希少性にも言及し、SK五八・五九における耳皿の出土と関連付けた。

土師器の大量出土は、必ずしも、儀礼的空間にのみ限られたものではなく、各地の都市遺跡や小領主の城館などでも散見されるものである。しかし、隈府土井ノ外遺跡に関しては、前提として、全国的に見ても相当の優品たる青磁唐物を備えた空間が一区周辺に存在したことが重要で、このような会所や主殿と思われる建物が配置されていた空間構成の中において、多数の土師器の消費があった点は、まず式三献や宴会の痕跡と見てよいのではないだろうか。輸入陶磁器の出土状況から、隈府土井ノ外遺跡を会所等が存在した空間とみなした点については、前稿（中山二〇二二A）を参照されたい。

前稿と本稿により、概ね隈府土井ノ外遺跡について出土遺物を通した究明は、一定の役割を果たせたと思っている。しかし、発掘調査の限定的な範囲から、居館跡の全体像、とりわけ各建物遺構の性格やその他遺構の配置状況、土塁・堀等で区画された居館範囲等はべール

に包まれたままである。今後、遺構面からも隈府土井ノ外遺跡の研究が進むことを期待したい。また、さらに広範に、中世守護都市「隈府」の各地において、発掘調査の成果による新知見を得て、よりクリアに中世守護都市「隈府」像が構築されることも切望するものである。

註

一 IV類・IV類・V一類の青磁碗は、いずれも体部無文の端反タイプであり、口縁部の形状で同定を行う。このうち、IV類は口縁端部が尖り気味で薄釉で、V一類は玉縁状の端部で釉層も厚くなると特徴が捉えられている。ただし、実際に小破片で見ると、その判断に迷うものが多くあり、このため、判断に迷ったものはIV一類の範疇で同定不可、として表に反映した。

挿図・表出典

- 図一 右〳筆者作成 左〳open street mapを使用
- 図二 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図三 長二〇一A
- 図四 長二〇一五
- 図五 長二〇一八
- 図六〳九 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一〇 沖縄県立埋蔵文化財センター二〇〇一
- 図一一・一二 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一三 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一四 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一五 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図一六〳一八 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図一九〳二三 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二三 北島二〇一〇の実測図を元に筆者作成
- 図二四・二五 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二六 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二七 熊本県教育委員会二〇〇九
- 図二八 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図二九 乗岡二〇〇〇の実測図を元に筆者作成
- 図三〇・三一 熊本県教育委員会二〇〇九の実測図を元に筆者作成
- 図三二 筆者作成
- 図三三 埴二〇一二
- 図三四 国立国会図書館デジタルコレクション『前九年絵巻物』巻一
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2573531?tocOpened=1>

図三五 国立国会図書館デジタルコレクション『幕帛繪々詞』巻二
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2590849?tocOpened=1>

図三六 国立国会図書館デジタルコレクション『酒飯論』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542602>

表一・二・三 筆者作成

引用・参考文献

- 青木勝士一九九六「肥後菊池氏の守護町「限府」の成立」『熊本史学』七二・七三合
 併号 熊本史学会
- 青木勝士二〇二〇「菊池氏の拠点 北宮・限府」『九州の中世Ⅱ 武士の拠点 鎌倉・室町時代』高志書院
- 五十川雄也二〇一九「大内館と大友館」『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる』勉誠出版
- 江後迪子二〇二二「大内氏遺跡での宴料理等「歴食」再現と地域性」『歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築― 令和二年度 遺跡整備・活用研究集会』奈良文化財研究所
- 大分市教育委員会二〇一五『大友氏館跡一』
- 沖縄県教育委員会一九九八『首里城跡 ―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター二〇〇五『首里城跡―二階殿地区発掘調査報告書―』
- 小野貴史二〇〇一「大友氏における「式三献」について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 小野正敏一九九七『戦国城下町の考古学』講談社
- 小野正敏二〇〇三「威信財としての貿易陶磁と場―戦国期東国を例に―」『戦国時代の考古学』高志書院
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編二〇〇八『考古学と中世史研究Ⅴ 宴の中世―場・

かわらけ・権力―高志書院

鹿児島県維新史料編さん所一九七九『鹿児島県史料 旧記雑録前編二』鹿児島県

亀井明德編二〇〇二『明代前半陶磁器の研究 ―首里城京の内SKO―出土品―』

菊池市教育委員会二〇二〇『中世菊池一族関連遺跡群確認調査概要報告書「菊之城跡」(守山城跡及び内裏尾)「隈府城下遺跡」』

北島大輔二〇一〇「IX章 大内氏の設定―中世山口における遺物編年の細分と再編」

『大内氏館跡XI』山口市教育委員会

北島大輔二〇一九「大内氏の宴―その器と配膳方法―」『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる』勉誠出版

熊本県教育委員会二〇〇九『熊本県文化財調査報告第二四八集 隈府土井ノ外遺跡』

熊本県立美術館二〇一九『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』菊池川二千年の歴史展実行委員会

熊本市教育委員会二〇一四『二本木遺跡群二三』

楠瀬慶太二〇〇七A「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土師器編年―」『九州考古学』第八二号 九州考古学会

楠瀬慶太二〇〇七B「戦国期島津氏における酒食饗応儀礼 ―式三献とかわらけ―」

『比較社会文化研究』第二二号 九州大学大学院比較社会文化研究科

久米島町教育委員会二〇〇八『宇江城城跡発掘調査報告書I』

倉林政次一九八五『日本料理秘伝集成 第一八巻 日本料理の起源 食物・食事雑篇』同朋舎出版

三瓶はるみ二〇〇八「日中の酒にまつわる論争について ―「酒飯論」を中心に―」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局

柴田圭子二〇一一「第一章 今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究」『今帰仁城跡発掘調査報告V』今帰仁村教育委員会

調査報告V』今帰仁村教育委員会

鈴木康之二〇〇二「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかかわり―」『日本考古学』第一四号

本考古学』第一四号

瀬戸哲也・仁王浩司ほか二〇〇八「沖繩における貿易陶磁」『沖繩埋文研究』V 沖繩県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也二〇一五A「二四・二五世紀の沖繩出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No.三五 日本貿易陶磁研究会

No.三五 日本貿易陶磁研究会

瀬戸哲也二〇一五B「一四〜一六世紀の沖繩出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学』第一巻 雄山閣

瀬戸哲也二〇一六「一四〜一六世紀の沖繩出土龍泉窯系青磁における生産地の模索(二)」『亀井明德氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』亀井明德さん追悼文集刊行会

瀬戸哲也二〇一七「沖繩出土貿易陶磁器の時期と様相」『第三五回中世土器研究会 貿易陶磁研究の現状と土器研究』日本中世土器研究会

太宰府市教育委員会二〇〇〇『大宰府条坊跡XV ―陶磁器分類編―』

長直信二〇一一A「豊後府内における京都系土師器導入前後の土器様相 大友館跡の形成過程解明にむけて―その一―」『古文化談叢』第六五集四分冊目 九州古文化研究会

文化研究会

長直信二〇一一B「大友氏館跡調査研究の現状と課題―考古学的成果を中心に―」『福岡大学考古学研究室調査研究報告第一〇冊 福岡大学考古資料集成四』福岡大学考古学研究室

岡大学考古学研究室調査研究報告第一〇冊 福岡大学考古資料集成四』福岡大学考古学研究室

長直信二〇一五「第四章 大友氏館跡基準資料について」『大友氏館跡I』大分市教育委員会

長直信二〇一八「第二章 大友氏館跡出土の土器と権力―その様相と特質―」『戦国大名大友氏の館と権力』吉川弘文館

坪根伸也・塩地潤二〇〇二「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・

大友土器研究会

坪根伸也二〇〇八「大友館の変遷と府内周辺の方形館」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院

東京帝国大学史料編纂掛一九一七『大日本古文書 家わけ五ノ一 相良家文書之一』東京帝国大学

東京大学史料編纂所二〇〇三『大日本古文書 益田家文書之二』東京大学出版会

中井淳史二〇一一『日本中世土器の研究』中央公論美術出版

中井淳史二〇二二『中世かわらけ物語 もっとも身近な日用品の考古学』吉川弘文館

長堂綾・島弘二〇一四「渡地村跡の概要と青磁集中部」『第三五回日本貿易陶磁研究集会発表要旨・資料集 琉球列島の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会

陶磁研究会

中山圭二〇二一A「菊池氏関連遺跡「限府土井ノ外遺跡」の輸入陶磁器に関する研究」『菊池一族解體新章』巻ノ二 菊池市教育委員会・菊池文化研究所

中山圭二〇二一B「菊池氏関連遺跡「限府土井ノ外遺跡」の貿易陶磁器」『第四一回日本貿易陶磁研究集会発表資料集「最近の話題の遺跡・注目される研究から」』日本貿易陶磁研究会

那覇市教育委員会二〇二二『渡地村跡』

並木誠士二〇一七『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻―「絵巻」の時代から「風俗画」への時代へ』昭和堂

二木謙二一九九九『中世武家の作法』吉川弘文館

乗岡実二〇〇〇「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相と生産技術の展開と編年』資料集「全国シンポジウム」中世窯業の諸相と生産技術の展開と編年資料集」実行委員会

埴保己二二〇一三『群書類従第二三輯 武家部』八木書店

藤原良章一九九七「中世の食器・考―（かわらけ）ノート―」『全集 日本の食文化 第九巻 台所・食器・食卓』雄山閣出版

南島原市教育委員会二〇一一『日野江城跡総集編一』美濃口雅朗一九九四「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会

吉岡康暢・門上秀叡二〇一一『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

脇田晴子一九九七「文献からみた中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七一集 国立歴史民俗博物館

墓石類からみた江戸時代における菊池氏の顕彰

野村俊之・美濃口雅朗

はじめに

菊池市内には、南北朝期に活躍した菊池氏当主のものをはじめ、菊池氏に関わる墓石・供養塔・顕彰碑が各所に点在し、その数は県内他地域に比べて多い。南朝の忠臣たる菊池氏の本貫・本拠地であるから当然のことともいえるが、筆者の管見によれば、本市のように中世、特に南北朝期の領主層・武将のそれがこれほどに多いことは稀である。

本稿は、その「多さ・稀さ」の実態について、考古学的手法を用いながら九州内の関連資料との比較をもとに相対化し、明らかにすることを目的とする。なかでも注目したいのは一五代武光碑など、江戸時代後期に造立された亀跌碑・墓である。これは最良という亀形の基礎を持つ石碑であるが、熊本県内では、現代作を除き本市だけに存在しており、菊池氏関連資料の特徴を如実に示すものといえる。その形態的特徴や造立の経緯について、文献資料にも拠りながら探りたいと思う。

なお、本稿で扱う石造資料（表1～3に列記した資料、本文中で触れた九州の資料）¹は、いずれも筆者が踏査・実見したものであるが、中世領主層・武将の墓、特に旧鹿児島藩領内については遺漏も多いことをお断りしておく。

一・中世領主・武将の墓石類としての菊池氏資料

本章では、中世九州における領主・武将といわれる人物に関わる墓石類（個々資料について墓石・供養塔・碑等の性格の弁別は難しく、これらを総称する場合「墓石類」と仮称する）を概観し、そのうえで菊池氏関連資料の位置づけを行なう。なお、個々資料の観察は第1表に譲る。

a. 中世領主・武将の墓石類の現状

歴史上、中世領主・武将といわれる人物は数多いが、全国的に見てその対象者個人が特定できる（伝承を含め）墓石類は多くない。その大きな理由は、中世から近世（江戸時代）への転換期において在地領主層の墓・墓所が荒廃したためであり、その経緯については以下二点が挙げられる。

中世においては、墓石・供養塔の造立は作善こそが目的であり、通常、これを維持管理し続けるという意識は希薄であった。江戸時代を経た現代人が持つ墓（墓石）に先祖が宿るといふ招魂復魄の意識は、江戸時代に普及した儒教の影響であり、中世人には乏しかったものと考えられる。このことは、中世の墓石類が多くの中世城郭の石垣築石・裏込めに、また神社の建築材等に転用された事例が示している。前者は福知山城・大和郡山城、後者は根来寺がその代表といえる（中

世葬送墓制研究会二〇一六。

近世（江戸時代）への転換期において、在地領主層が没落、あるいは幕藩体制に取り込まれ被官化するなかで、本貫地・本拠地から遊離した（白石一九九三）。

こうした経緯を経て、江戸時代においては、一般層では寺檀制度の確立により地域に形成された墓地の保持が明確となる。藩主家や上級武士層については、墓域・墓石類の形態や規模が他とは隔絶した墓所が形成されるようになる。これは、墓所が当主や家の権威・継承を視覚化する装置となり、また、墓前での宗教儀礼が主催者の正統性を裏付ける行為として位置づけられたためと考えられる（野村・美濃口二〇一三）。

中世領主・武将の墓石類が不明な場合が多い理由について、今ひとつ挙げておく。近代における神仏分離令により寺院が荒廃するなど仏塔形式の墓石類が粗略に扱われたこと、その後の戦災復興に伴う都市部開発により寺社が縮小、移転するなどして散逸あるいは消滅したことなどが指摘できよう。

b. 九州における中世領主・武将の墓石類

前節を踏まえ、九州における中世領主・武将の墓石類を概観する。仮に関が原の戦い（一六〇〇年）以前に没した人物のものを扱うこととする。前述のように筆者が踏査・実見した資料をもとにするが、熊本県外については遺漏が多いことをあらためてお断りしておく。

墓石類の造立時期・場所は、それぞれの背景を反映して極めて多様であるが、江戸時代以降に供養・顕彰され、維持管理されてきた形跡が見られるものが殆どを占めている。概ね、以下の類型に分けることができる。

江戸時代における新規造立

まず、指摘できるのは、江戸時代において新規に造立された墓石類が多いことである。戦国期の領主・武将のものが目立ち、その経緯から三大別できる。

近世大名や交代寄合へと継続する家の先祖（藩祖・家祖など）のものが、後に藩主家の墓所や菩提寺、あるいは縁の地に造立される事例で、数も多い。以下、その代表例を列記する（第1図1～12）。

○福岡藩：藩祖黒田孝高（如水）祖父の小寺重隆塔（享和二年一八〇二造）、○柳川藩：初代立花宗茂父の高橋紹雲塔（江戸時代前期の型式）・同義父の戸次道雪塔（延宝二年一六七四造か）、○三池藩：藩祖立花直次父の高橋紹雲塔（寛政元年一七八九造か）、○佐賀藩：藩祖鍋島直茂父の清房塔（一七世紀中頃の型式）、○平戸藩・松浦二二代義（江戸時代後期の型式）・同三代弘定（江戸時代後期の型式）の墓石類²²、○岡藩：初代中川秀成父の清秀・兄の秀政遥拝塔（ともに一七世紀前半の型式）、○飫肥藩：伊東六代祐国・七代尹祐塔（ともに江戸時代後期の型式）、○交代寄合米良領：米良初代重次（嘉永四年一八五二銘）・同二代重種（江戸時代後期の型式）・同四代重鑑（江戸時代末の型式）の墓石類、○人吉藩：下相良一八代義陽塔（標柱形、延宝七年一六七九銘）

小寺重隆塔は居城の姫路市御着城跡にあるが、福岡藩が主体となって造立していることから扱った（福岡市二〇一一）。型式・石材とも筑前型の有角五輪塔を採っている（野村・美濃口二〇一九）。

江戸時代に大名家に仕官した家、あるいは戦国期から江戸時代への転換期において武家としては没落するものの、その後、旧領内に留まり惣庄屋・大庄屋など富農層として存続した家のものである。熊本

県内の事例を紹介する（第1図13～16）。

○和水町：由布大炊助墓石類（江戸時代後期の型式）、○山鹿市：内古閑重房墓石類（江戸時代中後期の型式）、○高森町：高森惟直塔（一八世紀の型式）、○熊本市：内田頼勝墓石類（一七世紀の型式）、内古閑基貞塔（一八世紀の型式）、城親賢（江戸時代後期の型式）、鹿子木寂心墓石類（弘化四年―一八四七銘）、○天草市：木山弾正塔（江戸時代後期の型式）

由布大炊助は立花宗茂に従い肥後国衆一揆にて戦死したが、子孫は柳川藩重臣として存続している。なお、その墓石類は民間信仰の対象となっている。内古閑氏については、肥後国衆一揆後、子孫が母方の麻生姓を名乗り、正院手永の総庄屋を務めている（原口一九八一）。同手永には内古閑鎮資塔（没年から大過無い型式）もある。形態において注目されるのは高森惟直塔で、一八世紀代に肥前地方で製作した有角五輪塔を高森町含蔵寺にまで搬入したものである。子孫の高森家は高森手永の惣庄屋で、その支流は当地の豪商として栄えており（圭室一九九五）、肥前産有角五輪塔の選択は、惣庄屋としての権威、経済的威勢を示したものといえる。

今一つは、戦国期から江戸時代への転換期において没落し、後に家系は存続するものの、子孫が領内に留まらなかつた家のもので、下記二名の資料を確認したに過ぎない。ともに著名な大名である（第2図17・18）。

○大分県：大友宗麟二基（ともに津久見市）、○熊本県：小西行長二基（山鹿市・熊本市）

大友宗麟の墓石類には、寛政期に遺臣の子孫が造立した笠付方柱塔と、昭和五二年（一九七七）に地元顕彰会が同所に造立したキリスト

教墓石がある。小西行長の墓石類には、遺臣やキリスト教信者がその居住地に造立したと伝わるもの（一七世紀の型式）と、遺臣の子孫と伝わる家が造立した笠塔婆（昭和二八年―一九五三銘）とがある。

地生え大名家による中世墓石類の整備

地生え大名家が、領内各地にあった先祖の中世墓石類を菩提寺に集めて整備するものである（第2図19・20）。佐賀藩高伝寺・鹿児島藩福昌寺跡・人吉藩願成寺墓所に見られ、個々の没年と大過無い型式の石塔を、新たに形成した墓域に配置している。高伝寺墓所においては、かつての主君龍造寺家のものを集めており、これは廃藩置県があつた明治四年（一八七二）、藩主鍋島直大が行なつた事業である。福昌寺跡・願成寺墓所については、ともに藩主家に繋がる系譜の島津宗家・下相良家のものであり、後者は、三代相良頼喬が、元禄年間頃、藩主家の権威高揚を図つて墓所を整備した事業の一環と捉えることができる。

江戸時代における中世墓石類の供養・顕彰

中世の型式（個々の没年と大過無い型式、あるいは没年から時間を経過しているものの中世期に収まる型式の墓石類）であつても、江戸時代以降に供養・顕彰行為の形跡が認められるものである。灯籠を奉献する、顕彰碑を造立する、圍繞施設・大形基壇・覆屋などの設えを造作するなど、多くの事例があり、その経緯から三大別できる。

江戸時代に大名家・上級武士として存続した家のものである（第2図21～24）。鹿児島県においては、管見の他にも多数の事例があり、これは鹿児島藩が中世以来の在地領主による土地支配（外城制度）

を継続したためと考えられる。

○福岡藩：小寺職隆塔（天正一三年—一五八五没頃の型式）、○鹿児島藩：始良市豊州島津初代季久塔（文明九年—一四七七没頃の型式）・同六代朝久塔（文禄二年—一五九三没頃の型式）、出水市薩州島津初代用久（七代忠辰塔（長禄三年—一四五九没く慶長二年—一五九七没頃の型式）・同忠兼塔（永禄八年—一五六五没頃の型式）、鹿児島市川田義朗塔（文禄二年—一五九三没頃の型式）

小寺職隆塔について補記しておく。福岡藩祖黒田如水の父で、二百年忌にあたる天明四年（一七八四）、居城の姫路市功山城近くにおいて福岡藩が整備している（福岡市二〇一一）。覆屋も設えられ、灯籠・石柵は肉眼観察によれば石材は糸島花崗閃緑岩で、灯籠は竿に大きく偈を刻しており、その特徴は、福岡藩主家墓所において通用されるものに共通する。

武家としては没落したが、領内において惣庄屋として存続した家のもの、子孫が神官として存続した家のものである。熊本県の事例を紹介する（第2図25・26）。

○熊本市：内古閑鎮資塔（元龜二年—一五七一没頃の型式）、○山都町：阿蘇惟種塔（天正一二年—一五八四没頃の型式）

阿蘇惟種塔については、石柵の記銘が注目される。「村役人世話人／氏子中」として名字の無い四人の名前が連記されており、地元の人々が造ったことが判る。江戸時代以降、領民の階層や居住地が固定化され時間が経過するなかで、彼らの郷土意識が高まり、かつての「おらが村の殿様」・「縁の殿様」を供養・顕彰する行為があり、本例はこれを如実に示すものと捉えたい。

中世において没落し、かつ、その子孫が領内に留まらなかった氏族

のもので、数は僅かである（第2図27・28）。

○大分県：大分市長宗我部信親塔（天正一四年—一五八六没頃の型式）、○熊本県：山鹿市宇野親治塔（一四世紀の型式）

長宗我部信親塔は、戦死地近く（戸次川の戦い）にあり、四国地方には見られるものの、管見の限り当該地に類例を見ない摩尼輪塔であることが注目される。江戸時代以降の供養・顕彰の形跡としては、大形の自然石を積んだ塚状の基壇、鉄製鳥居、明治二年銘・四百年忌など二基の慰霊碑がある。宇野親治塔には近現代に設えた石柵が見られる。長宗我部氏は大坂の陣後、信親弟の盛親の家系が存続したとされ、宇野氏は隈部氏の祖で、隈部氏は肥後国衆一揆後に傍流が存続したとされるが、いずれも領内には留まっていない。信親は著名な悲運の武将として、親治は山鹿温泉を発見したとの伝承から温泉（地域振興）の祖として、地元民が主体となった造作と考えられる。

江戸時代における墓石類の想定・見立て

中世石塔を中世領主・武將のそれと想定、あるいは見立てて供養対象とするものである。以下、熊本県における代表例を挙げる（第2図29・30）。

多良木町蓮花寺跡には一五世紀中頃に没落する上相良氏の五輪塔群があり、二〜六代の地輪背面には俗名・没年銘が認められる。俗名であること、彫り方に竹彫りが見られることから江戸時代以降の追刻と考えられる。うち、四代経頼（延文三年—一三五八没か）・五代頼仲（応永七年—一四〇〇没か）・六代頼忠（正長元年—一四二八没か）塔は、それぞれの没年より半世紀以上先行する型式であり、逆修塔の可能性を含め、本来、彼らを対象としたものとは

言い難い。時代を経、その正否も判らなくなった江戸時代に、改めて供養するうえで追刻されたと考えられる。

八代市泰勝院跡には、細川忠興の供養による織田信長塔がある。後家合せではあるが一四世紀代の在地型式の大形五輪塔で、その地輪に「織田將軍／去遊四十九才／天正十年六月三日／□四十八」・「寛永十八年六月三日／細川参議敬建」の追刻がある。中世五輪塔を信長の供養塔と見立てたもので、茶人忠興らしい仕業といえる。

以上、現存する中世領主・武将の墓石類は戦国期のものが圧倒的に多い。また、地生え大名が先祖のそれを墓所にまとめて整備したもの、新規に造立したもの、中世の墓石類をそれと想定・見立てたもの、奉獻灯籠や石柵などの付帯施設を造作したものなど、江戸時代以降に供養・顕彰の対象となった資料が多く、それ故、現在にいたるまで維持管理されてきたといえる。

c. 菊池氏の墓石類

前節を踏まえ、菊池氏の墓石類について位置づけを行なう。中世期に没落し、かつ、江戸時代以降に子孫と伝わる家は存続するものの領内には留まらなかった氏族としては、その数が多いことが特徴である。ちなみに、子孫として著名な家には、二二代能運からの系譜と伝わる米良家・石坂家がある。

以下、前節の類型に倣い、主な事例を紹介する。

江戸時代以降における新規造立

本項では、墓石類に加え、個人を祭神とする神社、廟とされる神社を取上げる。

顕著な事例として、まず挙げられるのは亀跌碑・墓である。中世領主・武将に対してこれが用いられるのは九州では菊池氏においてのみであり、大きな特徴といえる。一三代武重・一五代武光・一七代武朝・二三代政隆の碑・墓があり、菊池市内、それぞれの縁の地に点在する。詳細は次章に譲るが、ここでは、何故、位階制において高位を表徴する亀跌形態が、彼らの碑・墓に選択されたのかについて触れておく。武光は、懐良親王を奉じて九州における南朝勢力の最盛期を築き、百戦百勝の将と称えられたことから、楠木正成碑に倣って、安永九年（一七八〇）、菊池氏としては最初に亀跌碑をもって顕彰された。その後、武重・政隆・武朝の順で造られ、武重は後醍醐天皇に近侍し肥後守護に任じられたこと、政隆は本家の系譜としては最後の当主であったこと、武朝は南朝退勢期にあって託麻原の戦いに勝利し、南北朝合一後に改めて肥後国守護に任じられたことなどが理由として考えられる。

初代則隆・二〇代為邦については、有角五輪塔が選択されている（第3図31・32）。有角五輪塔は火輪の軒端が角状に伸びる、通常よりも派手な形状の異形五輪塔で、則隆塔は文化一五年（一一八八）の造立、為邦塔は一八世紀中葉後半の型式である。ともに肥前地方で発生・隆盛した型式の系譜上にある在地産塔であるが、肥後においては江戸時代中期以降、有角五輪塔は衰退し現存数も少ない（野村・美濃口二〇一九）。その当時において、通常の五輪塔ではなく、あえてこれを選択したのは、より荘厳化された形態をもって顕彰する意図があったためと考えられる。なお、則隆塔は洪江公正『菊池風土記』（今坂一九九六）³において居館とされた菊池市「菊之城」推定地に、為邦塔は菊池市玉祥寺墓の分墓とされ、隠居して禅の語録

「碧巖録」を学んだとされる同市碧巖寺にある。

一七代武朝については、亀跌碑のほか、菊池本城北西の防衛拠点とされる菊池市稗方城跡に方柱形の小形墓石（笠消失）がある（第3図33）。大正七年（一九一八）に城北村大字稗方の地元民が造立したものである。二三代政隆についても、菊池市安国寺の亀跌墓と同じ石柵区画内にもう一つの墓石（小形の笠塔婆形）がある（第3図34）。一八世紀前半の型式で、主銘に戒名が刻される仏式塔である。江戸時代における菊池氏への供養・顕彰が武光碑造立前から行なわれていたことを示す事例といえる。

一二代武時については、彼を祭神とする天保二年（一八三一）創建の福岡市菊池神社（胴塚）、昭和七年（一九三二）創建の同市菊池霊社（首塚）がある（第3図35）。両社とも葬地とされ、神体として自然石の墓石が置かれている。この他、武時が再興した熊本県山鹿市日輪寺に供養塔（大形五輪塔）がある（第3図36）。一九世紀代の型式で、記銘には「肥後守武時入道」と俗名が刻まれている。武時を祀る神社や供養塔が三箇所（合祀された隈府菊池神社を含めれば四箇所）もあるのは、鎮西探題襲撃にみる忠誠や袖ヶ浦の別れのドラマ、楠木正成による賞賛などが、これらの創建・造立当時、彼をして南朝忠臣の象徴とされたためと考えられる。

江戸時代以降における中世墓石類の供養・顕彰

菊池市玉祥寺には、二〇代為邦・二二代重朝の菊鹿型宝篋印塔二基がある（第3図37～41）。塔身に段形を有し、当該地域を主分布域とする型式で（前川一九九五）、為邦（長享二年―一四八八）・重朝（明応二年―一四九三）の没年と大過無い時期の造立と考えられ

る。二基は同一の石堀区画にあり、この石堀には「天明七年丁未仲春日」・「石工荒木治兵衛」の銘がある。天明七年（一七八七）は為邦三百年忌法要が執り行われた年である。「宗伝次日記」（『嶋屋日記』収録、花岡一九八七）の安永九年（一七八〇）記事には、武光亀跌碑が完成し、その石工が「玉祥寺村次平」とあり、「石工荒木治兵衛」銘はこれと同一人物の可能性が高いとみられる。さらに、菊池氏家紋「並び鷹の羽」を陽刻した灯籠一对には「宗氏」・「岡山氏」の奉献者銘があり、これらは隈府町衆の宗伝次・岡山仙助とみられる。これらの墓所整備は三百年忌を期しての事業と捉えられる。

一八代兼朝・一九代持朝、一族の赤星有隆・城武岑の石塔は、球心宝篋印塔といわれる形態で（石田一九六九）、小異はあるものの塔身が球形、基礎に蓮華座を持つことがその特徴である（第3図42～第4図46）。九州においては鹿児島霧島神社の二例が知られており、管見の限り、熊本県内では明確なものは菊池市域にのみ認められる。兼朝塔については後家合せともみられるが、四基とも中世期の造立と考えられる。江戸時代以降の付帯施設としては、兼朝塔には石堀・灯籠・水盤（灯籠・水盤は明治二八年―一八九五銘）、持朝塔には石堀・供台（供台は「皇紀二千五百九十五年」―一九三五銘）、赤星・城塔（同一区画内）には石堀（「文政七甲申春」―一八二四銘）が見られる。

江戸時代における墓石類の想定・見立て

菊池市正観寺には、一六代武政（文中三年―一三七四没）・武澄（正平一二年―一三五七没）・武国（一四世紀後半没か）の菊鹿型宝篋印塔がある（第4図47～50）。いずれも後家合せで、それぞれの没年から時間が経過した一五・一六世紀の型式である。武政塔・武国塔の塔

身には江戸時代以降の俗名追刻がある。武政塔は、天明年間、正観寺の「卵塔場」で多くの石塔群のなかから発見されたという（後藤一九一六・今坂一九九六）。当時、何故それを武政のものとして認識したのかは不明であるが、恐らくはこの時、改めて供養するうえで俗名を追刻し、また、字形が共通することから、武国塔についても同時期に追刻したと考えられる。なお、武政・武澄・武国塔とも、それぞれに石堀が設えられている。江戸時代後期以降の造作である。

二代能運塔は、正観寺実相院跡にある後家合せの大形五輪塔二基が並ぶもので、記銘が無いため、どちらが能運塔かは不明である（第4図51～54）。いずれにせよ空風輪・火輪については没年（永正元年―一五〇四）と大過無い型式ではあるものの、後家合せであることから、後世にそれと想定し見立てたことは明らかといえる。想定した時期は、寛政六年（一七九四）刊の『菊池風土記』では所在不明としているので、それ以降、圍繞する石堀銘「安政四年（一八五七）丁巳十月建／菊池公祭連中／世話人水田長左衛門」、塔前の顕彰碑銘「安政四年五月」から、それ以前のことと考えられる。なお、「見聞録」（『嶋屋日記』収録、花岡一九八七）によれば、安政四年は、能運の法要が執り行なわれており、石堀や碑の設えは、これを期しての事業と考えられる。

神社を廟とする事例

二代経隆については、菊池市若宮神社の社殿が廟と伝わる（第4図55～57）。中世領主の廟としては、西南戦争により焼失した下相良初代長頼の金堂が知られるが、熊本県内では他には本例のみである。社殿脇に文化八年（一八一二）銘の渋江公正撰文による顕彰碑があり、

これには「惟菊池二代藤原経隆公之墳塋也邑人尊崇之厚□奉祭祈豊登穰疫疾當水旱災禍變奉齊」と記されている。この碑文で注目されるのは、儒者公正が顕彰する以前から、地元民において菊池氏が民間信仰の対象となっていたことである。

その他の供養・顕彰

前項までに指摘した他にも、供養・顕彰の形跡が認められる事例がある。奉献灯籠・顕彰碑などに注目する（第4図58～62）。

奉献灯籠には、初代則隆塔前（文政八年―一八二五銘一对）、五代武光碑前（天明八年―一七八八銘一对）、三代政隆墓前（嘉永四年―一八五一銘）がある。一三代武重の墓域には、ともに地元民による明治三七年銘（一九〇四）と昭和四〇年造（一九六五）の顕彰碑二基がある。前者は、將軍木や歴代墓の整備など菊池氏の顕彰に努めた片岡家善が、初代則隆の下向八三五年（と伝わる）を期して建てたものである。正観寺実相院跡の二代能運塔脇には二代武時・一四代武士・一七代武朝の三名を対象とした明治二七年銘（一八九四）の「遥拝所」碑がある。その他、初代則隆をはじめ、武重・武光・武政・兼朝・持朝・能運・政隆などの墓石類の前には、「明治二十七年」（一八九四）・「菊池社前百石有志：周旋人片岡家善」、「明治卅六年」（一九〇三）・「菊池文化顕彰會」銘の標柱が建てられていることを挙げておく。

以上、菊池氏の墓石類については、江戸時代後期から近現代に至るまで、地元民による供養・顕彰を示す石造物が多いことが、他地域とは異なる特徴といえる。

二．菊池氏の亀趺碑・墓

菊池氏の亀趺碑・墓を相対化するうえで、まずは九州の状況を概観する。原則、江戸時代の亀趺碑・墓・塔を扱い、個々資料の観察は第2表に譲る。なお、名称「碑」・「墓」・「塔」の弁別は、現物に刻された題字(篆額・主銘など)に従っている。これらを総称する場合、本稿では「亀趺碑類」と仮称する。

a. 亀趺碑とは

既往研究の成果をもとに概述する(平勢一九九三・二〇〇四)。亀趺碑は中国に起源を持ち、韓半島でも盛んに用いられてきたもので、日本では江戸時代に発生する。碑の基礎(趺)を鼻肩とするのが特徴で、鼻肩とは龍の子とされ(龍生九子)、形状は亀蛇で、重きを支えることを好むとされる霊獣である。

亀趺は、形態により文字通りの亀首と、一般に耳・牙を持ち頸を明確にもたげる獸首とがあり、後者は新羅後期から高麗期の韓半島、江戸時代以降の日本に見られる。尾部は主に蛇尾形と蓑尾形があり、表現されないものもある。碑石には原則篆額を伴い、碑身とは画された碑首を持つものも多く見られる。

本来は、墓前に設えられる官位三品(唐代では五品)以上の被葬者の事績を伝えるもので、墓石それ自体ではない。墓前ではなく墓道に設置されたものを特に神道碑と呼ぶ。いずれにせよ墓所にあつては、被葬者を顕彰する附属施設としてみるべきものである。

中国を起源とする儒式の施設であり、儒教の葬制において形状や

あり方が規定されるが、一方、仏教においては水天や妙見菩薩等の乗騎として亀趺が用いられることがある。

日本における亀趺碑の嚆矢は、ともに正保四年(一六四七)銘の山口重信碑・永井月旦碑が大名家のものとして最古例とされ、碑文はともに林羅山の撰である(藤井一九九二・三好二〇一一)。大名家の亀趺碑においては林家が関わる事例が多くみられる。

b. 九州における亀趺類の概観

亀趺碑類出現前の資料

まずは、亀趺は持たないものの、その出現前における関連事例二基を紹介しておく(第5図63・64)。ともに大名藩主家当主の碑文を伴う大形墓石で、没後間もない時期の造立と考えられる。

福岡市崇福寺の福岡藩祖黒田如水墓石(慶長九年―一六〇四没)は、碑文を伴う形態の墓石としては九州最古の事例である。碑文の撰者景轍玄蘇は、宗家に仕え、文禄の役からその後の己酉約条など朝鮮外交において活躍し、朝鮮王朝から銅印を授けられたという禅僧で(長一九八五)、本例は韓半島の文化に精通した彼の知見・指導による造立と考えられる。

寛文七年(一六六七)没の小倉藩初代小笠原忠真墓石は、忠真開基による臨済宗黄檗派(以下「黄檗宗」)の北九州市福聚寺にあり、篆額と弧状(竹管半裁形)の笠がつく点が注目される。この弧状の笠は、碑身頭部の形状(円首)に合わせたもので、同形態は、後述する九州の事例のほか、永井月旦碑・摂州伊勢寺碑など関西の亀趺碑(三好二〇一一)に類例が見られる。

これら二例は、九州における亀趺出現前から、葬制において朝鮮

半島を含め大陸文化の影響があったことを示すものといえよう。

亀趺碑類の形態

九州の亀趺碑類における造立の目的・性格は様々である。以下、列記する。

○藩主家・上級武士層の事績顕彰碑、○墓石（黄檗宗寺院にあるなど）、○儒教的要素の強い碑（聖堂記念、儒者の事績顕彰など）、○仏教的要素の強い碑・塔（開山僧の事績顕彰、寺堂創建や中興の記念、法華経等の読誦成就記念、一字一石経埋納に伴う地上標徴など）、○墾田事業の記念碑、○奉献灯籠・水盤

形状は個体差が著しいものの、藩主家・上級武士層の碑については総じて大形かつ丁寧なつくりで、篆額・双龍の表現を伴うなど亀趺碑本来の形態を踏まえており、その権威を象徴している（第5図65、第6図82・84など）。

その他、以下の傾向が認められる。亀趺については、長崎県五島市毘盧蔵閣碑・佐賀県武雄市焼山の墾田碑（頭部が碑身の側面を向く）（第5図78、第6図80）を除き、頭部の向きは全て碑身・塔身正面と同方向である。頭頸は獣首が殆どで、顎部の形状から亀首としたものでも鹿児島県始良市鳳山軒碑（第5図69）の他は全て耳や牙等を表現している。尾部は鹿児島県資料に数例の蛇尾が認められる他、全て葺尾である。碑首については、碑身との区画が不明瞭なもの、碑首が無いものが殆どであるが、鹿児島県始良市においては、碑首を明確に画し、棺を吊り降ろす際に縄を通すためとされる方孔（方穿）を伴う資料が多い（第5図65～68）。同市能仁寺跡加治木島津家墓所には、亀趺は伴わないものの、塔身に同様の方孔を穿つ墓石（「鳴

呼込女道之墓」銘など）が見られることを付記しておく。

最後に異形例を紹介する。唐津藩大久保初代忠職碑・佐賀鹿島支藩二代鍋島直條碑で、ともに立方形の基礎に鼻廔・波濤を刻むものである（第5図70～73）。鼻廔の造形は立体物ではないものの、碑文・篆額等を伴うこと、前述のように関西の事例に共通する弧状（竹管半裁形）の笠がつくことから亀趺碑と捉えられる。

亀趺碑類の時期

寛文一二年（一六七二）銘の唐津藩大久保初代忠職碑が初現で、造立者の二代忠朝が後に転封されたことから、この地を領した功績を碑として留める意図による造立とみられる。江戸時代の年記銘を持つものでは、天保一〇年（一八三九）の鹿児島藩八代島津重豪碑・武雄市焼山の墾田碑が最新で、概ね一八世紀前半に増加する傾向が認められ、一九世紀の作例も多い。

亀趺碑類の分布と要因

九州における亀趺碑類の分布には、明らかな偏在性が認められる。佐賀県・長崎県（肥前）と鹿児島県（薩摩・大隅西部）に多く、福岡県・大分県・熊本県には少数が存在し、宮崎県には認められない。以下、多く存在する県について、その要因を述べる。

佐賀県・長崎県については、長崎貿易を通じた中国文化の浸透、葬制の導入があったためと考えられる（第5図72～第6図81）。佐賀鹿島支藩二代鍋島直條碑がある普明寺、小城支藩六代直員室墓石がある玉毫寺が黄檗宗寺院であることが顕著な事例であり、両寺には黄檗形式の「寿塔」墓石が見られる。これに加え、京都万福寺回廊

に掲示されている各県の黄檗寺院を見ると、佐賀県二一箇寺・長崎県七箇寺と九州では肥前地方に多く⁽⁴⁾、これらが長崎街道沿いに分布する傾向があることから、黄檗宗の教線拡大のなかで、寺院に限らず中国文化総体が地域に浸透したためと考えられる。造立の目的・性格が藩主家に関わるものだけでなく、聖堂記念、寺堂記念、寺院中興記念、経塔、墾田事業記念・水盤の奉獻など、他地域に比べて多岐に及ぶことは、その表れといえよう。浄土宗の長崎市大音寺伝誉上人碑の造立年銘に「大清乾隆四十一年」と中国年号が用いられていること、諫早市市杵島神社の水盤における亀趺の顔の造形、特に顎部に髭の表現があることなど、中国からの直接的な情報が看取される事例も認められる。

鹿児島県については、鹿児島藩が江戸時代初期より財政難解消のため琉球を通じて中国・朝鮮などアジア諸国と行なってきた琉球口貿易が要因と考えられる(第6図82〜86)。特に、好奇心旺盛な知識人であった八代重豪が対外交渉の実用書といえる南部方言の中国語辞書を編纂するなど積極的に開化政策を推進したことはよく知られている⁽⁵⁾。こうした藩が主体となった、中国からの文物だけではない文化・情報の導入は、亀趺においてはさつま町の宮之城島津家四代久通碑における甲羅の骨状帯や手足の水かき表現において看取されるという(松原二〇一八)。この他にも、本藩八代重豪亀趺碑の基台碑文(碑陰)において、藩儒五代秀堯が造立に際して北京と福州の進士に問い合わせ、「爲石碑図様以其制」、すなわち亀趺の図面を取り寄せ、その位階制度や形態を学んだと記されていること、その成果が、特に碑首における形状や双龍・瑞雲の浮彫りに反映されていることは特筆できよう。

鹿児島県における中国文化の影響は亀趺碑類だけではない。円柱に龍・瑞雲を象した龍柱は、直接的には琉球から導入された可能性もあるものの、これを良く表すものである。全国的に見ても本県には多く、建築物としては著名な霧島神社や鹿児島神宮の社殿柱例をはじめ一五例があるという(橋口二〇一二)。ここでは、墓所等に見られる石造龍柱を取り上げることとする(第6図87・88)。好例は霧島市金剛寺跡にある。明治一四年(一八八一)銘の西南戦争「慰靈燈」ではあるが、亀趺の上に龍柱を立てており、二つの中国的要素が合一したものと見える。類例として、灯籠の竿石に龍柱形が用いられるものを下記に挙げる。

○霧島市金剛寺跡真応上人の入定石室前例、○鹿児島市福昌寺跡の本藩主家墓所にある二代光久世嗣綱久・五代継豊・六代宗信のそれぞれ墓前例、○日置市にある日置島津家菩提寺の大乗寺跡例、○伊佐市南方神社例(寛延元年―一七四八銘)、○同市箱崎神社例(明和元年―一七六四銘)⁽⁶⁾。

前三者に年記銘は無いが、没年は真応上人が元禄一一年(一六九八)、綱久が寛文一三年(一六七三)、継豊が宝暦一〇年(一七六〇)、宗信が寛延二年(一七四九)で、特に福昌寺例については墓石との位置や並立する他の年記銘を持つ灯籠との位置関係から、没年と大過無い時期の造立とみられる。一八世紀に増加する傾向は亀趺碑類と同じである。その他、灯籠竿石と同様の龍柱形の水盤が、日置市大乗寺跡の享保一二年(一七二七)造の島津歳久墓前に見られる。これは龍柱そのものではないが、その情報が灯籠・水盤に取り込まれ、鹿児島独自の中国的形態を発生させたものと捉えられる。また、鹿児島市磯菅原神社にある亀趺を伴う灯籠についても、上記と同様の

成因と考えられる（第6図89）。

碑文に見る儒者との関係性

碑文には儒者が撰じたものが多い。ここでは亀趺碑に加え藩主家・上級武士層の事績碑や碑文を伴う墓石の撰者から、造立の背景を考えたい（第3表、第6図90～94）。

江戸時代前期においては、林家（鷲峰・鳳岡）の撰が見られる。松原典明が指摘するように、対象者・造立者の個人的な思惟や林家との交流を示すものといえる（松原二〇一八）。九州では唐津市大久保忠職碑・鹿島市鍋島直篠碑・さつま町島津久通碑が挙げられる。

これに対し、江戸時代中期以降は藩儒の撰による例が多くなる（美濃口・野村二〇一七）。各藩が四書五経の教育に基づく藩校を創設するなど、藩士等の教育制度を整備するなかで、教授たる藩儒が碑の造立にも関わったため、一八世紀以降の事例が増加するのはそのためと考えられる。

c. 菊池氏の亀趺碑類について

菊池市内には、一三代武重・一五代武光・一七代武朝・二三代政隆の四基が存在する。本稿では原則、江戸時代の資料を対象としているが、形態比較のため、昭和三七年（一九六二）銘の武朝碑も扱うこととする。

前節を踏まえれば、菊池氏の亀趺碑類は、上級武士層としても中世（主に南北朝期）の領主を対象としたものであることが際だった特徴といえる。以下、安永九年（一七八〇）に造立され、菊池氏における亀趺碑類の嚆矢となった正観寺の武光碑を中心に述べる。

武光碑造立の契機

まずは、武光碑に亀趺が採用された、その範となった楠木正成碑について略記しておく⁽⁷⁾。正成縁の広嚴寺の請願を受けた徳川光圀が、元禄五年（一六九二）、戦死地の湊川にて造立したもので、主銘「嗚呼忠臣楠子之墓」は光圀自身の揮毫による。光圀は明暦三年（一六五七）、『大日本史』編纂に着手しており、建碑はその思想を実践した事業と捉えられる。

武光碑造立の契機は、碑文に明記されている⁽⁸⁾。以下、抜粋のうえ意識する。

「菊池氏則自寂阿公首死王事二子繼興能復君父之讎：宗族子弟無不同心協力以勤皇事：楠公歿後三百餘年常藩義公聞而慕之乃建碑於其所戰歿湊川：而菊池氏之墟則寥寥莫聞焉正觀公之墳在于墟之西南禪寺院中歲年遠遠無佗表識墳上獨有一大梅樹耳邑人澁江氏父子痛之喟然嘆曰菊池氏忠烈如彼而使楠氏獨專其美乎謀之豪族宗氏宗氏奮曰是我罪也我先世皆事菊池氏而被恩舊矣乃捐財建碑」

楠木正成の亀趺碑が造立され顕彰されている一方⁽⁹⁾、これに劣らない南朝の忠臣である菊池氏の墓は荒廃しており、武光においてすら、ただ墓標とされる一本の楠の大樹があるのみであった。在野の儒者澁江公豊父子はこれを嘆き、宗伝次に諮った。素封家であり、先祖が菊池氏に仕えていた伝次は、その旧恩に報いるため財を投じて碑を建てることとした。

ここで、澁江公豊・公正親子と宗伝次について補足しておきたい。公豊は菊池文教の祖とされ、家塾「集玄亭」において郷党の子弟約三〇〇人を教導し、後年、その功をもって藩から士席浪人格を与え

られている。公正是藩校時習館教官達に学び、父の公豊の遺業を継ぐとともに、後年、菊池氏を顕彰する『菊池風土記』を著している。武光碑造立の際には、楠木正成碑の「寸法」に範を求めたという（山口一九四八・今坂一九九六）。一方、宗伝次は、在町限府の町衆を努め、地域振興や慈善活動に積極的であっただけでなく、公豊に師事し儒教・俳諧に造詣が深かった（角田一九二八）。彼らは、当時の教養人として当然のことながら『神皇正統記』や『大日本史』に精通し、南朝正統論の信奉者であったであろう。ともに菊池氏の顕彰事業に務めており、公豊親子と伝次の親交が武光碑造立の契機となったことは明らかといえる。

武光碑における亀趺形態

亀趺の形状は個体差が著しく、通常、型式的特点を見出しにくいのが、菊池氏の亀趺碑類四基については共通性が認められ、また、他とは画される特徴がある。それは、蓑尾が大きく、高く跳ね上がり、後方から見ると目立つ尾部下面に花弁状の蓑毛表現があることで、武光碑・武重墓のものは特に大きく、別石にて作られている（第7図97～102）。

こうした特徴の理由は以下の史料から想定される。「永代御用實録日記」（『嶋屋日記』収録、花岡一九八七）に、天明二年（一七八二）三月一五日、武光碑の完成記念法要が正観寺にて執り行われたとあり、次いで造立の経緯についての記述がある。これによれば試行錯誤があつて制作には六・七年もの時間がかつたという。

「最初の亀首短く、恰好不宜候故、よこ町庄兵衛、下町市左衛門、右両人八代宮ノ地妙見社へ、至極能出来候亀首有之候よしにて、写二

参候処、夫ほとよろしく無候よしにて、引取居候処、國分寺之亀、石作之由、かの地にて承候故、國分寺之様ニ参、かの寺亀写取参、只今の亀二切直ス：諸雜用終始七十文錢三べ目程」

当初の「亀首」が短かつたため、八代妙見宮の「亀首」（亀蛇）を参考に写したが、あまり良くなかつたので、次いで国分寺にある石製の亀を写し、これをもとに「亀首」を刻み直したというのである。国分寺の「亀」といえば思い付くのは周防国分寺亀趺碑であるが、諸経費「七十文錢三べ目」からみて遠方まで視察に行つたとは考えづらい。「國分寺」は肥後国分寺のことと思われるが、現地踏査したところ石製の亀は確認できなかった。そのため「亀首」の原型は不明と言わざるを得ないが、ここでは、妙見宮の亀蛇を見たことに注目したい。文化年間頃の作とみられる「八代妙見宮祭礼絵巻」（八代市立博物館二〇一一）の亀蛇を見ると、赤く大きな尾が描かれている（第7図109）。実際の祭礼ではこの尾が上下に振られ、より強調されることになる。このことについては、「年々鏡」（『嶋屋日記』収録、花岡一九八七）に、武光の四百年忌翌年の安永二年（一七七三）、志満屋市兵衛が妙見祭に参詣し「跡おさえ大亀通ル」のを見たという記述から、菊池の關係者は知っていたとみられる。以上を鑑みれば、武光亀趺碑の尾の特徴的な形状は、妙見祭亀蛇の大きい尾が跳ね上がった様が反映された可能性が高いとみられるのである。

なお「最初の亀首短く、恰好不宜」の理由は、楠木正成碑の亀趺の形状に倣つたためと考えられる（第7図95・96）。正成碑は実見したところ、亀趺が短くもたげた亀首（耳・牙無し）、蛇尾、碑身が櫛形方柱形（奥行きは正面幅に比べて短い）で、武光碑との共通点は碑身の正面観のみである（武光碑の碑身はほぼ正四角柱形）。『菊池

『風土記』にあるように、当初は正成碑の「寸法」に範を求めたものの、上記のような試行錯誤の結果、異なった形状になったと考えられる。武光碑造立に際しての、関係者達のこだわりが伺われるといえよう。なお、この点については次項にて補記する。

武光碑の石材

武光碑の石材は、肉眼観察によればやや青味があった砂岩である。これについては「宗伝次日記」(『嶋屋日記』収録、花岡一九八七)、安永九年(一七八〇)の記事を参照する。伝次の「大望」であった武光碑がようやく完成したとあり、その石材・石工についての記述が見られる。

「石出所、観音嶽也、右石出方之節へ、正くわんし村より不残参ル、石工玉祥寺村次平と申者也」

近くの観音岳の石材を正観寺村の人々が総出で運んだというのである。菊池市東部の銚ノ甲／兵戸峠の山地には砂岩・礫岩からなる観音岳層が存在しており(富田一九九二)、武光碑の石材はこの砂岩と考えられる。ここで疑問となるのは、何故観音岳砂岩を使用したか、である。管見によれば、県北部における江戸時代的一般層(所謂庶民)の墓石は、豊富に産出し、また比較的軟質で加工しやすい凝灰岩が殆どで、観音岳砂岩は認められない。武光碑がある正観寺近くの渋江家・阿部家墓地における江戸／明治時代(一七世紀末～一九世紀)の墓石材を肉眼観察したところ、当主・当主と同等規模の大形墓石は凝灰岩二基・安山岩八基、中小規模の墓石は凝灰岩三一基・安山岩一七基・天草下浦砂岩一基であった。通常とは異なり安山岩が多く、これは俗名を記した墓石主銘に名字が見られることから判る

ように、渋江家・安部家が土席であることから安山岩使用に高階層性を顕示したためと考えられるが、いずれにせよ観音岳砂岩は認められなかった。以上から、武光碑の石材選択には明らかな意図があったと考えられる。

ここで注目したいのは、楠木正成碑の石材である。碑身に和泉青石といわれる和泉砂岩(亀跌は白川石といわれる花崗岩)を使用しており(三好二〇一一)、前述した「寸法」だけではない、正成碑に関する様々な情報が「石工次平」等にあつて、武光碑の石材において、同質のやや青味があった砂岩が選択されたと考えられる。

以上、武光碑造立に際しては、渋江公豊・公正親子と宗伝次が発意↓碑身の正面観と石材については、楠木正成碑の情報が採用された↓八代妙見宮の亀蛇の尾の形状が取り込まれ、本亀跌の特徴となつた↓「亀首」については肥後国分寺の石製の亀の形状が写された(現存せず原型は不明)という経緯があつたと結論づけたい。

武光碑の碑文撰者

碑文末には「熊府府學祭酒藪愨士厚謹撰」、「澁江公豊子錫謹書」、「宗英盈傳次謹建」とある。ここでは、撰者が藩校時習館二代館長藪孤山であることに注目する。

孤山と在野の儒者公豊・公正親子とは深い親交あり、孤山に師事した公正が撰文を依頼している。孤山は、昔年のこととはいえ幕府(室町幕府)に叛した武光の建碑に関することは憚れるものの、三人(公豊親子と伝次)の熱意に意気を感じ、これを請けたという(山口一九四八)。地元主導で造立してきた武光碑の撰文を自らではなく孤山に依頼したことには、公豊親子の意図があり、それは藩校時習

館長が関わることで箔をつけるだけでなく、武光の顕彰を藩が認めた公的な事業として、建碑の意義を高らしめるものであったと考えられる。

武重・政隆・武朝の亀趺碑類への継承

造立年順は、武重墓は文化一三年（一八一六）（堤二〇〇七）、政隆墓は嘉永四年（一八五二）以前、武朝碑は昭和三七七年銘（一九六二）である（第7図100～108）。政隆墓については、墓前の奉献灯籠の年記銘から想定しているが不確定であることをお断りしておく。

いずれも安山岩製であるが、亀趺の形状については、前述のように武光碑を含め、蓑尾が大きく高く跳ね上がる、下面に花弁状の蓑毛表現があるという、菊池氏碑類の独自性が共通している。亀趺については他にも、首を直にもたげる獣首、頭部が短頭、目は丸く眉上隆起が前方に張り出す、口を閉じ牙がある、耳が大きく先端が尖る、甲羅の周縁が波打つといった共通点があり、特に、目と眉上隆起の形状は菊池氏の特徴といつて良い。碑身の形状も共通しており、方柱形、頭部櫛形である。これら多くの共通点は、武光碑の形状が祖形となり、武重墓以降の造立に継承されたためと考えられる。

三．まとめ

中世領主・武將の墓石類は、特に中世期に没落した氏族については、その対象者個人が特定できるものは少ない。中世から近世（江戸時代）への転換期において、中世の在地領主層の墓・墓所が荒廃したた

め、また、近代以降における神仏分離令や戦災復興に伴う都市部開発により、多くが散逸、消滅したためと考えられる。

そのようななか、中世期に没落し、かつその後胤が領内から離れた氏族であるにも関わらず、菊池氏関連の墓石類は多く、それは江戸時代後期以降、現代にいたるまで彼らが南朝の忠臣として顕彰されてきたためといえる。特に、江戸時代、在町として経済的に発展し、渋江氏による儒教教育が普及した菊池市域においては、墓石類を新造、あるいは灯籠・石柵などの付帯施設を造作するなど地元主導による事業が多く見られることが注目される。

墓石類を新造した事例として特筆されるのは、一五代武光碑など四基の亀趺碑類である。佐賀・長崎県や鹿児島県に見られるような中国文化の浸透に起因するものではなく、あくまでも菊池氏を顕彰する意図で形態が選択、造立されたと考えられる。一五代武光碑は、儒者渋江公豊親子と町衆宗伝次により発意され、試行錯誤のなか、楠木正成碑に倣って石材には砂岩が選択され、八代妙見宮の亀蛇の形状が亀趺の尾の形状に取り入れられて、その特徴となったと考えられる。後に造立された一三代武重など三基の亀趺碑類においては武光碑の形状が踏襲されており、そのインパクトを表している。また、初代則隆塔などに、造立当時、肥後においては衰退していた有角五輪塔をあえて選択したことは、より荘厳化した塔形態を用いて菊池氏を顕彰しようとする意図によるものと考えられる。

最後に付記しておきたいのは、二代経隆について神社の社殿がその廟とされ、文化八年（一八一二）銘の渋江公正碑石にあるように、豊作・病気平癒・水旱防止の験があるとして地元民の信仰対象となっていたことである。同様のことは二三代政隆墓にも見られ、本文では触れ

なかったが、多くの転礫が供えられており、これは政隆が久米原の戦いのなかで自刃した際、最後は矢尽き石を投げて戦ったとの伝承から、石を供えると歯痛が治るといふ信仰によるものという。菊池氏への顕彰が民間信仰へと拡がっていった様を示す事例として注目していただきたい。

本稿を執筆するに際しては、下記の方々よりご教示・ご協力をいただいた。文末に記し、深甚の謝意を申し上げます。

有川孝行・永井孝宏・高橋学・永見秀徳・橋口剛士・早瀬輝美・鷺崎有紀・見学をお許しいただいた各寺社（敬称略）

註

- (1) 各資料の年代は、型式を踏まえながら記銘から判断し、石材・形態も現地観察に基づく。その他、経緯や由来などの情報は、多くは自治体等が現地に設置した案内板を参照した。
- (2) 石塔と呼びがたい自然石を用いた地上標徴についても、前記した「墓石類」と称することとする（以下同）。
- (3) 渋江公正著『菊池風土記』については現代訳本（今坂一九九六）を参照した。
- (4) 九州における最多は福岡県筑後地方である。柳川藩主や三池藩主の立花家が黄檗宗に帰依したことが要因であろうが、藩主家・上級武士層の墓石類（黄檗形式）を除いて、その文化総体が広く浸透することはなかったと考えられる。
- (5) 鹿児島黎明館企画展「近世薩摩藩の対外交流」による。
- (6) 橋口尚武によれば、鹿児島県には他数例があるという（橋口二〇二二）。
- (7) 湊川神社発行のパンフレット『大楠公墓所 嗚呼忠臣楠子之墓』を参照した（発行年未記載）。

- (8) 武光碑の碑文は風化しており、辛うじて文字が刻されているのが判る程度である。碑文は以下の掲載を参照した（後藤一九一六・角田一九二八）。
- (9) 正成碑現地には、宝暦元年（一七五二）銘を最古として尼崎藩主等が奉献した灯籠群がある。

参考文献

- 石田茂作 一九六九『日本仏塔』 講談社
- 今坂正哉校訂 一九九六『寛政六年渋江公正著菊池風土記』 株式会社ボス・コーポレーション
- 圭室文雄 一九九五「市井の郷土史家の手記（一）」『明治大学 教養論集 通巻二七九号』 明治大学
- 後藤是山編 一九一六「森本一瑞遺纂・水島貫之校補・佐佐豊水助補 増補校訂肥後 國志卷之六」『肥後國誌』（一九七二『肥後國誌上巻』 青潮社復刊）
- 白石太一郎 一九九三「奈良県宇陀地方の中世墓地」『国立歴史民俗博物館研究紀要 第四九集』 国立歴史民俗博物館
- 角田政治 一九二八「贈從五位宗傳次」 肥後地歴叢書刊行会
- 中世葬送墓制研究会 二〇一六『第六回中世葬送墓制研究会資料 石造物の転用と中世墓の終焉（二）』
- 堤克彦 二〇〇七「菊池武重墓の改修」『郷土史譚一〇〇話菊池』 熊本出版文化会館
- 富田幸臣 一九九二「銚ノ甲地域の古第三系」『日本の地質九州地方』 共立出版株式会社
- 長正統 一九八五「景轍玄蘇」『国史大辞典五』 吉川弘文館
- 野村俊之・美濃口雅朗 二〇一三「九州大名墓調査の視点」『第五回 大名墓研究会 発表資料』 大名墓研究会
- 野村俊之・美濃口雅朗 二〇一九「有角五輪塔考―近世九州における異型五輪塔の発生と展開―」『論集葬送・墓・石塔』 狭川真一さん還暦記念会

橋口尚武 二〇二一『南九州の「龍」』 有限会社鉾脈社

花岡興輝編輯・校訂 一九八七『嶋屋日記』 菊池市史編纂委員会

原口長之 一九八一「細川氏の政治」『植木町史』 植木町

平勢隆郎 一九九三「日本近世の亀跌碑―中国および朝鮮半島の歴代亀跌碑との比較を通して―」『東洋文化財研究所紀要第二二二冊』 東京大学東洋文化財研究所

平勢隆郎 二〇〇四『亀の碑と正統』 白帝社

福岡市 二〇一一「黒田家史料」『新修福岡市史資料編近世一領主と藩政』

藤井直正 一九九二「亀跌をもつ石碑の系譜(二)」『大手前女子大学論集二二六号』

大手前女子大学

前川清一 一九九五「宝篋印塔」『菊鹿の石造物』 菊鹿町教育委員会

松原典明 二〇一八『近世大名葬制の基礎的研究』 石造文化財調査研究所

美濃口雅朗・野村俊之 二〇一七「九州の大名墓における儒教の影響」『第九回大名墓研究会発表資料』 大名墓研究会ほか

三好義三 二〇一一「近畿地方所在の亀跌碑における和泉砂岩の利用について」『石造文化財三』 石造文化財調査研究所

八代市立博物館未来の森ミュージアム 二〇一一『八代の歴史と文化二二 大妙見祭展〜華ひらく祭礼風流〜』

山口泰平 一九四八『肥後澁江氏傳家の文教一』(二〇〇八『肥後澁江氏傳家の文教』 菊池市教育委員会復刊)

山口泰平 一九四八『肥後澁江氏傳家の文教一』(二〇〇八『肥後澁江氏傳家の文教』 菊池市教育委員会復刊)

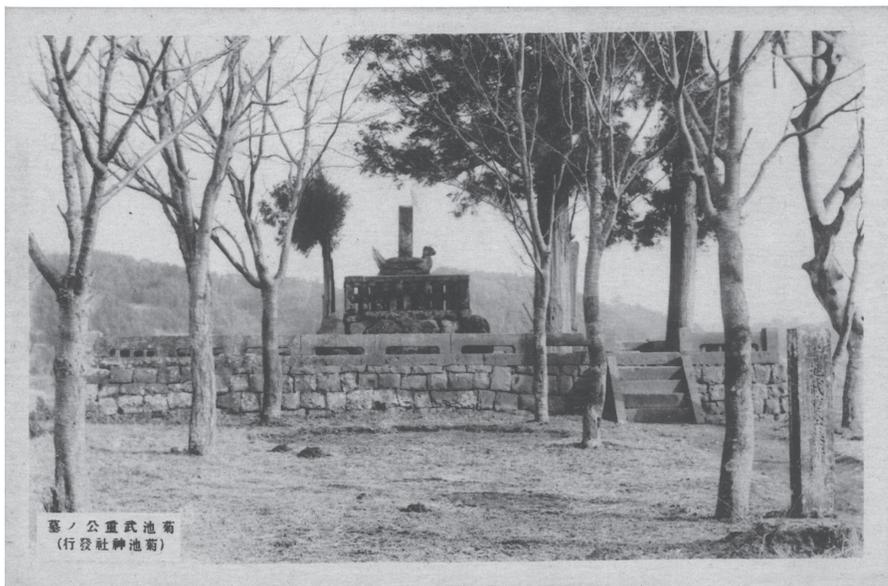
山口泰平 一九四八『肥後澁江氏傳家の文教一』(二〇〇八『肥後澁江氏傳家の文教』 菊池市教育委員会復刊)

山口泰平 一九四八『肥後澁江氏傳家の文教一』(二〇〇八『肥後澁江氏傳家の文教』 菊池市教育委員会復刊)

追記

脱稿後、三代武重墓所の絵葉書(菊池神社発行)を見つけ、購入した。キャプションが右横書きで、また明治三七年(一九〇四)銘の顕彰碑が写っていることから二〇世紀前半の発行とみられる(宛名面の形式は大正七年以降)。この他に菊池市正観寺武光墓・武政墓の同様の絵葉書もある。

当時、菊池氏の墓が名所として認識され、親しまれていたことを示す資料として紹介しておく。



墓ノ公重武池菊
(行發社神池菊)

第1表 中世墓石類一覧

凡例：アミかけは江戸時代以降に造立されたもの。

「江戸以降の付帯物」は供養・検証の形跡を明確に示すもので、以下のように略記している。

灯籠→灯、水盤→水、供養・顕彰碑→碑・石柵→柵、低い石塀→塀、覆屋→覆

※女性は原則扱わないが、近世大名家の立藩に大きく関わった人物は例外として取上げている（佐賀藩の慶閏尼・日出藩の朝日局）。

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	型式差、造立年	江戸以降の付帯物	備考
福岡県							
宗像市	伝平 信盛	笠付方柱形	砂岩	13c ^カ	有、江戸前期	土塀・灯	伝落人、明治21年に補修・整備
宗像市	承福寺(臨濟)近く 宗像氏貞	円頭方柱	砂岩	天正14 (1586)	無	覆屋	周囲に家臣墓(占部氏)あり
宗像市	宗生寺(曹洞)	小早川隆景 宝篋印塔(関西型)	花崗岩	慶長2 (1597)	無		供養塔、周辺に殉死者五輪塔
新宮町	梅岳寺(曹洞)	戸次(立花)道雪 宝篋印塔	安山岩	天正13 (1585)	無	灯	相輪・塔身欠
福岡市	菊池神社	菊池12代武時 塚(基壇)+自然石	緑泥片岩	元弘3 (1333)	有、天保2年	神社	伝胴塚、城 武貞造立、基壇六角形
福岡市	菊池霊社	菊池12代武時 自然石(板状)	緑泥片岩	元弘3 (1333)	有、昭和7年	神社	伝首塚
太宰府市	岩屋城跡	高橋紹雲 塚(基壇)	花崗岩	天正14 (1586)	有、18c末 ^カ	碑・灯	戦死地、基壇間知積み、 碑は三池藩6代立花種周(8世孫)建
筑紫野市	般若寺跡近く	高橋紹雲 塚(基壇)	花崗岩	天正14 (1586)	有、18c末 ^カ		伝首塚、基壇切込接ぎ積み
久留米市	千光寺(曹洞)	懐良親王 宝篋印塔	安山岩	弘和3 (133)	有、16c	柵・灯	千光寺は伝埋葬地(大原原の戦い)
久留米市	千光寺(曹洞)	懐良親王 塚(基壇)+自然石積み		弘和3 (133)	有、近代 ^カ	柵・灯	灯籠は久留米商工会奉納
柳川市	福厳寺(黄檗)	戸次道雪 寿塔形式	花崗岩	天正13 (1585)	有、延宝2年 ^カ	覆	福厳寺は2代藩主忠茂が延宝2年中興
柳川市	天叟寺(臨濟)	高橋紹雲 有角五輪塔	安山岩	天正14 (1586)	有、江戸前期	碑	
大牟田市	法輪寺跡(黄檗)	高橋紹雲 異形有角五輪塔	凝灰岩	天正14 (1586)	有、寛政元年 ^カ	碑(寛政元年)	碑の撰文は藩儒者
みやま市	帝釈寺(黄檗)	蒲池鎮運 有角五輪塔	安山岩	天正20 (1592)	無		
みやま市	真弓神社	真弓廣有 尖頭方柱形	凝灰岩	正平24 (1369)	有、明治元年	柵	南朝の忠臣、五百年遠忌造立
姫路市	御着城跡	小寺(黒田)重隆 有角五輪塔(筑前型)	花崗岩	元禄7 (1564)	有、享和2年	塀・柵・灯・覆	塔・柵・灯は福岡産
姫路市	功山城跡近く	小寺(黒田)職隆 五輪塔	豊島石	天正13 (1585)	無	柵・灯・覆	二百年遠忌造、柵・灯は福岡産
佐賀県							
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺初代季慶 宝篋印塔	安山岩	13c	有、戦国期		鎌倉初期に佐嘉郡村中の地頭職補任
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺11代家氏 有角五輪塔	安山岩	戦国期	有、16c末		後家合せ
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺12代康家 宝篋印塔	安山岩	永正7 (1510)	無		
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺13代家和 有角五輪塔	安山岩	享禄元 (1528)	有、江戸初期		後家合せ
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺14代胤久 五輪塔	安山岩	天文8 (1539)	無		後家合せ
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺15代胤栄 五輪塔	安山岩	天文17 (1548)	無		
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺16代隆信 有角五輪塔	安山岩	天正12 (1584)	無		
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺胤明 有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、16c後		
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家純 有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸中後期		川上・祇園原で戦死
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺周家 有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、戦国~江戸初期		川上・祇園原で戦死、後家合せ
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺純家 有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸初期		川上・祇園原で戦死、後家合せ
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺頼順 有角五輪塔	安山岩	天文14 (1545)	有、江戸初期		川上・祇園原で戦死
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家門 宝篋印塔	安山岩	天文14 (1545)	無		川上・祇園原で戦死
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家泰 宝篋印塔	安山岩	天文14 (1545)	無		川上・祇園原で戦死
佐賀市	高伝寺(曹洞)	龍造寺家兼 宝篋印塔	安山岩	天文15 (1546)	無		
佐賀市	高伝寺(曹洞)	波多 吉 有角五輪塔	安山岩	慶長3 (1598)	無		隆信息・波多氏に養子
※高伝寺の龍造寺塔は、明治4年(1871)、鍋島藩主直大が領内各地にあったものをまとめたもの。							
佐賀市	高伝寺(曹洞)	鍋島清久 笠塔婆(仏像半肉彫り)	安山岩	天文21 (1552)	有、江戸前期 ^カ	柵	江戸以降の墓域とは別区画
佐賀市	高伝寺(曹洞)	鍋島清房 有角五輪塔	安山岩	天正13 (1585)	有、17c中	柵	開基、江戸以降の墓域とは別区画
佐賀市	高伝寺(曹洞)	慶閏尼 笠塔婆	安山岩	慶長5 (1600)	無	柵	龍造寺墓域とは別区画
佐賀市	慶閏寺(曹洞)	慶閏尼 石祠形	安山岩	慶長5 (1600)	有、江戸前期 ^カ	柵・灯	龍造寺隆信実母・鍋島直茂継母
佐賀市	本行寺(日蓮)	龍造寺胤家 宝篋印塔	安山岩	享禄4 (1531)	無	柵・灯	塔身記銘(俗名)は追刻
小城市	円通寺門前(臨濟)	千葉宗胤 自然石(無銘)	安山岩	永仁2 (1294)	有、江戸期		隣りに自然石の墓碑再立(江戸後期)
多久市	専称寺(時)	小式政資 重制無縫塔	安山岩	明応6 (1496)	無		
多久市	専称寺(時)	小式資元 重制無縫塔	安山岩	天文5 (1536)	無		
白石町	陽興寺(曹洞)	平井経治 宝篋印塔	安山岩	天正2 (1574)	無		
武雄市	潮見神社	菊池5代経直 尖頭方柱形	安山岩	文治2 (1186)	有、昭和39年銘	ブロック塀	潮見神社笠懸時に死去と伝わる
武雄市	円応寺(曹洞)	後藤純明 宝篋印塔	安山岩	天文22 (1553)	無		
武雄市	円応寺(曹洞)	後藤貴明 五輪塔	安山岩	天正11 (1583)	無		逆修塔
武雄市	光明寺(曹洞)	後藤貴明 自然石(無銘)	砂岩	天正11 (1583)	無	柵・灯	
伊万里市	山ん寺廃寺	源(松浦)久 宝篋印塔	砂岩	弘安4 (1148)	有、戦国期		通拝墓
伊万里市	山ん寺廃寺	源(松浦)直 宝篋印塔	砂岩	承安2 (1172)	有、戦国期		通拝墓
伊万里市	山ん寺廃寺	源(松浦)清 宝篋印塔	砂岩	正治2 (1200)	有、戦国期		通拝墓、相輪欠
長崎県							
松浦市	旧苑陵寺(曹洞)	源(松浦)久 自然石	玄武岩	弘安4 (1148)	有、江戸中期 ^カ	灯	
松浦市		伝 松園休己 自然石板碑	玄武岩	天文11 (1542)	無、逆修塔		

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	型式差、造立年	江戸以降の付帯物	備考
松浦市	志佐純高	有角五輪塔	安山岩	天正20（1592）	無		
松浦市	松浦 定	有角五輪塔	玄武岩	文禄2（1593）	有、17世紀初頭		「文禄の役松浦家供養塔」にある
佐々町	東光寺（曹洞） 松浦豊久	宝篋印塔	玄武岩	文明11（1479）	無	門	門は礎石のみ残
長崎市	菩提寺（曹洞） 鍋島純賢	宝篋印塔	安山岩	16c	無、逆修塔		深堀鍋島家祖、天正14年造
対馬市	西山寺（臨濟） 宗 義盛	笠付方柱形	砂岩	永正17（1521）	有、江戸中期		宝珠・露盤欠
対馬市	太平寺（曹洞） 宗 義調	宝篋印塔	砂岩	天正16（1589）	無	灯	天正17年造
平戸市	松浦 勝	宝篋印塔	玄武岩	応永6（1399）	無（塔身のみ）		後家合せ
平戸市	普門寺（臨濟） 松浦 義	自然石	玄武岩	文明2（1470）	有、江戸後期か	水（安永8年銘）	
平戸市	普門寺（臨濟） 松浦 弘定	自然石	玄武岩	天正12（1515）	有、江戸後期か	灯（天保13年銘）	
五島市	清浄寺（曹洞） 宇久純堯	五輪塔（関西型）	花崗岩	天正15（1587）	有、17c中後	灯	キリシタン
五島市	大門寺（曹洞） 五島（宇久）純玄	宝篋印塔（関西型）	砂岩	文禄3（1594）	有、寛永11年か	石祠（寛永11年銘）	当初は朝鮮瓦葺き木造廟
大分県							
日出町	松屋寺（曹洞） 朝日局	五輪塔	安山岩	慶長3（1598）	有、18c前		日出藩祖家定・秀吉室おねの母
大分市	長宗我部信親	摩尼輪塔	凝灰岩	天正14（1586）	無	塚・鳥居・碑	戦死地付近、碑は2基（明治・昭和）
津久見市	大友宗麟公園 大友宗麟	笠付方柱形	安山岩	天正15（1587）	有、寛政期	木柵・覆	遺臣後裔の白杵城豊造
津久見市	大友宗麟公園 大友宗麟	キリスト教墓石	石灰岩	天正15（1587）	有、昭和52年銘	塀	顕彰会造
臼杵市	到明寺跡 大友義鑑	異形宝塔	凝灰岩	天文19（1550）	無	石祠（明和6年銘）	15代親繁（明応元年没）塔の系譜
竹田市	西光寺（浄土） 中川清秀	宝塔	凝灰岩	天正11（1583）	有、17c前		遙拝墓
竹田市	西光寺（浄土） 中川秀政	宝塔	凝灰岩	天正20（1592）	有、17c前		遙拝墓
宮崎県							
西都市	大安寺跡（曹洞） 伊東6代祐堯	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	無		同一区画にあり、 近くに家臣墓群（木崎原戦死）、 11代義益墓は偽墓
西都市	大安寺跡（曹洞） 伊東8代尹祐	異形五輪塔	凝灰岩	大永3（1523）	無		
西都市	大安寺跡（曹洞） 伊東9代祐充	伊東塔	凝灰岩	天文2（1533）	無		
西都市	大安寺跡（曹洞） 伊東12代義益	伊東塔	凝灰岩	永禄12（1569）	無		
西都市	栄岸寺跡 米良初代重次	自然石	砂岩	天文20（1551）	有、嘉永4年		子孫米良（菊池）則忠造
西都市	栄岸寺跡 米良2代重種	自然石	砂岩	永禄2（1559）	有、江戸後期		
西米良村	新立寺跡（真言） 米良4代重鑑	自然石	砂岩	天正2（1574）	有、江戸末期		子孫米良16代米叙造、 現宇佐神社（昭和14年移転）
西米良村	新立寺跡（真言） 米良重為ほか	五輪塔	凝灰岩	永享7（1574）	有、慶安5年銘		子孫米良10代則隆造（戒名複数）、 現宇佐神社（昭和14年移転）
小林市	伊東塚（昌寿寺跡） 伊東祐安	五輪塔	凝灰岩	元龜3（1572）	有、慶安3年	碑（文化14年）	木崎原戦死、島津家臣（五代氏）造
宮崎市	清武城跡 伊東6代祐堯	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	有、大永4年	柵、板碑（大永4年）	同一区画（基壇上）に並立、 同区画に家臣墓（宮田氏）あり
宮崎市	清武城跡 伊東10代祐吉	伊東塔	凝灰岩	天文5（1536）	無	柵	
宮崎市	清武城跡 伊東7代祐国	伊東塔	凝灰岩	文明17（1485）	有、江戸後～	柵	
宮崎市	清武城跡 伊東8代尹祐	伊東塔	凝灰岩	大永3（1523）	有、江戸後～	柵	
宮崎市	天昌寺跡 島津家久	伊東塔	凝灰岩	天正15（1587）	無		
宮崎市	天昌寺跡 島津豊久	伊東塔	凝灰岩	慶長5（1600）	無		関ヶ原戦死、同戦死の家臣墓群近く
日南市	報恩寺跡（臨濟） 伊東11代義祐	板碑形	凝灰岩	天正13（1585）	有、17 c		歴代藩主墓と同じ大形基壇上
日南市	長持寺跡（曹洞） 伊東義賢	伊東塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無		キリシタン
日南市	長持寺跡（曹洞） 伊東祐勝	伊東塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無		キリシタン
串間市	西林院（臨濟） 秋月種実	宝篋印塔	凝灰岩	慶長元（1596）	無	灯（延享元年）・柵	柵は他2基との共有
鹿児島県							
出水市	感応寺（臨濟） 島津初代忠久	宝篋印塔	凝灰岩	嘉禄3（1227）	有、14c	大形基壇・柵・水	分骨墓、基礎後補、神号追刻確認
出水市	感応寺（臨濟） 島津2代忠時	宝塔	凝灰岩	文永9（1272）	有、戦国期	大形基壇・柵・水	分骨墓、神号追刻
出水市	感応寺（臨濟） 島津3代久経	宝塔	凝灰岩	弘安7（1284）	有、戦国期	大形基壇・柵・水	神号追刻
出水市	感応寺（臨濟） 島津4代忠宗	宝塔	凝灰岩	正中2（1325）	有、戦国期か	大形基壇・柵・水	相輪・笠は後補、神号追刻
出水市	感応寺（臨濟） 島津5代貞久	宝塔	凝灰岩	貞治2（1363）	有、戦国期か	大形基壇・柵・水	塔身等後補、神号追刻
※感応寺の初代～5代墓「五廟社」は大形の共有基壇上に並立。水盤は2基とも享和4年銘（この時に整備か）。							
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津初代用久	宝塔	凝灰岩	長禄3（1459）	無	柵	初代用久～7代忠辰塔は同一区画内 （基壇）にあり、 領内から移転・整備（宝永5年）、 5・7代塔は相輪欠
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津2代国久	宝塔	凝灰岩	明応7（1498）	無	柵	
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津3代重久	異形宝篋印塔	凝灰岩	天文5（1536）	無	柵	
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津4代忠興	異形宝篋印塔	凝灰岩	大永5（1525）	無	柵	
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津5代実久	異形宝篋印塔	凝灰岩	天文22（1553）	無	柵	
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津6代義虎	宝塔	凝灰岩	天正13（1585）	無	柵	
出水市	龍光寺跡（曹洞） 薩州島津7代忠辰	宝塔	凝灰岩	慶長2（1597）か	無	柵	
出水市	龍光寺（曹洞） 薩州島津忠兼	異形宝篋印塔	凝灰岩	永禄8（1565）	無	塀・灯	
日置市	梅天寺跡（曹洞） 島津家久	平頭方柱形	凝灰岩	天正15（1587）	有	灯？	近くに永吉土相中・明和4年銘の灯籠 1対、水入れ銘「良温」は元文期の人
日置市	天昌寺跡 島津豊久	自然石	花崗岩	慶長5（1600）	有	碑・灯	
始良市	総禅寺跡（曹洞） 豊州島津初代季久	宝塔	山川石	文明9（1477）	無	柵・灯	相輪欠
始良市	総禅寺跡（曹洞） 豊州島津6代朝久	宝篋印塔	凝灰岩	文禄2（1593）	無	柵・碑・覆	覆屋（石製）は寛永7年銘

墓石類からみた江戸時代における菊池氏の顕彰／野村俊之・美濃口雅朗

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	型式差、造立年	江戸以降の付帯物	備考	
鹿児島市	川田堂園供養塔群	比志島重賢	宝塔	凝灰岩	13c	有, 14c	角塔婆(永仁2年) 次代川田盛資以降の供養塔あり	
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	薩摩島津6代師久	宝篋印塔	凝灰岩	永和2(1376)	無	灯	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	大隅島津6代氏久	宝塔	凝灰岩	嘉慶元(1387)	無	灯	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津7代元久	宝篋印塔	山川石	応永18(1411)	無	大形基壇	後家合せ, 神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津7代元久	方柱形	凝灰岩	応永18(1411)	有, 文化10年	塀	大風倒壊により新造
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津8代久豊	宝篋印塔	山川石	応永32(1425)	無	大形基壇	後家合せ(宝珠欠), 神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津9代忠国	宝篋印塔	山川石	文明2(1470)	無	柵	後家合せ(相輪欠), 神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津10代立久	宝篋印塔	山川石	文明6(1474)	無	灯	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津11代忠昌	宝篋印塔	山川石	永正5(1508)	無	灯	後家合せ, 神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津12代忠治	宝篋印塔	山川石	永正12(1515)	無	灯	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津13代忠隆	宝篋印塔	山川石	永正16(1519)	無	灯	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津14代勝久	宝篋印塔	凝灰岩	天正元(1573)	無	灯	宝珠欠, 神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津15代貴久	宝篋印塔	山川石	元亀2(1571)	無	大形基壇	神名追刻
鹿児島市	福昌寺跡(曹洞)	島津久保	宝篋印塔	山川石	文禄2(1593)	無	大形基壇	神名追刻
※福昌寺跡の島津6代師久～島津久保塔は、江戸時代に領内各地にあったものをまとめたもの。								
鹿児島市	大川寺跡(曹洞)	川田義秀	宝篋印塔	凝灰岩	16c	無		川田義明養父
鹿児島市	大川寺跡(曹洞)	川田義朗	宝篋印塔	凝灰岩	文禄4(1595)	無	灯(万治2年)	
鎌倉市	頼朝法華堂近く	島津初代忠久	五輪塔	安山岩	嘉禄3(1227)	有, 享保10年か	柵・灯・水・碑等	後家合せ, 神号追刻, 8代藩主重豪の造成整備(安永8年)
熊本県(菊池市除く)								
荒尾市	浄業寺(浄土)	小代行平など3基	五輪塔	凝灰岩	13c	有, 14c		鎌倉初期3代の供養塔, 伝源氏三代塔
荒尾市	浄業寺(浄土)	小代重政	五輪塔	凝灰岩	明徳2(1391)	不明		地輪のみ(後家合せ)
荒尾市	浄業寺(浄土)	小代弘行	五輪塔	凝灰岩	永享7(1435)	不明		地輪のみ(後家合せ)
荒尾市	浄業寺(浄土)	小代泰弘	五輪塔	凝灰岩	文亀元(1501)	無		空風輪欠
和水町		由布大炊助	自然石	凝灰岩	天正15(1587)	有, 江戸後期	祠, 灯(安政5年銘)	祠に安置, 「耳の神様」として信仰対象
玉名市		宇佐公満	五輪塔	凝灰岩	承久元(1219)	有, 文応元年		空風火輪は後家合せ, 文応元年改葬
玉名市	願行寺(時)	龍造寺隆信	五輪塔	凝灰岩	天正12(1584)	無		後家合せ, 高瀬川に首を遺棄(伝承)
玉東町	西安寺跡(天台)	山北相良頼平	五輪塔	凝灰岩	13c	無, 正嘉元元年		逆修塔カ
山鹿市	日輪寺(曹洞)	菊池12代武時	五輪塔	凝灰岩	元弘3(1333)	有, 19c	柵	地輪正面に俗名「肥後守武時入道」
山鹿市	雲閑寺跡(天台)	宇野親治	五輪塔	凝灰岩	文治2(1186)	有, 14c	柵(近現代)	
山鹿市	徳栄寺(浄土真)	城親冬	方柱板碑	凝灰岩	16c後半	無		
山鹿市	墓地公園	隈部親永ほか	五輪塔	花崗岩	天正16(1588)	有, 現代	灯	肥後国衆一揆にて死没
山鹿市		内古閑鎮房	自然石	チャート	天正16(1588)	有, 江戸中後期		肥後国衆一揆にて死没
山鹿市		小西行長	自然石(板状)	安山岩	慶長5(1600)	無, 17c		記銘戒名・基礎アロエ文カ
南小国町	満願寺(真言)	北条時定	五輪塔	凝灰岩	正応3(1290)	無		緩やかな塚上に五輪塔
南小国町	満願寺(真言)	北条定宗	五輪塔	凝灰岩	永仁3(1295)	無		緩やかな塚上に五輪塔
南小国町	満願寺(真言)	北条随時	五輪塔	凝灰岩	元亨元(1321)	無		緩やかな塚上に五輪塔
高森町	含蔵寺(曹洞)	高森惟直	有角五輪塔	安山岩	天正14(1586)	有, 18c	柵・灯	高森落城自刃, 五輪塔は佐賀平野産
高森町	含蔵寺(曹洞)	三森能因	圭頭方柱形	安山岩	天正14(1586)	有, 18c		高森氏家臣, 高森落城自刃
熊本市	大慈寺(曹洞)	川尻泰明	櫛形	安山岩	鎌倉後期	有, 江戸後		記銘俗名
熊本市	蔵島神社近く	内古閑基貞	異形五輪塔	安山岩	永享4(1432)	有, 18c	灯, 地藏像	地藏像は元文3年・三界万霊銘, 近くに家臣供養塔2基
熊本市		阿蘇惟益	自然石板碑	安山岩	16c	無, 永禄12年銘	灯	17cに追刻(俗名「神儀」)
熊本市	内田家墓所	内田頼勝	自然石板碑	安山岩	天文15(1546)	有, 17c		同域に子孫の自然石板碑群
熊本市	寂心さんの樟	鹿子木親良(寂心)	自然石(板状)	安山岩	天文18(1549)	有, 弘化4年		没年銘誤記, 子孫松浦親俊等造立
熊本市	岳麓寺跡(曹洞)	田尻惟家	五輪塔	凝灰岩	天文22(1553)	無		
熊本市		石坂石見守	五輪塔	安山岩	16c前～中	無, 天文15年銘		
熊本市	東福寺跡	石坂武治	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	元亀2(1571)	無		基礎記年銘は追刻
熊本市	空古閑神社	内古閑鎮資	宝篋印塔	凝灰岩	天正3(1573)	無	柵	
熊本市	岳林寺(曹洞)	城親賢	五輪塔	安山岩	天正9年(1581)	有, 江戸後期	灯	
熊本市		佐々宗能	石祠形	凝灰岩	天正15(1587)	有, 近代か		戦死地, 地元吉松村石工造カ
熊本市	本妙寺(日蓮)	小西行長	笠塔婆形	安山岩	天正15(1587)	有, 昭和28年銘		遺臣の子孫と伝わる家が造立
宇土市	宗福寺(曹洞)	名和行直	宝篋印塔	凝灰岩	元亀2(1571)	無		
御船町	永寿寺(天台)	甲斐宗運	不明	凝灰岩	天正12(1584)	不明	柵	寄集め(相輪・宝篋印塔基礎など)
山都町	華蔵寺跡	阿蘇惟忠	圭頭方柱形	凝灰岩	文明17(1485)	有, 近代		
山都町		阿蘇惟豊	宝篋印塔	安山岩	永禄2(1559)	無		相輪・基台の他は平成2年の後補
山都町		阿蘇惟種	宝篋印塔	安山岩	天正12(1584)	無	柵・灯(明治4年)	石柵の奉納者銘(4名)は姓無し
山都町		甲斐宣光	宝篋印塔	凝灰岩	大永3(1523)	無		後家合せ, 緩やかな塚・板碑を伴う
八代市	懐良親王御陵	懐良親王	宝篋印塔	凝灰岩	弘和3(133)	無, 天授7年銘	柵・鳥居	塚あり, 柵は大規模な方形囲繞
八代市	正福寺(浄土真)	菊池14代武士	自然石	砂岩	応永8(1401)	有, 江戸期	柵	背面俗名

所在地	被葬者・対象者	形態（形式）	石材	没年	型式差、造立年	江戸以降の付帯物	備考
八代市		下相良18代義陽	標柱（頭部雲形）	凝灰岩	天正9（1581）	有、延宝7年	柵・灯・碑 戦死地、灯籠は明和5年・文政12年銘、碑は四百年忌
八代市	泰勝院跡（臨濟）	織田信長	五輪塔	凝灰岩	天正10（1582）	有、14c	細川忠興造・追刻（寛永18年銘）
人吉市	願成寺（真言）	下相良初代長頼	方柱形	安山岩	建長6（1254）	有、明治19年	大形基壇・柵・灯 西南戦争以前は廟（金堂）
人吉市	願成寺（真言）	下相良2代頼親	五輪塔	凝灰岩	文永元（1264）	有、14c	2～19代は共有基壇上
人吉市	願成寺（真言）	下相良3代頼俊	五輪塔	凝灰岩	延慶3（1310）	無	空輪欠
人吉市	願成寺（真言）	下相良4代長氏	五輪塔	凝灰岩	正平7（1352）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良5代頼広	五輪塔	凝灰岩	延文元（1356）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良6代定頼	五輪塔	凝灰岩	文中元（1372）	有、15c	
人吉市	願成寺（真言）	下相良7代前頼	五輪塔	凝灰岩	明德5（1394）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良8代実長	五輪塔	凝灰岩	応永24（1417）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良9代前統	五輪塔	凝灰岩	嘉吉3（1443）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良10代亮頼	五輪塔	凝灰岩	文安5（1448）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良11代長統	五輪塔	凝灰岩	応仁2（1468）	無	後家合せ
人吉市	願成寺（真言）	下相良12代為統	五輪塔	凝灰岩	明応9（1500）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良13代長毎	五輪塔	凝灰岩	永正15（1518）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良14代長祇	五輪塔	凝灰岩	大永5（1525）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良15代長定	五輪塔	凝灰岩	享祿4（1531）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良16代義滋	五輪塔	凝灰岩	天文15（1548）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良17代晴広	五輪塔	凝灰岩	弘治元（1555）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良18代義陽	五輪塔	凝灰岩	天正9（1581）	無	
人吉市	願成寺（真言）	下相良19代忠房	五輪塔	凝灰岩	天正13（1585）	無	
※願成寺の下相良2～19代五輪塔は長方形の同一基壇上に並立。明らかに領内より移転したものあり（地輪の記銘方位まちまち）。元禄頃、3代藩主頼高の整備と考えられる。							
人吉市	願成寺（真言）	下相良14代長祇	方柱形	安山岩	大永5（1525）	有、明治25年	
人吉市	願成寺（真言）	石田三成	五輪塔	凝灰岩	慶長5（1600）	有、16c	後家合せ、見立て
多良木町	青蓮寺（真言）	上相良初代頼景	五輪塔	凝灰岩	13c前	有、13c末頃	戒名追刻（箱彫り・江戸後期）
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良2代頼氏	五輪塔	凝灰岩	1290年代	有、応仁2年	追刻（俗名・「正□三…」）※□は応カ
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良3代頼宗	五輪塔	凝灰岩	正安3（1301）	無	後家合せ、追刻（俗名・「建武三甲戌（干支誤り）」）
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良4代経頼	五輪塔	凝灰岩	延文3（1358）	有、13c後	後家合せ、追刻（俗名・「延文三戌…」）
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良5代頼仲	五輪塔	凝灰岩	応永7（1400）	有、14c前	後家合せ、追刻（俗名・「應永七辰…」）
多良木町	蓮華寺跡（真言）	上相良6代頼忠	五輪塔	凝灰岩	正長元（1428）	有、14c前	追刻（俗名・「正長元申…」）
※蓮華寺跡の上相良氏五輪塔は、恐らくは頼氏の造墓を契機として築造された大形の石積基壇上に並立する（現在の基壇は移築復元）。							
天草市	本戸城跡	木山正親（弾正）	円首板形	砂岩	天正17（1589）	有、18・19c	塀 戦死地、記銘俗名
熊本県菊池市							
菊池市	伝居城跡「菊之城」	菊池初代則隆	有角五輪塔	安山岩	永保元（1081）	有、文化15年	柵・灯（文政8年銘） 石柵は大規模な基壇を圍繞
菊池市	若宮神社	伝 菊池2代経隆	社殿（廟）		12cカ	社殿は近代造	社殿脇に碑（文化8年、渋江公生誌）
菊池市	歓喜院跡（天台）	菊池13代武重	亀趺墓	安山岩	興国2（1341）	有、文化13年	柵、碑2基 背面干支誤記「興国三年辛巳」、顕彰碑は地元民造立（明治37年銘ほか）
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池15代武光	亀趺碑	砂岩ほか	文中2年（1373）	天明2年	柵・灯 碑身は砂岩・亀趺は安山岩、背面碑文
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池16代武政	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	文中3（1374）	有、塔身15・16c	塀 後家合せ、天明間に俗名追刻
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池武澄	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	正平12（1357）	有、塔身15・16c	塀 後家合せ、塔身に戒名追刻
菊池市	正観寺（臨濟）	菊池武国	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	14c後カ	有、塔身16c	塀 後家合せ、天明間に俗名追刻
菊池市	東福寺（天台）	菊池覚勝	五輪塔	凝灰岩	元弘3（1333）	有、16c	塀 後家合せ、地輪追刻「□弘三年癸酉（1333）…三十六（歳）打死」
菊池市	東福寺（天台）	菊池武村	五輪塔	凝灰岩	建武3（1336）	有、14・15c	塀 後家合せ、地輪追刻「建武三年…足利殿合戦大渡橋上討」
菊池市	稗方城跡	菊池17代武朝	方柱形（笠消失）	凝灰岩	応永14（1407）	有、大正7年	右側面に造立者銘「菊池郡大字稗方…」、左側面に4行の事績碑文
菊池市	真徳寺跡（臨濟）	菊池17代武朝	亀趺碑	安山岩	応永14（1407）	有、昭和37年	菊池文化顕彰会撰文
菊池市	正善寺	菊池18代兼朝	球心宝篋印塔	凝灰岩	文安元年（1444）	無	塀・灯・水 後家合せカ、灯籠・水盤は明治28年銘
菊池市	光善寺	菊池19代持朝	球心宝篋印塔	凝灰岩	文安3年（1446）	無	塀・供台 供台は「皇紀二千五百九十五年」銘
菊池市	碧巖寺（曹洞）	菊池20代為邦	有角五輪塔	安山岩	長亨2年（1488）	有、18c中後	柵
菊池市	玉祥寺（曹洞）	菊池20代為邦	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	長亨2年（1488）	無	階段・塀・灯 ともに相輪欠、同一基壇内、石塀は
菊池市	玉祥寺（曹洞）	菊池21代重朝	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	明応2年（1493）	無	階段・塀・灯 天明7年銘、灯籠記銘「宗氏・岡山氏」
菊池市	実相院跡（臨濟）	菊池22代能運	五輪塔	凝灰岩	永正元（1504）	無	塀・灯・碑（安政4） 後家合せ
菊池市	安国寺（天台）	菊池23代政隆	亀趺墓	安山岩	永正6年（1509）	有、19c	柵・灯（嘉永4年） 自刃地
菊池市	安国寺（天台）	菊池23代政隆	笠塔婆形	安山岩	永正6年（1509）	有、18c前	柵・灯（嘉永4年銘） 亀趺墓脇にあり、記銘戒名のみ
菊池市	西福寺（臨濟）	赤星有隆	球心宝篋印塔	凝灰岩	嘉暦2（1327）	有、15cカ	塀 後に浄土宗、同一の石塀（文政7年銘）区画内にあり
菊池市	西福寺（臨濟）	城 武岑	球心宝篋印塔	凝灰岩	正和3（1314）	有、15cカ	塀
菊池市		城 武東	菊鹿型宝篋印塔	凝灰岩	16c後	無、弘治4年	逆修塔

※菊池7代隆定墓（1185年没、菊池市、相輪・宝篋印塔など部材の寄集め）と菊池武敏墓（1341年没、大分県宇佐市、明治24年造の亀趺墓）は民地にあるため未発見。

第2表 九州の亀趺碑類一覧

凡例 ①場所 ②概要／対象者の没年 ③造立者 ④造立年 ⑤題字（篆額銘・碑文頭銘など） ⑥碑文の有無 ⑦碑文の撰書者等 ⑧亀趺等の形態 ⑨碑身・塔身等の形態 ⑩石材 ⑪備考

※碑身・塔身の左右は向かって見たもの。原則、亀趺のみで碑身・塔身が無いものは扱っていない。

佐賀県

唐津藩大久保初代忠職碑 ①場所：唐津市，大久保緑地（小丘陵上），丘陵中腹には忠職藩主期の日蓮宗の大形墓石群あり（明暦～寛文期銘） ②概要：唐津藩大久保初代忠職の事績碑／寛文10年（1670）没 ③造立者：2代忠朝「孝子唐津城主從五位下出羽守大久保忠朝立」 ④造立年：碑文は寛文12年（1672）「寛文十二年壬子四年十九日」 ⑤篆額：「從四品唐津城主大久保倅君碑銘」 ⑥碑文：2面（正・背），背面は林家が忠朝の建碑を賞賛する碑文（追刻） ⑦撰文：正面は忠朝カ，背面は林鳳岡「弘文院學士整字林憲誌」 ⑧亀趺：立方形の基礎正面に鼉尾（正面向き）・他3面に波濤を線刻 獸首…首は直にもたげる，耳有り，口開け，牙有り／蓑尾…意匠的に広がる／甲羅…如意頭形，亀甲文（3本一単位沈線，区画内に簡略化した十字花文） ⑨碑身：方柱形，頭部弧状の笠，正面は碑面（額内）周囲に瑞雲線刻，笠（正面妻）に双龍線刻（赤彩） ⑩石材：花崗岩 ⑪備考：本墓は京都府本禪寺（法華宗）の五輪塔／忠朝は後に老中首座，「土芥寇讎記」（各藩の藩主・政治状況を儒教道徳に基づき辛辣に評価した書）で良將と評される

「大宝聖林碑」 ①場所：多久市現西溪公園（孔子廟近く，当初は武富氏邸） ②概要：城下武富咸亮私邸にあった聖堂「大宝聖林」を記念 ③造立者：武富咸亮 ④造立年：碑文は正徳3年（1713）「大日本正徳三歳在癸巳秋八月朔旦」 ⑤篆額：正面「大宝聖林碑」，背面「萬古長春石」 ⑥碑文：3面（正・背・左は部分的） ⑦撰文：武富咸亮「後學一郎衛門武富咸亮稽首百拜」 ⑧亀趺：9個のパーツを組み合わせる 獸首…首は直にもたげる，耳有り，口開け，牙有り／蓑尾／甲羅…自然石の縁部を一部打ち欠いて整形，無文／その他…右前足甲に四角の小さいホゾ穴（木製標柱を立てたか） ⑨碑身：自然石板状，碑文は額内 ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：側面に佐賀3代藩主綱茂が「有寄附」とある／武富咸亮は佐賀藩一代侍格儒臣

石長寺の中興記念碑 ①場所：佐賀市石長寺（曹洞宗） ②概要：石長寺の中興記念，豪商柿久氏良悦居士「本姓豊富養於柿久氏」が私財を投じ再興（堂宇・山門等を新築，本尊を補修） ③造立者：石長寺大龍「大龍和尚以求予之幣文故作此中興記云」 ④造立年：碑文は享保14年（1729）「享保十四龍集己酉孟夏穀旦」 ⑤題字：正面「石長寺」，背面「中興記」（ともに楷書） ⑥碑文：2面（正・背） ⑦撰書：「甘露菴主傳法沙門天淳性敬撰并書」 ⑧亀趺：首…欠失（破面の形状から首を高くもたげてはいない）／蓑尾／甲羅…亀甲文（単沈線），甲羅後方に骨状帯（単沈線）／基台…平面八角形 ⑨碑身：自然石板状（略光背形，側面を粗く整形） ⑩石材：安山岩

佐賀鹿島支藩2代直條碑 ①場所：鹿島市，普明寺（黄檗宗）鹿島支藩主家墓所（直條の兄断橋開山），直條夫婦墓（儒教形式墓石）の前 ②概要：2代藩主（父直朝を初代とする）直條の事績碑／宝永2年没（1705） ③造立者：再造は孫4代直郷，当初は子3代直堅「孝子從五位下和泉守藤原朝臣直堅立」（碑身背面） ④造立年：宝暦4年（1754）再造，碑文は正徳元年（1711）「正徳元年辛卯五月日」 ⑤篆額：「故朝散大夫備前刺史藤公墓碑銘」 ⑥碑文：1面（正） ⑦撰文：林鳳岡「前侍讀學士朝散大夫國子監祭酒藤原朝臣信篤誌」 ⑧亀趺：立方形の基礎正面に波濤と鼉尾（左下向き）を浮彫り 獸首…首は右下方に伸ばす，耳有り，口閉じ，牙無し／蓑尾…長い／甲羅…亀甲（3本一単位沈線）・骨状帯（2本一単位沈線） ⑨碑身：方柱形，頭部弧状の笠，笠妻に懸魚，笠下位に・双龍・瑞雲浮彫り ⑩石材：安山岩 ⑪備考：直條は黄檗に帰依・儒者と親交（江戸在勤時に林家の詩会に参加し人見竹洞とも昵懇），直郷は前橋藩儒河口静海に師事／当初の碑は火災により焼失（木製か），篆額の地はビシャン仕上げ（18世紀中頃以降の技法）

佐賀小城支藩6代室塔 ①場所：小城市，玉毫寺（黄檗宗）小城支藩主家墓所 ②概要：6代直真正室松の墓石，石柵・石門あり／文化2年（1805）没 ③造立者：不明（没年時の藩主は孫の9代直堯） ④造立年：一周忌の灯籠（文化3年銘）奉獻以前，塔身背面「文化二年乙丑五月廿二日」 ⑤主銘：正面「靜明院殿清質悠然大姉塔」 ⑥碑文：無し ⑧亀趺：獸首…首は斜め上方にもたげる，耳有り，口少し開く，唇有り（口角付近に沈線），牙有り，眉上隆起が前方に張り出す／蓑尾…やや跳ね上がる／甲羅…亀甲文（2本一単位沈線） ⑨塔身：方柱形，頭部平坦隅切 ⑩石材：安山岩 ⑪備考：9代直堯は藩校興讓館を改革，京都萬福寺7世悅山揮毫の扁額を玉毫寺に奉納するなど人材育成・文化振興に尽力。

焼山の墾田碑 ①場所：武雄市，武雄から塩田へ抜ける山道沿い ②概要：享和年間に相賀照宗が行なった永野村南荒原（武雄市）の開田・造池事業を記念 ③造立者：不明（藩が関与，背面石工名「塩田馬場下村／石工／筒井幸右エ門」） ④造立年：碑文は天保10年（1839）「天保己亥複月」 ⑤篆額：「墾田碑」，男谷孝揮毫（忠孝，幕府の表祐筆・能筆家・儒者） ⑥碑文：1面（正） ⑦撰書：撰は草葉韓（佩川，多久鍋島家儒臣官・漢詩家，後に藩校弘道館教授），書は川上由（書家，古賀穀堂碑の書など） ⑧亀趺：碑身の左側面（墾田地の武雄平野部）を向く，写実的 獸首…首は斜め上方にもたげる，耳有り，口閉じ，牙有り／蓑尾…やや跳ね上がる，下面にも蓑毛表現（線刻）あり／甲羅…亀甲文（横断面弧状の突帯） ⑨碑身：板状，頭部は正面側に頭部弧状の庇を設ける，正面上位に水面と単龍の浮彫り ⑩石材：安山岩 ⑪備考：幕臣男谷忠孝の篆額から藩の仲介と深い関与が想定される／亀趺の造形は白石町厳島神社放生碑（追加資料）に近似

長崎県

大円寺毘盧藏閣碑 ①場所：五島市，大円寺（曹洞宗）福江藩主家北墓所（元は毘盧藏閣があった） ②概要：毘盧藏閣を記念し藩主（5代盛暢・6代盛佳）の仏功を称えた碑 ③造立者：不明 ④造立年：碑文は元禄8年（1695）「元禄乙亥八年夏四月中浣吉旦」 ⑤碑文頭：「廣嶽山毘盧藏閣銘」 ⑥碑文：4面 ⑦撰文：高泉性敦「支那國 傳臨濟三十四世現住黃檗山萬福禪寺／賜紫 沙門敦高泉撰」 ⑧亀趺：碑身の側面側を向く 獸首…顔は獅子頭様，首は斜め上方にもたげる，耳有り，口開け，牙有り／蓑尾／甲羅…板状（小さめ，ほぼ平坦），無文／基台…平面八角形 ⑨碑身：方柱形，笠（宝形）・露盤・宝珠あり，碑身下に請花あり ⑩石材：安山岩 ⑪備考：高泉性敦は福建省出身の黄檗僧（萬福寺5世，紫衣，京都仏国寺に性敦の亀趺碑あり）／大円寺墓所6代盛佳墓前の灯籠に亀趺が見られるが，後家合せて本来灯籠に用いられたかは不明。獸首・箕尾。安山岩製。形状は毘盧藏閣碑の亀趺と近似し，その小形品といえる。

邑主諫早鍋島家経塔（右）「読誦大乘妙典壹万部之塔」 ①場所：諫早市，高城跡主郭（亀城とも，中世西郷氏の山城），現高城神社，経塔（左）と並立 ②概要：大乘妙典（法華経）一万部の読誦成就記念，読誦は正徳3～5年の2年に及ぶ ③造立者：7代鍋島茂晴 ④造立年：碑文は正徳5年（1715）「正徳五年十一月十二日」 ⑤主銘：正面「読誦大乘妙典壹万部之塔」（赤彩） ⑥碑文：1面（左） ⑦撰文：7代茂晴「諫早豊前藤原茂晴誌焉」 ⑧亀趺：獸首…首は直にもたげる，耳有り，口閉じ，牙有り／蓑尾／甲羅…側縁に袂りを入れ花卉形，亀甲文（突帯） ⑨塔身：方柱形（縦側縁は丸く仕上げる），宝形笠あり（本来は異形相輪が乗る） ⑩石材：安山岩 ⑪備考：近くに菩提寺（曹洞宗天祐寺）／高城跡の下には大亀がいるとの伝説

邑主諫早鍋島家経塔（左）「読誦法華経一萬部塔」 ①場所：邑主諫早鍋島家経塔（右）と並立 ②概要：法華経一万部の読誦成就記念と諫早家の事績碑 ③造立者：8代鍋島茂行 ④造立年：寛保元年（1741）（案内板記載） ⑤主銘：正面「讀誦法華経一萬部塔」（赤彩） ⑥碑文：3面（左→背→右） ⑦撰文：8代茂行「邑主諫早石見藤原茂行謹誌」 ⑧亀趺～⑪備考：経塔（右）「読誦大乘妙典壹万部之塔」に同じ

大音寺伝誉上人碑 ①場所：長崎市，大音寺（浄土宗）僧侶墓域 ②概要：開山僧伝誉関徹の事績碑／慶安4年（1651）没 ③造立者：不明 ④造立年：安永5年（1776）「大清乾隆四十一年十月」 ⑤題字：篆額「開山報徳之碑」，碑文頭「崎陽大音寺開山傳誉上人之碑」 ⑥碑文：1面（正） ⑦撰文：荻生徂徠，享保5年（1720）撰「享保庚子歳冬十月 東都物茂卿撰」 ⑧亀趺：首と胴は別石 獸首…首は直にもたげる，耳有り，口閉じ，唇有り（沈線），牙有り／蓑尾…下面にも蓑毛表現（線刻）／甲羅…側縁に袂りを入れ花卉形，亀甲文（3本一単位沈線） ⑨碑身：板状，平頭平坦隅丸，左右に縦方向の龍（左右で双龍）・瑞雲を浮彫り ⑩石材：ピンク花崗岩（瀬戸内系花崗岩の可能性大） ⑪備考：大音寺は歴代長崎奉行が帰依／撰者荻生徂徠は儒者，林家に師事し柳沢吉保に仕える，徂徠派開祖

〔亀趺を持つ水盤〕市杵島神社水盤 場所：諫早市市杵島神社拝殿前 願主：武富戸味三（肥前砥川石工，制作も本人か） 造立年：銘は文政7年（1824）「文政七年申八月吉良日」 形態：肥前地方に通有する竿・基礎を持つ形態，盤は荷葉形・竿は円柱形 亀趺：獸首…首は直にもたげる，耳有り，口少し開け，牙無し，顎髭有り（中国からの情報を反映）／蓑尾…甲羅側面にも蓑毛あり／甲羅…亀甲文（横断面弧状の突帯） 石材：安山岩 備考：盤の内縁に蛙を作出するなど石工の創意が見られる，水盤近くに文政7年銘灯籠あり（2基一対），武富戸味三作の水盤は佐賀県太良町留岡八幡宮にもあり（天保3年銘）

大分県

井上並古碑 ①場所：豊後大野市，井上並古隠居後の野宅近くの丘陵地，並立する並古・並増親子の儒式墓の間 ②概要：井上並古の事績碑／寛政10年（1798）没 ③造立者：子並増「孝子源並増建之／石工／渡邊方發」（右側面） ④造立年：文政8年（1825）「文政八年乙酉夏五月…建之」（右側面） ⑤篆額：「井上並古有淵君碑」 ⑥碑文：2面（正・背），背面は草書 ⑦撰文：唐橋君山「唐世濟謹識」 ⑧亀趺：獸首…首は短く直にもたげる，耳有り，口閉じ・下唇有り（沈線），牙無し／蓑尾…短く跳ね上がる，下面にも蓑毛表現（線刻）／甲羅…無文（手斧痕を意識的に残す） ⑨碑身：板状，頭部平坦隅丸，正面単龍・背面瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：井上並古は一代家老，8代藩主中川久貞の儒式墓（小富士山墓所）を造営／唐橋君山は藩儒（藩校博済館で医学・漢学・詩文を教授），『豊後国志』編纂

文殊仙寺一字一石法華経塔 ①場所：国東市，文殊仙寺（天台宗） ②概要：一字一石法華経塔（地上標徴） ③造立者：末廣光善・同光長「功德主／末廣甚助一尉光善／末廣忠二郎光長」（背面），武士・名主階層 ④造立年：年記銘無し，背面の名前・正面主銘の箱彫りから19世紀前～中頃？ ⑤主銘：「ソ（種子）一字一石濃華経塔」（ソは弁財天・妙見菩薩），右側面「取峩眉山文殊偃寺」 ⑥碑文：無し ⑧亀趺：獸首…首は直にもたげる，耳有り，口閉じ，牙有り／箕尾／甲羅…亀甲文（3本一単位沈線，区画内ビシャン仕上げ） ⑨碑身：方柱形，頭部橢形 ⑩石材：安山岩 ⑪備考：弁財天神使は亀，妙見菩薩神使は玄武でこれを台座とする作例多い／同寺には亀趺を乗騎とする小形の水天像あり，獸首・箕尾，安山岩製。

鹿児島県

宮之城島津4代久通碑 ①場所：さつま町，宗功寺跡（臨濟宗）宮之城島津家墓所，4代久通墓（石祠形）の前 ②概要：宮之城島津4代久通と宮之城家の事績碑／延宝2年（1674）没 ③造立者：子5代久竹（久胤）「島津久胤立之」 ④造立年：

碑文は延宝6年(1678)「延寶戊午之春」⑤**碑文頭**：「島津久通祖先世功碑并銘」⑥**碑文**：3面(右→正→左)⑦**撰文**：林 鷲峰「弘文院學士林叟撰」⑧**龜趺**：写實的・丁寧 龜首…首は斜め上方にもたげる, 耳有り, 口閉じ, 牙有り／蓑尾／甲羅…龜甲文(2条一単位突帯), 甲羅後方に骨状帯(楕円形を連続させた帯状突帯)／その他…足は水かきの表現あり, 基台は龜趺と一石で四隅を切り込み平面雲形⑨**碑身**：方柱形, 頭部櫛形, 正面上位に双龍浮彫り⑩**石材**：安山岩⑪**備考**：久通は本藩家老, 藩主光久の命で家譜「島津世祿記」編纂

江夏友賢墓石 ①**場所**：始良市, 実窓寺跡付近(島津義弘室菩提寺) ②**概要**：江夏友賢墓石／慶長15年(1610)没「慶長十五庚戌第七月廿三日」(碑身右面) ③**造立者**：不明 ④**造立年**：元禄頃(桐原正左衛門墓石など周辺資料との類似から) ⑤**主銘**：「□翁環溪先生 江夏氏墓」(□は「黄」, 上6文字は敲かれる) ⑥**碑文**：無し ⑧**龜趺**：獸首…首は斜め上方に短くもたげる, 耳有り, 口角僅かに開く, 牙有り／尾無し(甲羅の後端が尖る)／甲羅…無文 ⑨**碑身**：板状, 頭部櫛形, 主銘(額内)周囲に瑞雲浮彫り(雑)／碑首…碑身上部を正面側に張り出す, 方孔あり, 瑞雲・双龍を浮彫り ⑩**石材**：凝灰岩 ⑪**備考**：友賢は福建省江夏郡の人, 易に精通, 島津義弘・家久に重用される(朝鮮出兵従軍, 鹿兒島城築城時の占いや縄張り), 薩南学派(朱子学)の高僧と親交, 「環溪」号は聖護院門跡より贈与／形態は桐原正左衛門墓と類似

桐原正左衛門墓石 ①**場所**：始良市楠原(蟄居地) ②**概要**：桐原正左衛門墓石(2代藩主島津光久側近, 軍学・兵道・剣術に優れ門弟多し)／没年不明 ③**造立者**：門弟「…為師孝立」(左側面), 子「…孝子□白」(背面) ④**造立年**：元禄2年(1689)「元禄二己巳年二月七日為師孝立」(左側面) ⑤**主銘**：「且ヵ空ヵ了心居士桐原正左…」(文字は敲かれる) ⑥**碑文**：無し ⑧**龜趺**：首…欠矢(破面形状から首を高くもたげていない)／蓑尾／甲羅…無文 ⑨**碑身**：板状, 頭部櫛形, 主銘(額内)周囲に瑞雲浮彫り(雑)／碑首…碑身とは突帯で画す, 方孔あり, 双龍浮彫りか ⑩**石材**：凝灰岩

伊集院源次郎忠眞墓 ①**場所**：始良市, 実窓寺跡付近(島津義弘室菩提寺) ②**概要**：伊集院源次郎忠眞墓(庄内の乱首謀, 島津家に降るが後に誅戮される)／慶長7年(1602)没 ③**造立者**：木田杉森門名頭の新右衛門「…造立／新右衛門敬白」(右側面) ④**造立年**：元禄8年(1695)「元禄八乙亥六月廿九日此石塔造立…」(右側面) ⑤**主銘**：「心香良安庵主伊集院源次郎殿墓」(赤彩, 下6文字は敲かれる) ⑥**碑文**：無し ⑧**龜趺**：獸首…首は斜め上方に短くもたげる, 耳有り, 口閉じ(口角は開く), 牙有り／蓑尾／甲羅…無文 ⑨**碑身**：板状, 頭部櫛形, 主銘(額内)周囲に宝相華唐草文線刻／碑首…碑身上部を正面側に張り出す, 方孔あり, 瑞雲線刻 ⑩**石材**：凝灰岩

法印覚祐墓石 ①**場所**：薩摩川内市, 栄源寺跡墓所(真言宗) ②**概要**：法印覚祐墓石 ③**造立者**：不明 ④**造立年**：記録は宝永3年(1706)「寶永三丙戌十一月八日寂」(塔身側面) ⑤**主銘**：「法印覚祐」(篆書, 赤彩) ⑥**碑文**：無し ⑧**龜趺**：簡易な作り, 基台と一石 龜首…首は斜め上方にもたげる, 耳有り(長い), 口閉じ(沈線), 牙無し／蓑尾…太い／甲羅…無文 ⑨**塔身**：円柱形, 荷葉形笠あり ⑩**石材**：凝灰岩 ⑪**備考**：同墓所内に寛文7年・覚祐銘の板碑あり

法印覚祐墓石供養塔結衆碑 ①**場所**：薩摩川内市, 瑠璃光寺跡墓所(真言宗) ②**概要**：法印覚祐の供養塔造立の結衆記録碑 ③**造立者**：「権律師快珠」等26名 ④**造立年**：宝永3年(1706, 覚祐没年)以降 ⑤**題字等**：無し, 碑正面3段に26名の戒名連記, 碑身右側面に墨書「覚祐□□」 ⑥**碑文**：無し ⑧**龜趺**：簡易な作り, 基台と一石 獸首…首は短く直にもたげる, 耳有り(長い), 口閉じ(沈線), 牙無し／蓑尾…太い, 先端尖らない, 無文(蓑毛表現無し)／甲羅…無文 ⑨**碑身**：板状, 笠・露盤・宝珠は後家合せ／ ⑩**石材**：凝灰岩 ⑪**備考**：同墓所内に大形の覚祐供養塔あり, 塔身方柱形で塔身正面に種子カンマン(不動明王)・「法印／覺裕／靈位」(年記録無し)。

森山亨庵碑 ①**場所**：始良市, 本誓寺跡(島津義弘創建) ②**概要**：森山亨庵事績碑(名医, 薬種業を営み資産家)／享保7年(1722)没 ③**造立者**：不明, 碑文に孫の漢詩あり ④**造立年**：碑文は享保7年(1722)「維時享保七年玄黙□□格小春廿五莫」 ⑤**主銘**：正面額内「…賢法橋」(赤彩, 碑文に戒名「元哲親賢法橋」), 額外左右「享保…／七月二十五…」(赤彩), 「…」は敲かれ不明 ⑥**碑文**：3面(左→右) ⑦**撰文**：「洞雲院廓龍作銘書」 ⑧**龜趺**：首…欠矢(首は斜め上方にもたげる, 破面形状から細い)／蓑尾／甲羅…龜甲文(単沈線, 後方は各龜甲の形・大きさを変える) ⑨**碑身**：方柱形, 頭部櫛形, 上位に円孔あり ⑩**石材**：凝灰岩 ⑪**備考**：碑文中の嫡孫漢詩に亨庵を「儒道盡精誠…歌堪聽上卿」と評する

鹿兒島藩5代島津繼豊実母「愛染経百万遍唱誦成就」碑 ①**場所**：鹿兒島市, 福昌寺跡(曹洞宗)鹿兒島藩主家墓所, 5代藩主繼豊母須磨墓(宝篋印塔)の前 ②**概要**：須磨の愛染経百万遍唱誦成就を記念, 子孫繁栄・国家安全を祈願 ③**造立者**：須磨か ④**造立年**：碑文は享保10年(1725)「享保萬年第十二己巳八月吉祥日」 ⑤**主銘**：「奉唱満愛染明王咒一百万遍成就所」 ⑥**碑文**：1面(背, 赤彩) ⑦**撰文**：福昌寺僧侶「沙門師一謹志」 ⑧**龜趺**：獸首…首は直にもたげる, 耳有り, 顔の先端が欠失し口の開閉・牙の有無不明, 口角は唇有り(沈線)／蛇尾／甲羅…龜甲文(2本一単位突帯文)／基台…龜趺と一石で四隅を切り込み平面雲形 ⑨**碑身**：方柱形(側縁は丸く仕上げる), 頭部平頭雲形, 正面上位に月輪・「ウン」(愛染明王, 赤彩)・月輪下に蓮華座浮彫り ⑩**石材**：凝灰岩

鹿兒島藩8代島津重豪実母都美碑 ①**場所**：始良市, 長年寺跡(曹洞宗, 本藩菩提寺福昌寺の末寺), 都美墓(五輪塔)の

隣、石柵あり ②概要：島津都美（7代藩主重年室・8代藩主重豪実母）の33回忌供養碑「嗚呼惟我先太夫人既葬之三十有三年其子懋昭（重豪）表於其阡…」／延享2年（1745）没 ③造立者：8代藩主重豪 ④造立年：碑文は安永6年（1777） ⑤篆額：「太夫人嶋津氏墓舊カ」（赤彩） ⑥碑文：2面（正・背、正は赤彩） ⑦撰書：正面撰は懋昭（重豪）「薩隅日三州守兼領琉球國源懋昭記」、書は近臣山田明遠「近侍掌務臣山田明遠薰沐拜書」、背面撰書は山本正誼「知學事臣山本正誼書其陰謹按」 ⑧亀趺：写實的 獸首…首は斜め上方に短くもたげる、眼球は彩色（白目は赤・黒目は黒）、耳有り、口開け、唇有り（隆起）、牙有り／蛇尾／甲羅…側縁に抉りを入れ花卉形、亀甲文（3本一単位沈線）、後方に縦の稜線（骨状帯） ⑨碑身：方柱形（側縁は丸く仕上げる）、頭部平坦隅丸、正面碑面（額内）周囲に瑞雲浮彫り／碑首…碑身部とは突帯で画す、方孔あり、双龍・瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：山本正誼は藩儒、造土館初代館長／碑前の水盤銘も山本正誼（安永6年）

鳳山軒（明鈞）碑 ①場所：始良市、椿窓寺跡（現加治木郷土館に移設） ②概要：椿窓寺中興僧明鈞の事績・顕彰碑（朝鮮出兵時祐筆、椿窓寺中興、隠居後の寛永4年頃に鳳山軒創建） ③造立者：椿窓寺19世元徹 ④造立年：記銘は天明5年（1785）「天明五乙巳正月八日」（背面） ⑤題字等：無し ⑥碑文：1面（正） ⑦撰文：「開山十九代前椿窓大巖元徹誌焉」（背面） ⑧亀趺：龜首…顔は龜様、首は斜め上方に短くもたげる、耳無し、口閉じ、牙無し／蛇尾／甲羅…側縁に抉りを入れ花卉形、亀甲文（3本一単位） ⑨碑身：板状、頭部平坦隅丸 ⑩石材：凝灰岩

鹿兒島藩8代島津重豪碑 ①場所：鹿兒島市、福昌寺跡（曹洞宗）鹿兒島藩主家墓所、重豪墓（宝篋印塔）の前、石柵あり ②概要：8代藩主重豪の事績碑／天保4年（1833）没 ③造立者：10代斉興か ④造立年：天保10年（1839）「天保十年歲次己亥秋八月廿日建」 ⑤題字：碑首篆額「故從三位／大信公碑」、碑身文頭「皇祖考故從三位行左近衛中將薩隅日三州國主兼領琉球國源大信公神道碑銘并序」 ⑥碑文：碑身4面、基台は2面（背→右） ⑦撰文：碑身は10代斉興「孫參議正四位下行左近衛中將薩隅日三州國主兼領琉球國齊興謹撰」、基台碑文は五代秀堯「本府知國史館／事臣五代秀堯薰／沐拜手謹撰」 ⑧亀趺：獸首…大人しい顔つき、首は斜め上方に高くもたげる、耳有り、口閉じ、牙無し／蛇尾／甲羅…側縁に抉りを入れ花卉形、亀甲文は隅丸の台形・五角形（縁線のある突帯により区画） ⑨碑身：方柱形（縦側縁は丸く仕上げる）、4面とも碑面（額内）周囲に瑞雲浮彫り／碑首…別石、碑身より幅広、頭部平坦隅丸、正面は篆額周囲に双龍・瑞雲を浮彫り、他3面は瑞雲浮彫り ⑩石材：凝灰岩 ⑪備考：基台「大信公碑陰記」の撰者五代秀堯は藩儒、碑造立に際し中国から亀趺に関する位階制度・形態を学んだとある

〔亀趺を持つ灯籠〕磯菅原神社亀趺灯籠 場所：鹿兒島市、磯菅原神社 寄進者：「愛甲次右衛門」等9名（赤彩） 造立年：記銘は安永9年（1780）「安永九庚子十二月廿二日」（赤彩） 主銘：「奉寄進」（赤彩） 亀趺：獸首…首は斜め上方にもたげる、耳有り（現状欠）、口開け、唇有り（隆起）、牙の有無不明（顔の先端欠失）／蛇尾／甲羅…側縁に抉りを入れ花卉形、亀甲文（2条一単位突帯）、基台…亀趺と一石で四隅を切り込み平面雲形 竿：六角柱、記銘あり 中台：六角形、荷葉形 石材：凝灰岩 備考：火袋より上部は失欠（中台上面に浅い割り込みあり）

金剛寺跡の西南戦争慰靈亀趺灯籠 場所：霧島市、金剛寺跡、西南戦争慰靈碑「丁丑戦区之冢」の碑前 寄進者：「石塚七十郎」以下95名（赤彩、西南戦争戦没者氏名に一致無し） 造立年：記銘は明治14年（1881） 主銘：「干城四番」・「慰靈燈（行書）」 亀趺：獸首…首は斜め上方にもたげる、耳有り、口閉じ、牙無し／箕尾／甲羅…亀甲文（2本一単位突帯）、基台…平面六角形、記銘あり 竿：龍柱形、龍・瑞雲・波濤（下位）を浮彫り、上位に宝珠（一石、円孔あり） 石材：凝灰岩

熊本県

※菊池武敏亀趺墓（1341年没、大分県宇佐市、明治24年銘）は民地内にあって未実見のため扱っていない。

菊池15代武光碑 ①場所：菊池市、正観寺（臨濟宗、武光開基）、墓標と伝わるクスノキの前 ②概要：武光事績碑（懐良親王を奉じ九州における南朝の最盛期を築く、九州都督将軍・百戦百勝の名将と称される、菊池五山を定めるなど文化振興に尽くす）／文中2年（1373）没 ③造立者：宗伝次「菊池宗英盈字傳次謹建」（隈府の豪商、慈善事業・文化振興・菊池氏顕彰に努める、菊池氏家臣の後裔） ④造立年：安永9年（1780） ⑤題字：主銘「菊池正観公之碑銘」、碑文頭「菊池正観公神道碑」 ⑥碑文：1面（背、風化） ⑦撰書：撰は藪孤山「熊府府學祭酒藪愨士厚謹撰」（名愨・字士厚）、書は渋江公豊「澁江公豊子錫謹書」（字子錫・号紫陽） ⑧亀趺：獸首…首は直にもたげる、耳有り、眉上隆起が前方に張り出す、口閉じ、唇有り（沈線）、牙有り／箕尾…別石、大きく高く跳ね上がる、下面は花卉状文（立体的）／甲羅…亀甲文（単沈線） ⑨碑身：方柱形、頭部櫛形 ⑩石材：砂岩（観音岳産） ⑪備考：藪孤山は藩儒・藩校時習館学長／渋江公豊は天地元水神社神職・儒者、菊池文教の祖といわれ私塾「集玄亭」で多くの門弟を教導、菊池氏の顕彰に努める

菊池13代武重墓 ①場所：菊池市、東福寺歓喜院跡（天台宗、菊池五山一位、武重は隠居後に剃髪して歓喜院と号す、本院で死去） ②概要：武重墓、石柵あり（武時嫡男、父の功により後醍醐天皇より肥後守護に任じられる、菊池家憲を定め内政安定を図る）／興国3年（1342）没 ③造立者：一説には藩郡代中村庄右衛門正彝 ④造立年：文化13年（1816）年、年記銘は無し ⑤主銘：「菊池肥後守武重朝臣之墓」 ⑥碑文：無し ⑧亀趺：獸首…首は直にもたげる、耳有り、眉上隆起が前方に張り出す、口閉じ、唇有り（隆起）、牙有り／箕尾…別石、大きく高く跳ね上がる、下面は花卉状の線刻／甲羅…亀甲文（単沈線） ⑨碑身：方柱形、頭部櫛形 ⑩石材：安山岩 ⑪備考：背面「興国三年辛巳八月三日卒去」（興国3年は壬午）

菊池 23 代政隆墓 ①場所：菊池市，安国寺（現天台宗，自刃地） ②概要：政隆墓，石柵あり（本家最後の当主，肥後守護、再起をかけた久米原の戦いに敗れ陣所安銷銷国寺で自刃）／永正 6 年(1509)没「永正六年閏八月十七日卒」(背面) ③造立者：不明 ④造立年：奉獻灯籠銘は嘉永 4 年（1851，それ以前の可能性） ⑤主銘：「菊池公政隆之墓」 ⑥碑文：無し ⑦亀趺：獣首…首は直にもたげる，耳有り，眉上隆起が前方に張り出す，口閉じ，牙有り／箕尾…高く跳ね上がる，下面是花卉状の線刻／甲羅…亀甲は鋸歯状文（簡略化，単沈線） ⑧碑身：方柱形，頭部櫛形 ⑨石材：安山岩 ⑩備考：同石柵内に政隆の笠塔婆墓石あり，主銘「巖銷院殿天仙源祐大居士」，18 世紀前半の型式／同石柵内に転礫集中，最後は矢尽き石を投げて戦ったとの伝承から石を供えたと歯痛が治るとの信仰による

菊池 17 代武朝碑 ①場所：菊池市，真徳寺跡（臨済宗，正観寺末寺，武朝の菩提寺），丘陵斜面の造成地に位置 ②概要：武朝事績碑（南朝退勢期の当主，託麻原の戦いに勝利，南北朝合一後に肥後守護）／応永 14 年（1407）没 ③造立者：小林種次郎「前市會議員小林種次郎氏ノ特志ニ依リ此ノ碑ヲ建テ」 ④造立年：碑文は昭和 37 年（1962）「昭和三十七年十月十八日」 ⑤主銘：「菊池武朝公之碑」 ⑥碑文：1 面（背） ⑦撰文：菊池文化顕彰会 ⑧亀趺：獣首…首は直にもたげる，耳有り，眉上隆起が前方に張り出す，口閉じ，唇有り（沈線），牙有り／箕尾…高く跳ね上がる，下面是花卉状の線刻／甲羅…亀甲文（単沈線） ⑨碑身：方柱形，側縁は小さく面取り，頭部櫛形 ⑩石材：安山岩

追加資料（略記）

矢嶋家墓 4 基（1～4） 場所：福岡県みやま市 概要：旧金仙寺（黄檗宗）より移転／矢嶋家は柳川藩士
 1 陽泰院（行恒）墓 没年：元禄 4 年（1691） 造立年：元禄 5 年 碑文：2 面，「孝次子」行周撰文 亀趺：獣首，蛇尾（小） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩
 2 弧月軒（行周）墓 没年：享保 9 年（1724） 碑文：無し 亀趺：獣首，蛇尾（小） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩
 3 怡徳院殿大居士墓 没年：明和 2 年（1765） 碑文：無し 亀趺：亀首，蓑尾 塔身：花灯方柱形 石材：凝灰岩
 4 覺玄院殿大居士墓 碑文：無し 亀趺：獣首，尾部欠（現況から 2・3 と同様の小さい蛇尾と判断される） 塔身：花灯方柱形 石材：安山岩 備考：年記銘無し，18 世紀前半頃の型式

放生池碑 場所：佐賀県白石町巖島神社 造立年：文化 10 年（1813） 碑文：有，東遠良愚撰 亀趺：獣首，蓑尾 碑身：経巻形 石材：安山岩 備考：亀趺の造形は武雄市焼山の墾田碑に近似（同じ石工あるいは同系譜の石工による制作）

祖霊社碑 場所：佐賀県鹿島市鹿島城跡 碑文：無し 亀趺：獣首，蓑尾 碑身：自然石 石材：亀趺は安山岩，碑身は緑泥片岩 備考：年記銘無し，19 世紀後半造？（「衆楽碑」など周辺石造物の造立年や主銘箱彫りから）

大乘寺跡亀趺 場所：鹿児島県日置市大乘寺跡（曹洞宗，日置薩摩家菩提寺・墓所） 概要：碑身欠，現状は石祠が乗る（後家合せ） 亀趺：亀首，蛇尾 石材：凝灰岩 備考：亀趺上面のホゾ穴から碑身は方柱形であったと考えられる

第 3 表 儒者による撰文事例一覧 ※アミかけは方柱形

年代	名称	場所	形態	造立者	撰者
寛文12年(1672)銘	唐津藩大久保初代忠職碑	唐津市大久保緑地	亀趺碑	子2代忠朝	林 鳳岡(背面追刻):幕府弘文学院士
延宝6年(1678)銘	宮之城島津4代久通碑	さつま町宗功寺跡	亀趺碑	子5代久竹	林 鷲峰:幕府弘文学院士
元禄年間撰 寛政元年(1789)再造	立花家祖高橋紹雲碑	大牟田市法輪寺跡 (三池藩主家墓所)	方柱形 平頭隅丸	3代種明 6代種周再造	元禄期撰は安東省菴:柳川藩儒,「海西の巨儒」 寛政期再撰は芳賀 貞:三池藩儒
正徳元年(1711)銘 宝暦4年(1754)再造	佐賀鹿島支藩2代直條碑	鹿島市普明寺	亀趺碑	子3代直堅 孫4代直郷再造	林 鳳岡:幕府弘文学院士
正徳3年(1713)銘	聖堂「大宝聖林」記念碑	多久市西溪公園	亀趺碑	武富成亮	武富成亮:佐賀藩儒,聖堂「大宝聖林」建設
享保5年(1720)	大音寺開山伝誉上人碑	長崎市大音寺	亀趺碑	不明	荻生徂徠:儒者,徂徠派開祖
明和8年(1771)銘	熊本藩家老初代松井康之碑	八代市春光寺	櫛形方柱形	6代豊之	藪 孤山:熊本藩儒,藩校時習館長
延享2年(1744)没	唐津藩土井3代利延墓石	唐津市来迎寺	尖頭方柱形	弟4代利里	稲葉汪斎:唐津藩儒,藩主家伴読
安永6年(1777)銘	鹿児島藩島津都美碑	始良市長年寺跡	亀趺碑	子8代重豪	山本正誼(背面):鹿児島藩儒,藩校造士館長
安永8年(1779)銘	菊池15代武光碑	菊池市正観寺	亀趺碑	宗 伝次	藪 孤山:熊本藩儒,藩校長 洪江公豊書:儒者,菊池文教の祖
寛政元年(1789)銘	三池藩祖立花直次碑	大牟田市法輪寺跡	方柱形 平頭隅丸	6代種周	芳賀 貞:三池藩儒
寛政6年(1794)銘	立花家祖高橋紹雲碑	太宰府市岩屋城跡	櫛形方柱形	三池藩6代種周	藪 孤山:熊本藩儒,藩校時習館長
文政8年(1825)銘	岡藩家老井上並古碑	豊後大野市井上墓所	亀趺碑	子並増	唐橋君山:岡藩儒,『豊後国志』編纂
天保10年(1839)銘	焼山の墾田碑	武雄市	亀趺碑	不明	草葉佩川:本藩・多久鍋島家儒臣 篆額揮毫は男谷思孝:幕府表祐筆,儒者
天保10年(1839)銘	鹿児島藩8代島津重豪碑	鹿児島市福昌寺跡	亀趺碑	孫10代斉興	五代秀堯:鹿児島藩儒,記録奉行



大牟田市法輪寺跡 高橋紹雲塔 4



柳江市天叟寺 高橋紹雲塔 3



姫路市御着城跡 小寺重隆塔・灯籠(糸島花崗閃緑岩) 2



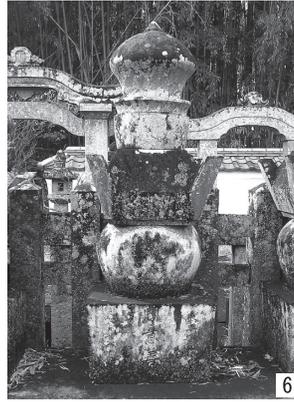
柳江市福巖寺 戸次道雪塔 1



竹田市 中川清秀・秀政塔 8



平戸市普門寺 松浦弘定墓石類 7



佐賀市高伝寺 鍋島清房塔 6



柳江市福巖寺 戸次道雪塔 5



西都市栄岸寺跡 米良重次墓石類・嘉永4年銘 12



八代市 下相良義陽塔 10



宮崎市清武城跡 伊藤祐国塔 9



熊本市 鹿子木寂心墓石類 16



熊本市 内古閑基貞塔 15



高森町 高森惟直塔 14



和水町 由布大炊助墓石類 13



第1図 九州における中世領主・武将の墓石類(1)



19 鹿児島市福昌寺跡 中世島津氏宝篋印塔整備

18 山鹿市 小西行長墓石類

17 津久見市 大友宗麟塔



22 姫路市功山城跡近く 小寺重隆塔・灯籠(糸島花崗閃緑岩)

20 人吉市願成寺 中世下相良氏五輪塔整備



26 山都町 阿蘇惟種塔・石柵銘「村役人世話人／氏子中」

24 鹿児島市大川寺跡 川田義朗塔・灯籠



30 八代市泰勝院跡 織田信長供養塔・地輪追刻銘

28 大分市 長宗我部信親塔・明治22年銘慰靈碑

第2図 九州における中世領主・武将の墓石類(2)



34 菊池市安国寺 菊池政隆塔



33 菊池市稗方城跡 菊池武朝塔



32 菊池市碧巖寺 菊池為邦塔



31 菊池市菊之城跡 菊池則隆塔



38 菊池市玉祥寺 菊池為邦・重朝墓域(37), 為邦塔(38)



37



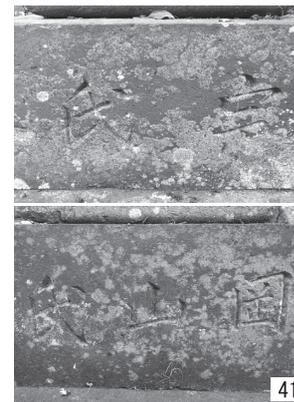
36 山鹿市日輪寺 菊池武時塔



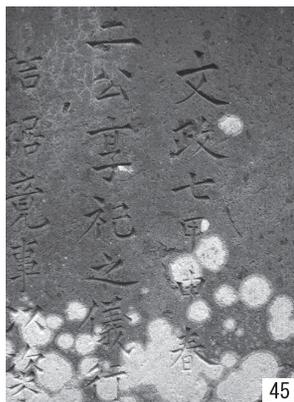
35 福岡市菊池霊社 菊池武時墓石



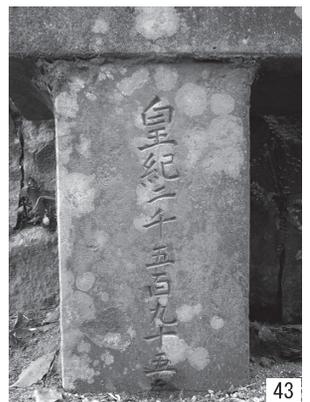
42 菊池市光善寺 菊池持朝塔



39 玉祥寺 菊池為邦・重朝墓石扉年記銘(39), 石工銘(40), 灯籠基礎記銘(41)

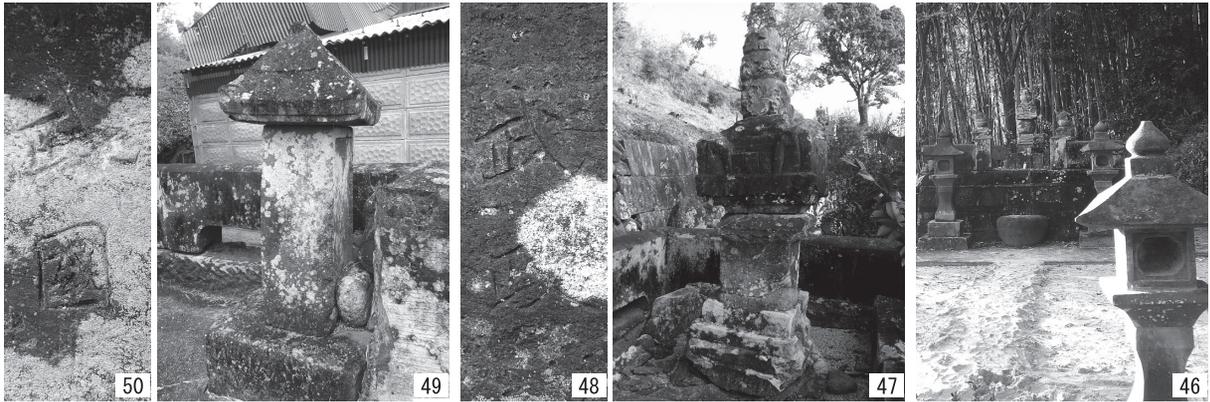


45 菊池市西福寺 赤星有隆塔(手前)・城 武岑塔(奥)(44), 同石扉年記銘(45)



43 光善寺 菊池持朝墓供台記銘

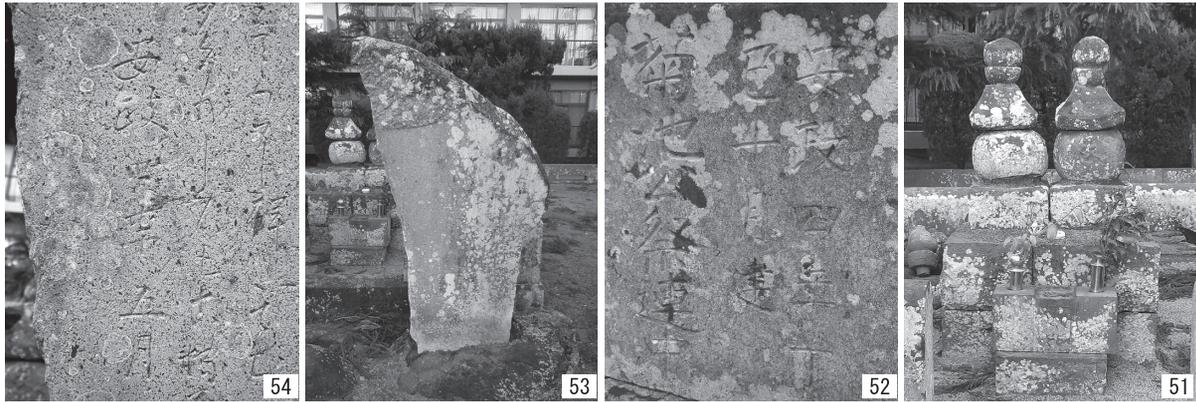
第3図 菊池氏の墓石類(1)



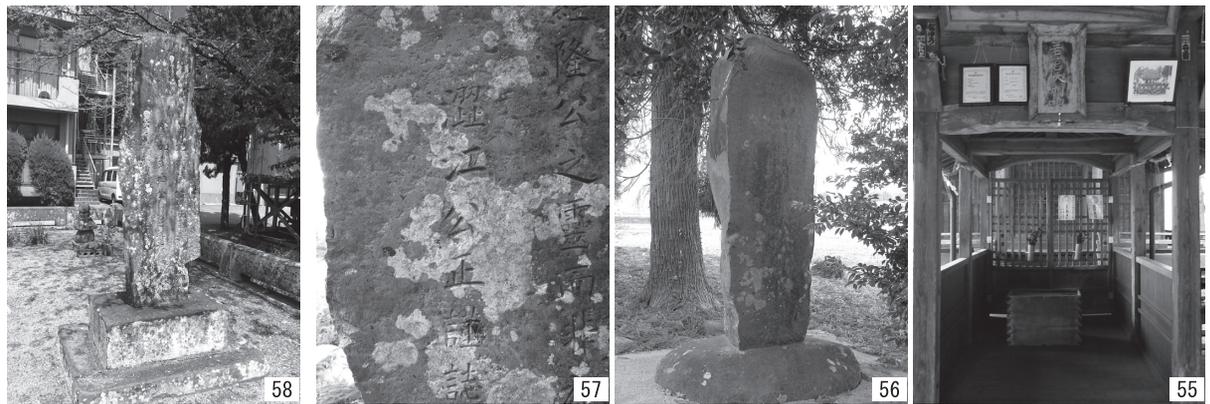
菊池市正観寺 菊池武国塔・塔身追刻銘

菊池市正観寺 菊池武政塔・塔身追刻銘

菊池市正善寺 菊池兼朝墓域



菊池市実相院跡 菊池能運塔(51), 同石堀記銘(52), 同墓前顕彰碑(53)・年記銘(54)



実相院跡 菊池武時等遥拝所碑

菊池市若宮神社 伝菊池経隆廟(55) 顕彰碑・渋江公正銘(56・57)

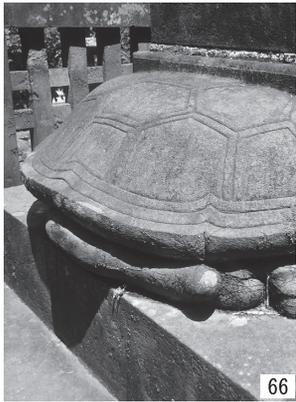


菊池市菊之城跡 菊池則隆墓前灯籠年記銘(61)・標柱(62)

歓喜院跡 菊池武重墓顕彰碑

正観寺 菊池武光碑前灯籠

第4図 菊池氏の墓石類(2)



66



65



64



63

始良市長年寺跡 島津重豪実母都美碑・亀趺尾部(蛇尾)

北九州市 小笠原忠真墓石

福岡市崇福寺 黒田如水墓石



70



69



68



67

唐津市 大久保忠職碑

始良市 鳳山軒碑(亀首)

始良市能仁寺跡「道之墓」

始良市 江夏友賢墓



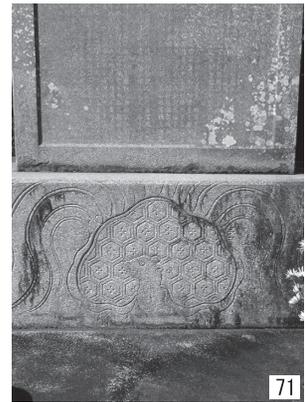
74



73



72



71

鹿島市普明寺 鍋島直條碑(72・73), 同「寿塔」形式墓石(74)

大久保忠職碑・基礎線刻



78



77



76



75

五島市大門寺 毘盧藏閣碑

多久市 大宝聖林碑

長崎市大音寺 伝誉上人碑

小城市玉毫寺 鍋島直眞室墓石

第5図 九州の甕趺碑類(1)



82

さつま町宗功寺跡 島津久通碑



81

諫早市 市杵島神社水盤



80

武雄市 焼山の壘田碑



79

佐賀市石長寺 中興記念碑



86

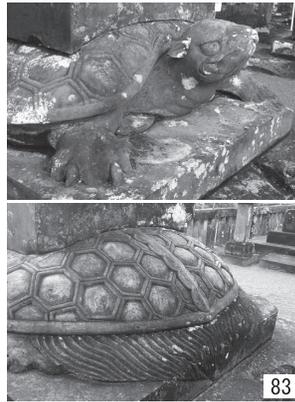
鹿児島市福昌寺跡 島津重豪碑(84), 同碑首・亀趺(85), 同碑陰銘-藩儒五代秀堯(86)



85



84



83

島津久通碑水かき・骨状帯



90

宗功寺跡 島津久通碑銘



89

鹿児島市磯菅原神社 亀趺灯籠



88

福昌寺跡 島津継豊灯籠



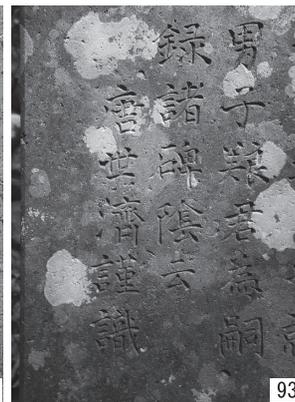
87

霧島市金剛寺跡 亀趺灯籠



94

武雄市 焼山の壘田碑銘

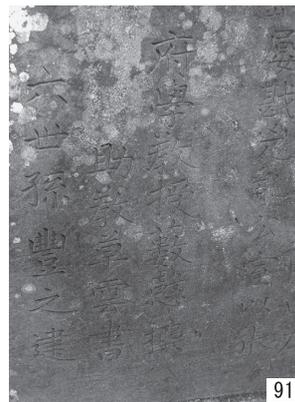


93

豊後大野市 井上並古碑・碑銘



92



91

八代市春光寺 松井康之碑銘

第6図 九州の龜趺碑類(2)



98



97



96



95

菊池氏正観寺 菊池武光碑

神戸市湊川神社 楠木正成碑・亀首



102



101



100



99

菊池市歓喜院跡 菊池武重墓(100・101), 同亀趺・尾部(102)

正観寺 菊池武光碑尾部



106



105



104



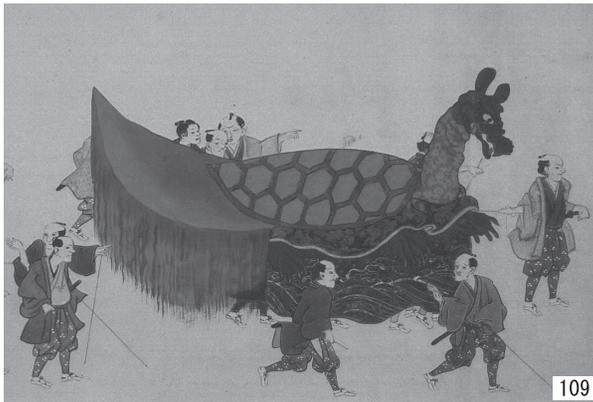
103



菊池市真徳寺跡 菊池武朝碑

菊池市安国寺 菊池政隆墓

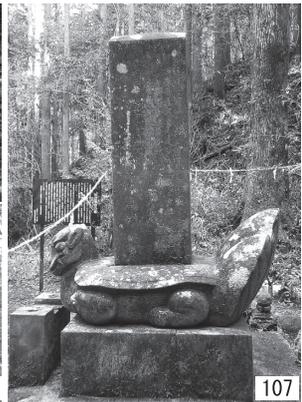
獣首, 武光碑(上)・武重墓(下)



109



108



107

「八代妙見宮祭礼巻絵」(八代市立博物館 2011)

真徳寺跡 菊池武朝碑(107), 同獣首・尾部(108)

第7図 菊池氏の亀趺碑類

石造物からみた菊池一族について―菊池市巨輪足山松林院東福寺を中心として― 高橋 学

はじめに

近年、菊池一族が注目されている。これには昨今の南北朝人氣の高まりもあるがそれだけではなく、菊池市による継続的な取り組みも一つの要因だと考えられる。その菊池市による菊池一族研究のテーマを見てみると、文献史学、民俗学、考古学と幅広いテーマで研究が進められている。その考古学の分野の1つに石造物研究がある。従前、石造物の研究は石造美術に代表される美術史の一分野と捉えられがちであった^(一)。しかしながら、近年、石造物を考古学的な研究テーマとすることが増加している。過去二回の菊池一族の研究課題を見ても、石造物からのアプローチはない。今回、石造物を切り口として、菊池一族について迫るのが論旨である。具体的手法として、菊池一族に係ると推測される主に中世期の石造物を対象とし、他の石造物と比較することで、石造物からみた菊池一族の特徴や背景を考察していきたい。

一．対象について

菊池市内の石造物に関しては『菊池市史』などに記述があるが、残念ながら総体の把握までは至っていないのが現状である。本来、市内の悉皆調査を行い、それぞれ資料化を進めることが本義とは思われるが、今回は

時間的な制約もあり検討資料を限定することですすめたい。

まず、主に対象とする石造物については、熊本県菊池市巨輪に所在する輪足山松林院東福寺^(二)（以下、東福寺と略す）境内の石塔、石碑等とする。これらの資料化を計り、歴史資料として位置づけることを目的とする。

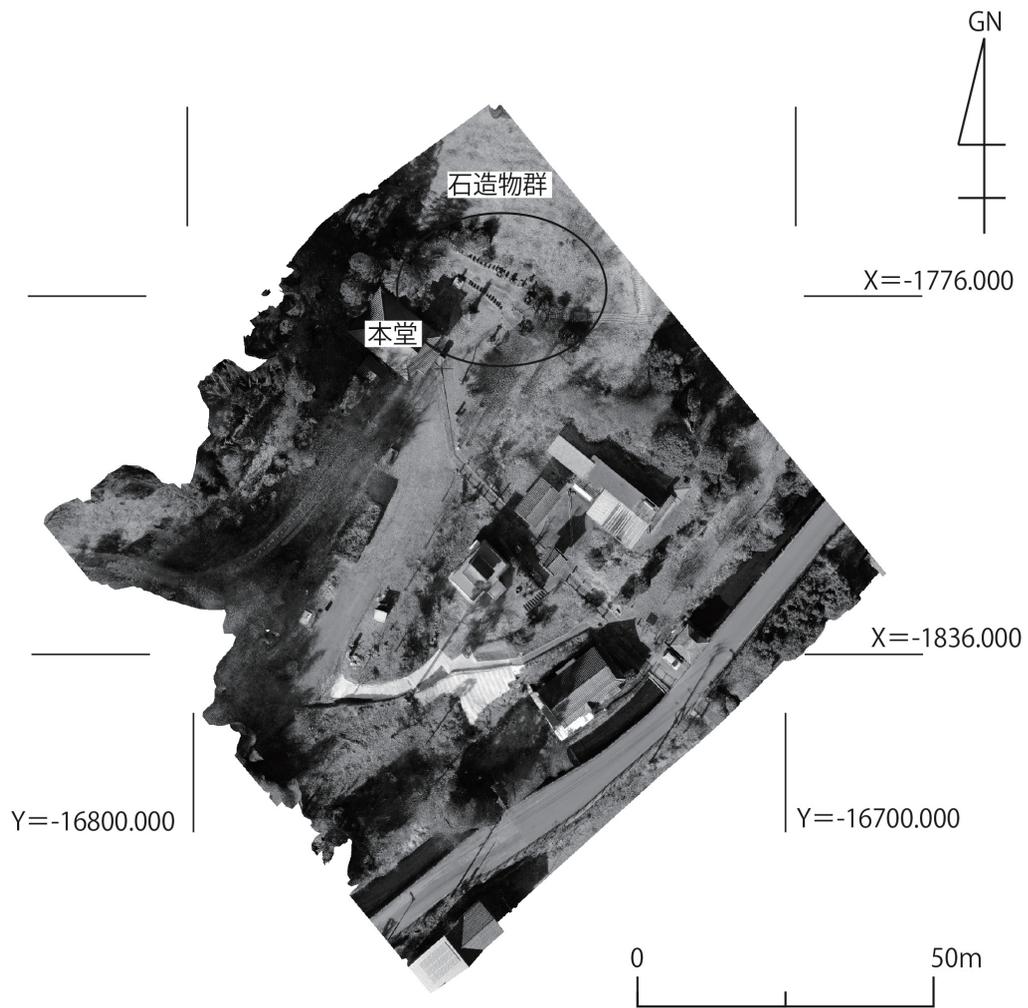
二．東福寺石塔群の調査

●東福寺について

東福寺は、天台宗延暦寺正覚院の末寺で、『肥後国誌』によると天慶元年（九三八）證慶法印の開基とされ、かつては寺領二十五町歩、末寺も十五カ寺以上を数えた。寺の前面に広がる巨集落付近は寺に係する屋敷地が広がっていたと言われ、現在の寺の門前あたりは墓地であったとされる^(三)。菊池武光の代、京都・鎌倉の五山にならって菊池におかれた菊池五山の1つである^(四)。寺の立地は菊池市の中央西部にある阿蘇溶結凝灰岩で形成された城山台地の東斜面に位置する（第1図参照）。現在の寺の門前を加藤清正により作られたと伝わる築地井手により導水された水が流れている。境内は北西から南東へ開けた城山の谷部に展開しており、現在の本堂は、標高86mの平場に建てられている（第2図参照）。熊本県の遺跡地図によれば、東福寺遺跡として本堂裏から平安・中世期の青磁・白磁、骨蔵器の壺などの発見が記録に残るが、詳細は確認できなかった。



第1図 城山台地と東福寺（北東から ドローン撮影）



第2図 東福寺境内オルソー図

また周辺には古墳時代の築地横穴群があり、築地井手に面して露頭する岩壁を掘削して構築されている。

東福寺の本尊は平安時代末期の作とされる千手観音菩薩立像。他に、室町時代作の不動明王立像、同毘沙門天立像や絹本着色不動明王画像もあり、併せて熊本県指定文化財である。

● 石塔群について

境内の石造物の主立ったものについては個別に番号を付与し調査を行った(第3図参照)。寺伝によると先述の築地井手の構築の際に、墓地が整理され、墓石関係は境内内(現在の場所)に移築された。石造物は本堂の北側に上下段の二段の平場に分かれて設置されている。上段の石造物は東から1番〜28号、東端の標柱を29号とした。下段の石造物は五輪塔が並ぶ30号〜43号、それ以外のものを49号とした。上段の石造物の帯磁率と石材についての詳細は、表2を参考にして頂きたい(五)。

第1号(図4、図15)

境内から園路沿いに低い階段を一段上がった平坦面の東に位置する。外柵に囲まれた中心に後家合わせの五輪塔が所在する。高さ1.15m。幅0.46m(幅は石塔を構成する部材の最大幅とする。以下同じ)。地輪が2つ重ねてあり、一番下の地輪には元弘三年(1333)の紀年銘があるとされてきた。この石塔は菊池寛勝(第十二代武時の弟、菊池三郎寛勝)の墓と伝わっている。銘文に関しては『菊池市史』を参考にした。現状が明らかに市史作成調査時よりも石造物の状態が悪化しているため、すでに判読不能な字がある。具体的には、地輪上部に近い所が雨水による侵食・剥離により毀損が進んでおり、一行目の弘の字は下部しか残っていない。



第3図 東福寺石塔 配置図 (南から)

同行三月以下の「十三日」は読むことが厳しい。また、三行目の三十六の「三」は現状では二にしか読めない。下から2つの地輪について、本来は同墓所の他の石塔と同様に石材保護のために下に敷いていたものと考えられるが、現在は上下逆転している。石造物の保全を考えると現在の地輪の上下を逆転して設置すべきと考える。読めない箇所を補填しても、遠「基入道叔正」という銘文があったのかは現状では不明である。さて水輪だが、これは上下逆転して据えられている。後世に手を入れた際に見た目の安定感から往々にしてこのような逆転現状が認められる。水輪四面に金剛界四仏の種子が彫られている。種子は葉研彫りでなく、また彫りが浅く字体に丸みがあるため、中世後期のものと推定できる。種子構成から金剛界四仏を表したものと理解できるが、本来は「アク（不空成就如来）」であるはずが、種子の右側に涅槃点が無いため「ア（胎藏界大日如来）」になっていることに特徴がある。なお水輪の現在の正面は本来、西にあたる阿弥陀となつている。火輪は軒反りが比較的薄く軒も厚くなく、屋根の勾配も緩やか。同塔内では下から2つ目の地輪が凝灰岩の他は、阿蘇溶結凝灰岩の黒が使われているが、この火輪には赤みを帯びたものが使用されている^(六)。空風輪は風輪部に蓮華文を彫り出している。空風輪と水輪は表面を細かく削って平滑に仕上げられており、中世後期のものと考えられる。また地輪に銘文を刻字する行為は鎌倉時代段階では一般的でないため、この地輪の銘文は年号そのものの時期ではなく、後世に刻まれたものと考えられる。地輪のみから年代を考察するのは難しいが、十六世紀代との意見もある^(七)。よってこの五輪塔は時代が下ってから作られたいわゆる顕彰碑に類するものと位置づけられる。また五輪塔の周辺には石で柵囲いがされているが、石材の加工技術から近代以降のものと考えられている（池田氏ご教示）。

第2号（図5、図15）

第1号の背後にある無縫塔。高さ1.38m。基礎石の幅1.04m。明和八年（1771）の銘が入っている。種子は「ア」で胎藏界大日如来と思われる。慈光院大堅者法印光尹霊塔とあり、光尹という名の僧の墓である。

第3号（図15）

第2号の奥で、平坦面の奥にある位牌塔形近世墓。高さ2.41m。幅0.79m。正面に、火灯窓状の彫り込みがあり、そこに種子は「ア」法眼妙光秀望和尚と彫る。右側には、圭頭状の彫り込みがあり、そこに文化四（丁）卯李。文化四年は1807年。左側に同様の彫り込みがあり、そこに十一月初十日寂。裏面は何も彫られていない。秀望という名の僧侶墓と考えられる。

第4号（図15）

第2号の西側にある楕形近世墓。高さ0.82m。幅0.58m。正面に火灯窓状の彫り込みがあり、そこに二列戒名が彫られている。向かって右に、種子「ア」捨院日顕信士。左は、種子「ア」妙教院法山信士。右面には楕形の彫り込みはあるが刻字はない。背面は手を加えていない。左面には「天明六丙午年 八月十日 俗名近藤平八」と彫られている。天明六年は、1786年である。

第5号（図5、図15）

石碑。高さ1.11m。幅1.24m。自然石の荒積みの上に薄い平石を据え、その上に石碑を差し込み安定させている。碑は安山岩製。享保八年（1723）の銘あり。第35代東福寺住職大阿闍梨焉立大和尚の供養碑か。焉立大和尚は東福寺中興の祖で、享保元年（1716）に本堂南側にある乙護法堂を建立したと伝わる^(八)。

第6号（図6、図15）

五輪塔の後家合せ。高さ0.98m。幅0.42m。地輪の銘文によると第二十二

代住職権大僧都澄性法印の墓。在世七十歳。享徳三年（1454）甲戌七月十二日に逝去。地輪中央の種子は、**マ**アに空点と莊嚴点がついている。**ニ**アンで胎藏界大日如来を表す。水輪には種子**ニ**ババーが一字のみ葉研彫りで刻まれている。火輪はやや軒反りし、軒裏も丸みを持つ。火輪のみ赤い阿蘇溶結凝灰岩製で、他は同種の黒い石材を使用している。

第7号（図6、図15）

五輪塔の体裁をとっているが、後家合せ。高さ0.98m。幅0.44m。一番下に敷かれている地輪は阿蘇溶結凝灰岩で阿蘇2か3と見られる。これは地面からの水の吸い上げを止めるため設置されたもので、石材の物理風化を防ぐ効果を期待して設置されたものと考えられる。その上の地輪には有名な建武三年（1336）の銘文がある。銘文の内容から菊池武村（別名、重富与一、十代菊池武房の末子）の供養塔と伝えられている。石塔造立者と推定される沙弥空寂は、名前こそ出していないが（配慮してか）、京都の大渡橋で足利尊氏との戦いで亡くなった武村を悼んで彫った銘文かと考えられている。但し、第1号石塔と同じく銘文の年号と同時期のものではなく、後の時代に追刻が行われた物と考えている。水輪は赤い阿蘇溶結凝灰岩で、四面に**マ**ア（胎藏界大日如来か）の種子を葉研彫りで勇壮に彫っている。水輪は上部を乱雑に割られており、完形ではない。火輪は軒が厚く、端で反り、軒裏も厚く反る。東福寺五輪塔の中では古相を示し鎌倉期のものと考えている。空風輪は中世後期の新しいものが乗っている。

第8号（図7、図15）

宝篋印塔で後家合せ。高さ2.02m。幅0.50m。最下部は菊鹿型宝篋印塔の基壇。六段基礎ではなく五段の階段状基礎で一石彫成。最下段は基礎を意識してか他より高い。その上の銘文が彫られているのは菊鹿型ではな

い普通の宝篋印塔の基礎部で、上部に二段の上部段形が確認できる。銘文から順善という僧の逆修のためのもので、天文三年（1543）に作られている。その上部に、菊鹿型宝篋印塔の笠部がある。馬耳状隅飾りは縦三連でやや外反している。露盤は三段で、上部に深い柄穴が穿たれている。最上部には菊鹿型宝篋印塔の相輪が乗る。しかし、柄が上手く合わないのが本来の組み合わせではない。この東福寺石塔群では珍しい宝篋印塔の相輪として貴重である。

第9号（図7、図15）

縦長の塔身が自然石の上に載せられている。高さ0.47m。幅0.26m。笠塔婆の塔身か。最上部は欠損しているが、最上部の一部に円形の盛り上がり確認できるため、凸柄の跡かと思われる。中央上部に月輪があり、その中心に種子**ニ**キリク（阿弥陀如来）がある。僧侶の逆修墓と考えられる。紀年銘は不明。大の字は確認できるので、石造物の特徴から、大永年間（1521～1527）と推定しておきたい。

第10号（図8、図15）

五輪塔の後家合せ。高さ0.84m。幅0.37m。地輪部に銘文あり。永享七年（1435）。種子は**マ**ア（胎藏界大日如来か）。種子の周辺は文字がわずかに残存しているが、意図的に削られているかのように判然としない。水輪は赤い阿蘇溶結凝灰岩だが、その他は黒い阿蘇溶結凝灰岩である。

第11号（図8、図16）

五輪塔の後家合せ。高さ0.91m。幅0.54m。敷かれた地輪の上に、銘文入りの地輪（蓮華座付き）が据えられている。その上部には水輪、火輪となる。上下逆転して据えられた水輪には四面に**マ**ア（胎藏界大日如来か）の種子を葉研彫りで彫っている。また火輪の上部には露盤のような段が付けられている。ここでは水輪だけが赤い阿蘇溶結凝灰岩である。應永（応

永) 八年は、1401年。木庭城主越前守為重(号元仙)の墓とされている(九)。

第12号(図8、図16)

後家合せ。高さ0.78m。幅0.29m。下に2つ地輪を転用して地ならし用に敷いている。その上に薄い地輪を置き、その上部に菊鹿型宝篋印塔の笠部を据える。一番上には、五輪塔の空風輪を据える。風輪には蓮華文が彫られている。中世後期か。低い地輪のみ赤い阿蘇溶結凝灰岩を使用している。

第13号(図8、図16)

後家合せ。高さ1.16m。幅0.45m。下段に菊鹿型宝篋印塔の基礎(6段一石彫成)を据えて、その上に笠塔婆の塔身を逆転させて据えている。その塔身の上に五輪塔の火輪と空風輪を据えている。風輪は蓮華文が彫られているもので中世後期か。笠塔婆の塔身には、第9号と同じ中央部に月輪があり、その中心に種子T₃キリク(阿弥陀如来)が彫られている。僧妙能による第二〇代東福寺住職長能阿闍梨の供養墓か(十)。紀年銘の判読は難しいが、残された文字から永禄九年(1566)の可能性を指摘しておく。

第14号(図9、図16)

銘入りの地輪の上に、菊鹿型宝篋印塔の基礎(5段一石彫成)が乗せられている。高さ0.54m。幅0.47m。地輪は、中央上部に種子 P ア(胎蔵界大日如来か)が彫られているが、後に意図的に削られている。応永三十年(1423)の年号は元号部分が削除されて無いため、三〇年と長く続いている元号に干支を組み合わせて整合するものを提示した。隆盛大僧都の供養塔か(十一)。

第15号(図10、図16)

下部に菊鹿型宝篋印塔の基礎。高さ0.49m。幅0.42m。四段一石彫成。上部に菊鹿型宝篋印塔の笠部が乗る。笠部の上端部は破砕しているが、方形の柄穴が残存している。馬耳風隅飾は中央よりの下部が省略されていることから新しい段階のものと考えられる。

第16号(図9、図17)

菊鹿型宝篋印塔の塔身。高さ0.20m。幅0.30m。ここでは唯一となる貴重なもの。上部が破損しているが、下段段形が現状で一段、痕跡から判断して二段ついていた可能性がある。銘文から、文明十三年(1481)八月に逝去した佛乗院の住持大阿闍梨雄絃の供養塔だと考えられる。

第17号(図17)

第17号は五輪塔の空風輪のみ。高さ0.20m。幅0.17m。

第18・19号は基礎の敷石のみのため除外する。

第20号(図9、図17)

銘文入りの五輪塔地輪と、菊鹿型宝篋印塔の笠部を重ねている。高さ0.52m。幅0.32m。地輪は中央部に種子 Khan キヤンが彫られている。文明五年(1473)五月に70歳で逝去した僧侶の供養塔か。

第21号(図9、図17)

地輪のようなものを2つ並べて敷いている。高さ0.62m。幅0.60m。その上に菊鹿型宝篋印塔の基礎を乗せており、この基礎は5段一石彫成である。最下段の軒に銘文が彫られており珍しい。宝徳二年(1450)に七十七歳で入滅した僧侶の供養塔。中央に「X」マークあり。

第22号(図10、図17)

後家合せ。高さ0.789m。幅0.35m。基礎の敷き石の上に、宝篋印塔の基礎が乗る。基礎には銘文あり。右に、天真長尊法□(印か)。中央に「X」マークあり、左に大永八年戊子とあり干支は合っている。大永八年は西暦では

1528年。銘文の最後を敬白とするのは新しい要素で、東福寺石造物ではこれのみ。僧侶の供養塔と考えられる。

第23号 (図10、図17)

後家合せ。高さ0.73m。幅0.33m。地輪に水輪が2つ乗せられ最後は火輪が乗る。

第24号 (図10、図17)

後家合せ。高さ1.12m。幅0.48m。基礎部に風化が進んで破損がひどいが、菊鹿型宝篋印塔の笠部がある。その上に水輪が2つ重ねてあり、火輪、空風輪が乗る。

第25号 (図10、図17)

後家合せ。高さ0.87m。幅0.36m。下の地輪の上部に蓮華座がつく。その上に水輪、火輪、空風輪と乗せられている。

第26号 (図10、図18)

後家合せ。高さ0.78m。幅0.41m。下から地輪、火輪、空風輪。

第27号 (図11、図18)

石碑。高さ0.95m。幅0.37m。二面に種子による真言が刻まれ、両側は銘文が彫り込まれる。右側面には空海撰『即身成仏義』の「二頌八句」の前四句が彫られている。正面には種子で、五輪塔四方五大の四字か。背面は、大日如来応身真言の一部か。左側には「本覚讚」の4行目までが刻字されている。本覚讚は天台宗の勤行で使われるものであり、本来は境内に建てられていた碑であったと推測される。『即身成仏義』は真言宗のイメージが強いが、天台宗にも取り入れられていたのだろうか。今後の検討課題である。

第28号 (図12、図18)

石碑の一部か。高さ0.44m。幅0.36m。上部に種子シタキヤが確認できる。可能性としては、上部にあと4文字あり大日如来真言の一種として、アバ・

ラ・カ・キヤと続くものと推測する。また、下部には僧の供養墓を思わせる文字が確認できる。寛正年間(1460~1466)の銘が入る。

第29号 (図18)

第1号の東に位置する。角石柱。高さ0.99m。幅0.19m。内容から東福寺菊池一族の顕彰碑である。明治30年(1897)。島崎石製。

第30号~第43号 (図12、図13、図14、図18)

石造物群下段の五輪塔群。本来の組み合わせかどうかは不明。帯磁率的には一般的な範囲に収まる阿蘇溶結凝灰岩で阿蘇4と推定できる。目視レベルでは石材が柔らかい印象であり、手に取ると粉がつくようなレベルである。地輪が低いもの高いものに分けられる。第33号の水輪には種子シタア(胎蔵界大日如来か)が彫られている。第38号の水輪にも四面に種子シタア(胎蔵界大日如来か)が彫られている。同38号の火輪は他のものとは違い、阿蘇4でも硬質な石材を使っている。残念ながら種子の途中で上端分が割れて欠損しているが、残されている種子がシタラク(涅槃門(北))を示しており、残り種子からも五輪塔の三角「火」の四門種子であることが理解できる。通常の五輪塔に四門の種子を刻字する例は多いがここでは極めて稀である。第40号の地輪中央部には「永憲」と二字刻字されているが人名か。

第44号 (図18)

五輪塔の部材の集積である。東西長2.78m。南北長2.14m。高さ1.67m。多くは水輪だが、一部空風輪、火輪、地輪が混じる。表に見える個数だけでも50基以上はある。地元の話ではこの辺りは元々竹林で鬱蒼としていたが、近年、寺の整備を地元で積極的に進めて、いまのように明るい景観となった。しかし平成二十八年(2016)の熊本地震で多くの石造物が崩壊してしまった。それらは出来るだけ元に戻したが、分からない

いものや転がついていた石塔は集積してまとめておいた。それが44号の集積であるとのことだった。

第45号(図19)

後家合せの五輪塔が2基と石製銘板あり。銘板によると、左の五輪塔が東福寺十七坊歡清坊管守の元能大阿闍が寛正七年(1456)三月歿したことを示している。この部材は地輪に見えるが上部に方形の窪みがあり方形に塔身が組み合わされる可能性がある。また、十五世紀中頃にこのような刻字をするのかという疑問が残る。

第46号(図19)

圭頭状近世墓。

第47号(図14、図19)

石碑。高さ1.98m。幅0.85m。中央上部に月輪に囲まれた中心に種子^{ツブ}ア(胎藏界大日如来か)を刻み、その下部に蓮華座を彫る。また中央銘文の下部にも同様に蓮華座を彫っている。銘文によると、元禄三年(1690)庚午八月吉祥日に製作されたことがわかる。内容としては東福寺中興に係わった大阿闍梨の顕彰碑と推定できる。阿蘇溶結凝灰岩だが、阿蘇4ではなく非常に堅緻な阿蘇2・3を使用している。そのため、表面しか文字を刻み込めず文字の彫りが浅い。寺の住職にお聞きしたところ、平成二十八年(2016)の熊本地震で倒壊しておりその際に折れてしまったとのこと。現在、補修を施して立て直されている。

第48号(図19)

笠塔婆形石塔。高さ2.26m。正面に、大乘妙典一石二字一部之塔。向かって右側に安ノ永二癸巳年春三月。安永三年は1773年。背面には、施主中嶋屋勝九郎。左手には、為両親菩提とある。つまり、江戸時代後期に建てられた両親の供養塔である。

第49号(図20)

巨大な石塔。高さ4m以上。幅2.22m。正面に應感塔と刻字されている。應感と感応と意味は同じで、仏が人に応じたはたらきかけ(応)と、人がそれを感じとる心のはたらき(感)を示しており、仏または仏と関わりをもつものを示す。塔身右側に安政三年(1856)丙辰とあと塔身左側には四月十八日と造立日が分かる。背面には願主として、隈府東本町 益田又七長廣 壽六十有六 益田彌三衛門 齡二十三とあり、益田一族により発願されたことがわかる。また基礎石に奉納として多くの名前が刻まれているため地域の人々も結縁して協力したことがわかる。

三、東福寺石塔群の分析

前項で石塔群の個別資料調査について記述してきた。ここでは、それら総体としてどのような傾向が抽出できるか検討していきたい。まずは紀年銘として、古い方から元弘3年(1333)、建武3年(1336)、応永8年(1401)、永享7年(1435)、宝徳2年(1450)、宝徳3年(1451)、文明5年(1473)、文明13年(1481)、寛正年間(1460~1466)、大永8年(1528)、元禄3年(1690)、安永3年(1773)、享保8年(1886)、天明6年(1786)、文化2年(1805)、安政3年(1856)、明治20年(1887)となる。これを表に纏めたのが表1となる。

表1から読み取れるのは、五輪塔の紀年銘は十四世紀代と十五世紀代に集中しており、とくに十五世紀は継続して確認が出来る。逆に十四世紀代の2例は時代が下ってからの追刻の可能性が高い。宝篋印塔は菊鹿型

表1 東福寺石塔群の消長

形態	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	備考
五輪塔	■ ■	■ ■ ■ ■					
宝篋印塔		■ ■	■				■ 通常のもの
笠塔婆			■ ■ ■				
近世墓					■	■	
近世塔					■	■	
石碑		■ ■		■	■		
標柱						■	

凡例 ■ 紀年銘のあるものが存在
 ■ ■ ■ 紀年銘はあるが幅をもつもの

宝篋印塔が主でわずかに通常の宝篋印塔が混じっている。これら五輪塔と同様に十五世紀に分布の中心がある。この菊池型宝篋印塔については後述する。十六世紀は資料が少ないが笠塔婆が主となる可能性がある。十六世紀後半から十七世紀中頃まで紀年銘資料が確認できないのは、寺伝とよく整合しており中世から継続してきた寺の活動が、近世大名となった加藤清正による所領没収や井手開発行為に伴う境内地の改変などで寺の存続が危ぶまれたのではないかと考えられる^(十二)。その停滞した時期には、石造物の築造がみとめられないと考えられる。その反動とも言えるが、十七世紀後半～十八世紀前半に東福寺中興に係わる顕彰石碑が建てられたと考えられる。数は少ないが、近世墓、無縫塔、近世塔などが十八世紀後半～十九世紀中頃まで境内に建てられ、寺の活動が盛んになったことを感じさせる。また明治期には菊池一族の顕彰を表す標柱なども建てられている。以上は紀年銘資料の分布から考えられる流れである。紀年銘がない五輪塔などはその形や大きさ、種子の入れ方から判断して、東福寺や菊池氏に係わる人々の墓であり、その年代は十四世紀～十六世紀のものと考えられる。

四 菊池一族と石造物 東福寺の事例より

東福寺の石造物を調査・分析した結果、何点かの成果と課題が抽出できた。以下、箇条書きで表したい。

『成果』

① 東福寺石塔群の資料化を進めることができた。残念ながらこれらの石造物は原位置を保っておらず、当初の石材の組み合わせでもないなど、

直接的な資料価値は低いと考えられ放置されてきた。しかしながら部材ごとに考古学的調査手法で調査研究することで、歴史資料として新たな光を当てることができた。漠然と菊池氏関係と考えられていたこれら石造物群について、菊池氏に明確に関係すると思われる資料は、石塔第1号、第7号だけであるが、これらには時代は下るものの強い供養や顕彰の意図が現れていると考えた。

② 銘が入る石造物の多くは東福寺の僧侶関係であることがわかった。それらは十五世紀のもので東福寺がその時代に栄えたことが推定できる。

③ 菊池一族への顕彰活動が何度か行われていることがわかった。古くは十五世紀段階、その後おそらく江戸時代に何度か、また明治から昭和の太平洋戦争に突入していく軍国教育に伴い忠臣菊池一族の顕彰が進められた。十五世紀段階の顕彰は供養とセットになったもの。石塔第1号、第7号が代表である。江戸時代の菊池一族の顕彰活動で特に東福寺に関係しているのは、東福寺の正面石段と石垣を、正徳二年(1712) 第35代住職焉立大阿闍梨の時に、渋江公実氏が限府中から寄付を集めて造られたと伝えられている^(十三)。この時期かは不明だが、江戸時代に石塔なども下に敷きならし用の石材をおいて主立ったもの(銘文があるもの)を列状に並べたのではないかと想像する。近代に至り、石塔第1号、第7号をとりかこむ外柵が整備された。上の段に銘文入りと菊鹿型宝篋印塔を並べたのは、江戸時代に入り、寺の経営が安定した頃(十七世紀後半ぐらいか)に墓の整備をし、その段階に菊池一族に関係するというイメージが形成されており、それに準じたのではないだろうか。それらの要素がない五輪塔は、下段に揃えたのだろうか。

【課題】

① 菊鹿型宝篋印塔の位置づけ、分布と型式編年(覚書)

今回の調査で同一地点から部材とはいえ、菊鹿型宝篋印塔が13点確認できた。これは近隣でも別格の正観寺を除くと群を抜いて多い^(十四)。菊池氏と石造物の関係を考えるうえでもこの菊鹿型宝篋印塔が大きな鍵になることがわかった。そのため第五章で個別に考察を加えてみたい。

五・菊池一族と菊鹿型宝篋印塔について

菊鹿型宝篋印塔については多田隈豊秋氏により、「六段式宝篋印塔」と定義された。定義では「基壇が六段。二石又は三石より成り、再下段より最上段までその高さはわずかな差で漸次しながらも、(略)ほぼ同じ高さのものを積み上げている。蓋石の四隅に刻出された馬耳形隅飾は三弧式をとっているが、弧と弧の間に稜角を降だし、その間を匙形にしゃくっている」としている(多田隈 1975)。その後、前川清一氏による研究がまとまったものとしてあげられる(前川 1995)。熊本県山鹿市・菊池市を中心に43例を報告し、分布の北限は福岡県八女郡の3例、南限は熊本市の1例を上げている。紀年銘資料は、23例で正平十六年(1361)から天正十二年(1584)が確認されている。おおよそ、十五世紀中頃、十六世紀としている。ここで前川氏は菊鹿型宝篋印塔という定義ではなく、特徴的な塔身を菊鹿型塔身と定義していることに注目したい。塔身に二段の段形がつくのだが、それが上部付くとI型、下部につくとII型と分類されている。ちなみにI型は39例、II型は4例とのこと。その後、積極的な研究はなかったが、美濃口雅朗氏により熊本城飯田丸石垣出土石造物の菊鹿型塔身の分析を進めるなかで触れられて

いる(美濃口2017)。興味深いのはその出土資料は紀年銘「至徳元年(1384)」と東福寺資料よりも古いことや、塔身上部につく段形も三段と特異な姿をしていることである。塔身につく三段の段形は他の資料にはない。古い型式が二段を遵守しているため、この資料自体は新しく、古い年号が追刻された可能性も考えられるのではないだろうか。また美濃口氏により前川氏の事例に新規に三基の事例を追加されている。最近では、九州古文化研究会の例会で原田昭一氏から「九州における宝篋印塔の出現と展開」という研究発表が行われた。発表資料のなかで、九州の宝篋印塔の展開期に、いわゆる六段式基礎を持つ宝篋印塔は、熊本県山鹿市川西宝篋印塔(正和三年(1314)銘)から菊池市寺尾野宝篋印塔(天授四年(1378)に繋がり、戦国期に至るまで熊本県北部で流行したとする。また、原田氏はこの特徴的な宝篋印塔を菊池氏に關係すると位置づけている。それは大智という僧が、鎌倉時代末、南北朝時代初期に菊池氏の要請により、菊池市の山深い聖護寺に入山し、後に玉名の広福寺に移り、曹洞禅を広めた地域がちょうどこの宝篋印塔が展開していると原田氏は説明している。つまり、大智の庇護者である菊池氏の勢力圏で、禅宗の教線拡大が行われた地域と鎌倉時代末、南北朝時代の宝篋印塔の分布域が重なることがその証左とする。

さて、用語の定義を行いたい。菊鹿型宝篋印塔とは、まず①基礎が六段階段式である(ただし、その構成は一段一石六段、二石三段六段、三石二段六段、一石六段とバラエティに富むのが興味深い)。時代が下ると共に省略傾向が明確に認められるのが特徴である。また時代が下るとこの六段の規制が緩み、五段、四段と段数が減るもの確認できる。次に②笠部の下段二段が別石作りである(これも時代が下ると省略され塔身側に段形が付きいわゆる菊鹿型塔身と呼ばれているものになる)。

隅飾りは馬耳形(羽状)で基本三弧式(二弧も少数あり)を呈し、それぞれ稜線をつけて中を挟んでいる(これも型式変遷で退化して行く要素)。また石材は阿蘇溶結凝灰岩を使用する。

菊鹿型宝篋印塔の型式変遷については第21・22図に型式変遷案をまとめた^(十五)。現在の山鹿市域で誕生した菊鹿型宝篋印塔は全国で見られる定型化した宝篋印塔ではなかった。非常に特徴があり、なぜその形になったかが大変興味深い。現時点では明確な論拠はないが、笠部から露盤に至る六段の段形が、伏鉢を仏塔本体と見立てたときの基礎にあたる階段と考えたら、基礎部も同様に塔身に至る階段として六段の階段と見立てたのではないかと想定している。また、14世紀初めに建立された川西宝篋印塔を基点として以後、戦国時代末まで造られた菊鹿型宝篋印塔は、銘文によると当初は真言宗に深く関わるものであった^(十六)。その後も塔身の銘文などを確認すると、明確に武士と言えるものではなく、僧侶の墓だったことがわかる。そのためか、五輪塔ほど多数残存しておらず、割合的には少数の部類になるだろう。

菊鹿型宝篋印塔の分布が、菊池氏の支配領域と重なる範囲で多く見られることを菊池氏の禅宗帰依と直接結び付けるのは現段階では慎重でありたい^(十七)。菊池氏が支配した領域の中の寺院で、菊鹿型宝篋印塔を積極的に採用した理由に関しては、今後も検討を加え考察を進めたい。菊池一族の顕彰活動として重要な動きに、正観寺で見られる菊池一族の墓も、天明年間(1781~1789)に「再発見」されており、戒名の追刻などから判断して、菊鹿型宝篋印塔を利用した後世の顕彰活動と考えられる。菊池一族の顕彰は長い間に何度も行われており、その際に菊鹿型宝篋印塔を利用して菊池一族の墓として再構築した可能性を指摘できることが、今回の調査成果の一つとしてあげられる。

おわりに

以上、石造物から見た菊池一族との関わりを、東福寺石塔群の調査とそれに付随する菊鹿型宝篋印塔の検討を通して検討してみた。また今まで完形優品でないため石造美術の対象にならず、また銘文があるものだけが文献史学から注目されたきた石造物を考古学の手法により、再評価できることを指摘した。それに加えて地域の特徴ある石造物である菊鹿型宝篋印塔を新たに検討して一応の型式変遷の方向性を提示した。しかしながらコロナ禍の影響もあり、現地へ赴き、詳細な分布調査や個別石塔図面の作図まで至らなかつたことは、今後の課題としたい。特に菊池五山の他の寺院例の検討は必須だと思われる。

本稿をきっかけに菊池一族に係わる石造物からみた研究が進み、学問的な見地から菊池一族の歴史が解明されることを期待したい。またこのような縁を頂き研究に参加させて頂いたことを感謝し、今後も研究を進めたいと考えている。

資料調査にあたっては、池田朋生氏（熊本県）を主に、木島幸太郎氏（熊本大学生）、原田信敬氏（熊本県）、西田京平氏（上天草市）に石塔の作図助力や現地での類例確認などサポートして頂き、大変お世話になった。特に池田氏には、石材の見方、帯磁率測定を始めとして協力して頂くことのみならずディスプレイを繰り返し返して石造物を考える機会を造って頂き、その度に多くの示唆を得た。また、日頃から永見秀徳氏（九州文化財計測支援集団）には三次元計測の指導助言、今回のドローン撮影の協

力など多岐にわたり助けていただき感謝を申し上げます。現地での石塔調査では東福寺住職である白石浄光氏に格段の配慮を頂き、感謝している。地元亘地区の自治会の方、東福寺を清掃されている方々にも昔の話を聞かせていただいた。

末筆になるが、本稿の執筆にあたって、上床真氏、狭川真一氏、末武希代子氏、関森憩氏、竹田宏司氏、西住欣一郎氏、美濃口雅朗氏、宮崎歩氏、山田元樹氏からご助言・資料提供など格別のご配慮を頂いた。末筆ながら感謝申し上げます。

追記

校正中に、藤島志考二〇二〇「熊本における中世宝篋印塔の様相―宇土半島以北を中心として―」『福岡大学考古学論集3―武末純一先生退職記念―』武末純一先生退職記念事業会の存在を見落としていたことに気付いた。藤島氏の論文は、熊本県内の中世宝篋印塔を網羅しタイプ分けし、編年案を提示された意欲作である。当然、菊鹿型宝篋印塔も取り上げられており、本来であれば評価すべきだが、今回は気付くのが遅く、取り上げることが叶わなかつた。次回、菊鹿型宝篋印塔の再検討が行う機会が与えられた際には、是非参考にさせて頂きたい。

註

- (一) 川勝政太郎たちの研究グループが昭和七年(1932)頃に提唱した「石造美術」という用語だが、そもそもは石造物や石造遺物という言葉が固すぎて、市民にアピールするには難しいという判断で新たに提唱された可能性がある(山路裕樹氏ご教示)。その後、この用語は川勝氏らの活躍により地方史・郷土史の研究が進むなか、美術史の一分野として広く隆盛し、用語としても定着した(高嶋2021)。ただ美術史の一環として石造物の調査が行われると、写真やメモから推定が行われがちで、客観的なデータである実測図などが提示されないことが多かった。しかしながら、川勝(1982)では「遺品それ自体の様式・手法などの歴史考古学的研究によって、全国的に、または地方的に文化相を明らかにすることができるのである」と明記されているように、考古学的な手法での分析が石造物にとって有効的手法であることは間違いない。近年の研究史を振り返るに、考古学手法による石造物の研究は、考古学研究者が主導的に編集を行った『日本石造物辞典』(2012)の刊行が1つの大きな転換期であると捉えている。
- (二) 東福寺については『日本歴史地名大系』および『角川日本地名大辞典』を参考にした。
- (三) 寺伝は、菊池市教育委員会により昭和六十三年三月に設置された輪足山東福寺の文化財解説板による。また東福寺の石造物の由来は、境内の「東福寺の墓石群のご案内」という解説板を参照にした。
- (四) 菊池五山は、京都・鎌倉の五山の制にならない、菊池武光により東福寺、西福寺、南福寺、北福寺、大琳寺とされ、その五山の上に、正観寺を置き、格付けを行った。
- (五) 表2の作成は池田朋生氏の調査成果によるものである。記して感謝申し上げる。石造物の帯磁率調査は近年盛んになってきた。しかしながら調査方法の限界等
- あり、またその適用についても考古学側が無作為に使うことは危険が伴う。それらを留意しながら今後積極的に活用されるべき調査方法だと考えている。なお今回の調査データにもし不具合があれば、その責は筆者にある。
- (六) 今回の調査成果の1つに阿蘇溶結凝灰岩のなかで黒系統と赤系統が確認されたことがあげられる。一般的な色調は黒系統を示すのだが、ある程度の赤い阿蘇溶結凝灰岩が認められる。調査地点の近隣では、熊本県指定重要文化財である立門橋付近にこの赤い阿蘇溶結凝灰岩の川原石が確認できるほか、立門橋を後世する石材に黒い阿蘇溶結凝灰岩と赤い阿蘇溶結凝灰岩の両方が確認できる。現地での視認ではおおよそ3割程度が赤い阿蘇溶結凝灰岩である。以上、池田朋生氏のご教示による。
- (七) 美濃口雅朗・野村俊之両氏からのご教示による。
- (八) 乙護法堂には乙護大明神が祀っており、耳の神様、ボケ知らずとして信仰されている。乙護大明神は一般的には乙護童子として知られているもので、乙、和の2体の組み合わせで仏教や特に修験道に深く関わるものである。吉田扶希子氏のご教示による。
- (九) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十一) 境内の解説板「東福寺の墓石群のご案内」を参照した。
- (十二) ただし熊本では近世期の大きな改変を他の多くの偉大な業績ゆえ、すべからく加藤清正がやったこととする傾向(池田氏教示)があるので、厳密に清正が行ったかどうかは不明である。ここではそのような伝承があり、清正ではなくとも同じように大きな権力の変換期があり、東福寺が存亡の危機にあったことが想定できるとする。
- (十三) 石段入口右手にある碑文を参照した。同碑文では、洪江家は代々菊池一族の顕彰には特に熱心だったため、菊池一族の菩提寺の1つである東福寺の為に力添え

したのではないかと説明している。なお洪江氏の墓は、東福寺の南西側の丘陵上にある。

(西) 正観寺では二十基以上の菊鹿型宝篋印塔を確認している。今後、調査の必要を痛感している。

(五) 簡単にまとめると、巨大なものから小さいものへ。複雑な構造を造りやすくするために簡略化していることがうかがえる。但し、戦国時代から近世にかけて再度巨大化していく可能性が考えられる。これは大名やその家臣が先祖顕彰のため、新しい時代に古い様式の石塔を造るためだと推定している。

(土) 川西宝篋印塔と元吾平神社宝篋印塔のどちらも銘文に、「遍照金剛」とあり、真言宗に帰依したものによる建立である。

(七) 例えば、菊池五山のなかでも東福寺は天台宗である。もちろん、東福寺が元々天台宗であったとしても十四世紀中頃の菊池五山の段階で衰微しており、臨済宗の寺として復興したという理解も成り立たないこともない。ただ、寺伝にまったくそのような話が出てこないのと、江戸時代の地誌にも東福寺は祈祷所であったと記載されており、天台宗の密教系の様子がうかがえる。むしろ、それら宗派を越えて僧侶の墓として菊鹿型宝篋印塔が採用された要因を今後考えていかなければならない。

引用・参考文献

石田瑞磨 一九九七 『例文 仏教語大辞典』小学館

『植木町史』一九八一 植木町

『角川日本地名大辞典』四三熊本県 一九九八 角川書店

川勝政太郎 一九八一 『石造美術』誠文堂新光社

『菊池市史』上巻第二版 一九九五 菊池市

高嶋賢二 二〇二一 「愛媛県の有形文化財」『石のクロニクル―黒川信義さん古稀記

念論集―』黒川信義さん古稀記念論集刊行会

日本石造物辞典編集委員会編 二〇二二 『日本石造物辞典』吉川弘文館

多田隈豊秋 一九七五 『九州の石塔』上巻 西日本文化協会

原田昭一 二〇二二 「九州〈宝篋印塔〉」狭川真一・松井一明編 『中世石塔の考古学―

五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布―』高志書院

原田昭一 二〇一九 「九州における宝篋印塔の出現と展開」九州古文化研究会発表資料

『七城町誌』一九九一 七城町

前川清一 一九九五 『菊鹿の石造物』菊鹿町教育委員会

松本雅明編 一九八五 『日本歴史地名大系』熊本県の地名 平凡社出版

美濃口雅朗 二〇一七 「熊本城飯田丸出土の石造物」『熊本城調査研究センター年

報3』熊本市熊本城調査研究センター

挿図出典

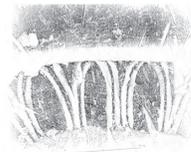
図版内の種子フォントについては、左記のサイトからD1として使用させていただいた。記して感謝する。

Wikipedia 種子密教 Blucknigh61jip 氏作成

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%AE%E5%AD%90-%E5%AF%86%E6%95%99>

表2 東福寺石塔の帯磁率及び石材判定表

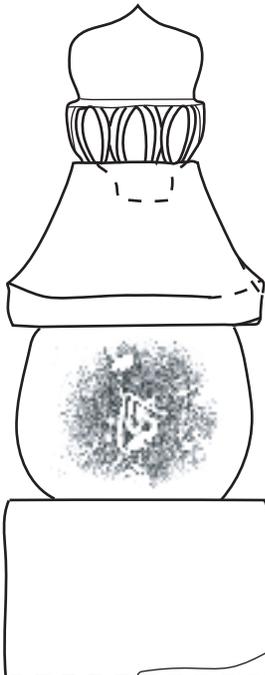
番号	場所	名称	帯磁率 ^{10-3SI}	紀年銘	石材判定	備考
1		地輪	18.4	元弘3年(1333)	阿蘇4(帯磁率高)黒	「元弘」欠損 岩相は阿蘇4に似る。再度確認必要。 梵字有り 赤みを帯びた阿蘇4
		地輪	6.74		凝灰岩	
		水輪	21.9		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	19.3		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		空風輪	15.4		阿蘇4(帯磁率高)黒	
2		無縫塔	19.2	未確認	島崎石	紀年銘のある石材のみ測定
3		位牌塔形近世墓	19.2	文化2年(1805)	島崎石	紀年銘のある石材のみ測定
4		櫛形近世墓		天明6年(1786)		未測定
5		石碑	27.9	享保8年(1723)	安山岩	反球面レンズ状剥離により取出した石材、島崎石ではない。
6		地輪	17.2	宝徳3年(1451)	阿蘇4(帯磁率高)黒	有り
		水輪	26.5		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	25.1		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		空風輪	21.7		阿蘇4(帯磁率高)黒	
7		保存対策部材か	32.7	建武3年(1336)	阿蘇2~3	下部からの水の吸い上げによる物理風化を防ぐ効果を期待したものか。 要確認
		地輪	8.16		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	25.1		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		火輪	8.44		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	7.47		阿蘇4(帯磁率高)黒	
8		基礎	16.4		阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		基礎	14.9		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		笠部	14.4		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		相輪	9.74		阿蘇4(帯磁率高)黒	
9		地輪?	9.66		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		笠塔婆塔身か	9.57		阿蘇4(帯磁率高)黒	
10		地輪	22.0	永享7年(1435)	阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	25.2		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		火輪	18.4		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	13.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	
11		地輪	7.74	応永8年(1401)	阿蘇4(帯磁率高)黒	蓮華座付き
		地輪	8.64		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	14.9		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		火輪	14.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	
12		地輪の転用材?	12.4		阿蘇4	地ならし用? 地ならし用? 菊鹿型宝篋印塔
		地輪の転用材?	11.1		阿蘇4	
		地輪	25.4		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		笠部	29.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	17.1		阿蘇4(帯磁率高)黒	
13	上段	基礎	14.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		塔婆?	20.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	20.8		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	14.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	
14		地輪	23.4	銘入り	阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		基礎	15.7		阿蘇4(帯磁率高)黒	
15		基礎	13.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		笠部	18.9		阿蘇4(帯磁率高)黒	
16		塔身	17.1	文明13年(1481)	阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
17		残欠?				
18		残欠?				残欠
19		残欠?				
20		基礎	16.8	文明5年(1473)	阿蘇4(帯磁率高)黒	五輪塔
		笠部	12.1		阿蘇4(帯磁率高)赤	
21		地輪?	15.9	宝徳2年(1450)	阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		地輪?	23.2		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		基礎	14.9		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		笠部			阿蘇4(帯磁率高)黒	
22		保存対策部材か	6.46	大永8年(1528)	阿蘇4	20番目? 宝篋印塔
		基礎	27.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	4.94		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	16.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	
23		地輪	22.8		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	21.2		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	27.8		阿蘇4(帯磁率高)赤	
		火輪	28.8		阿蘇4(帯磁率高)赤	
24		基礎	13.4		阿蘇4(帯磁率高)黒	菊鹿型宝篋印塔
		水輪	5.99		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		水輪	13.7		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	21.0		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	18.96		阿蘇4(帯磁率高)黒	
25		地輪	3.65		阿蘇4	蓮華座付き
		水輪	43.1		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	18.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	14.1		阿蘇4(帯磁率高)黒	
26		地輪	8.15		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		火輪	17.3		阿蘇4(帯磁率高)黒	
		空風輪	8.32		阿蘇4(帯磁率高)黒	
27		石碑	16.6		阿蘇4(帯磁率高)黒	
28		石碑	20.4	寛正(1460~1466)	阿蘇4(帯磁率高)黒	
29		石柱(顕彰碑)	37.1	明治20年(1887)	島崎石	



空風輪拓本



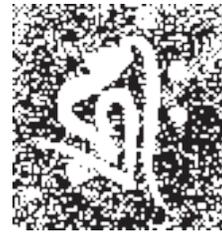
水輪拓本 裏面



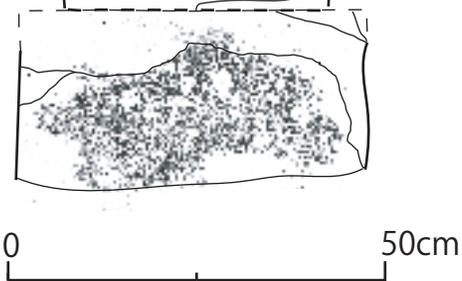
水輪拓本 左面



水輪拓本 右面



水輪拓本 正面



0 50cm

第1号実測図

水輪種子 (金剛界四仏)

正面 (西) hrih 阿弥陀如来

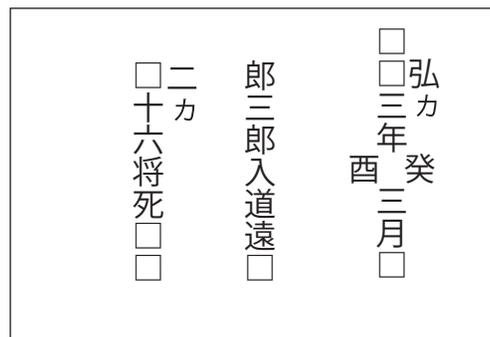
左面 (北) a 大日如来

裏面 (東) hūṃ 阿閼如来

右面 (南) trāh 宝生如来

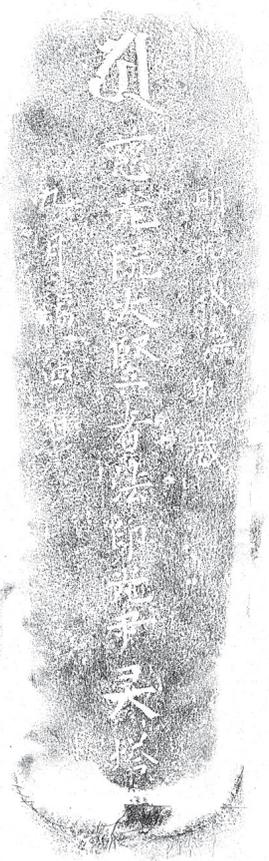


地輪拓本



地輪 銘文

第4図 東福寺石塔 第1号実測図 (S = 1/10) (拓本は縮尺任意)



第2号石塔 拓本



第5号石塔 拓本

ア
 慈光院大堅者法印光尹靈塔
 九月□□日
 明和八辛卯歲

銘文

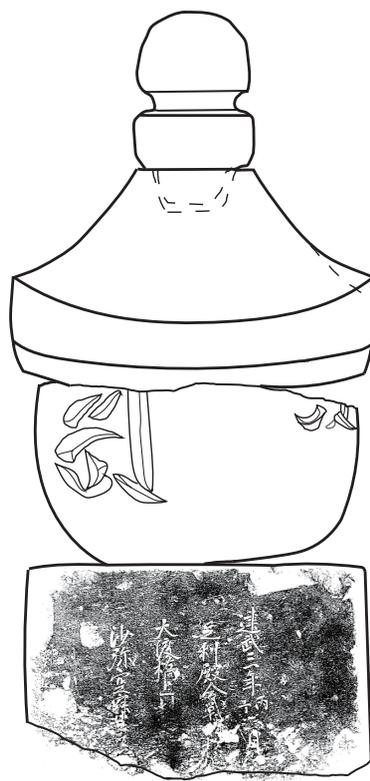
當寺中興大阿闍梨堅者焉立法印大和尚
 九月十□二日
 有力
 享保□八癸卯白
 第力

銘文

第5図 東福寺石塔 第2・5号 (拓本 S=1/10)



第6号石塔



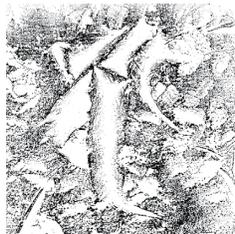
第7号石塔



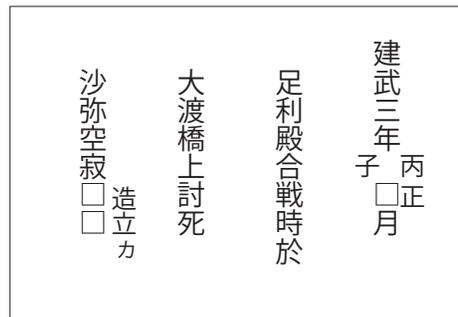
水輪拓本（背面）



水輪拓本（左）



第6号水輪拓本



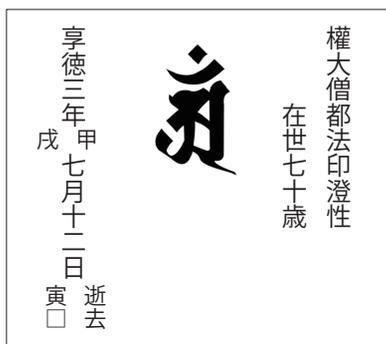
第7号地輪銘文



水輪拓本（正面）

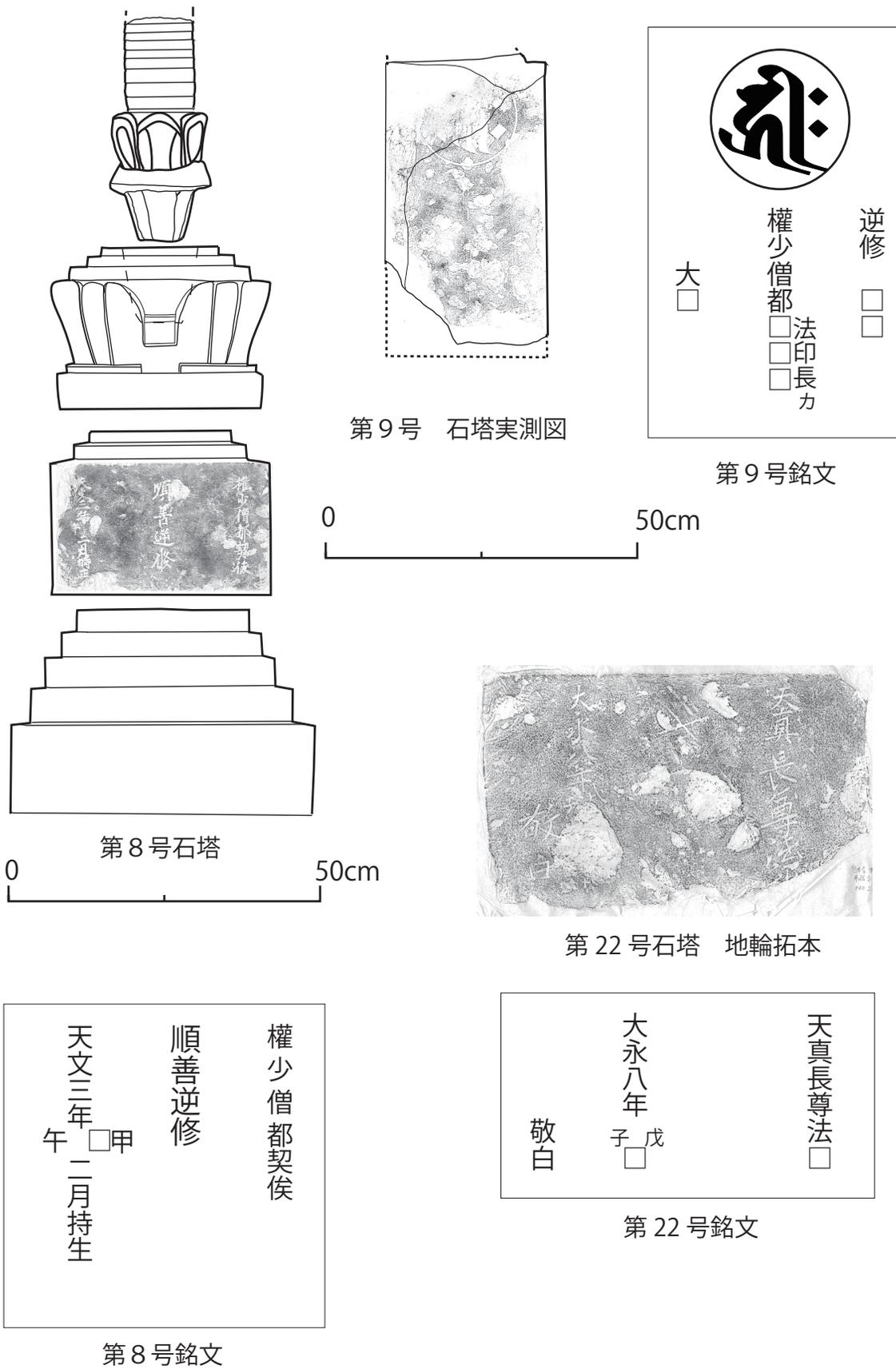


水輪拓本（右）

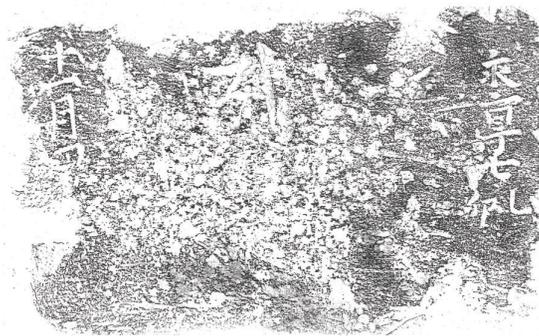


第6号地輪銘文





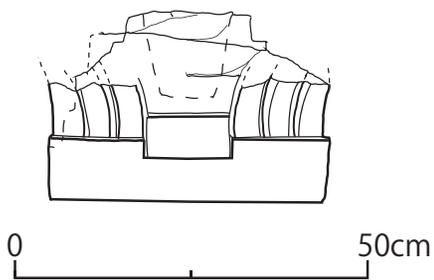
第7図 東福寺石塔第8号・9号実測図 (S=1/10)



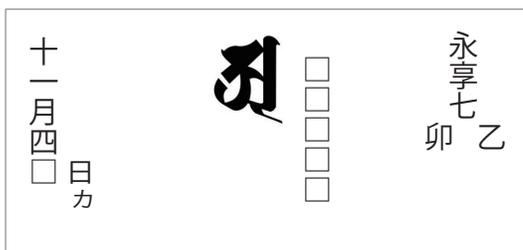
第10号 拓本



第11号
火輪拓本



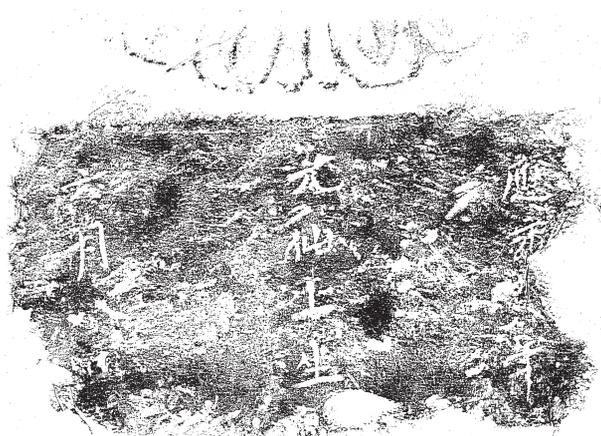
第12号 実測図



第10号 銘文



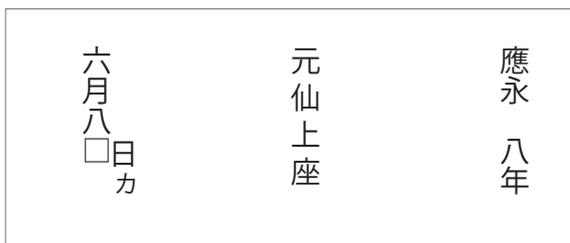
第13号 拓本



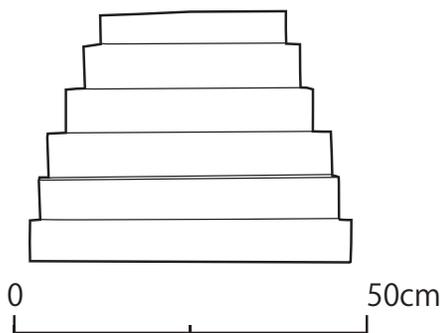
第11号 拓本



第13号 銘文

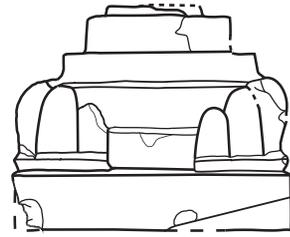
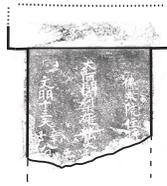
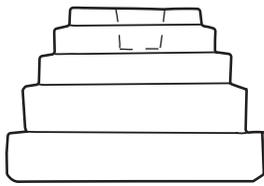


第11号 銘文



第13号 実測図

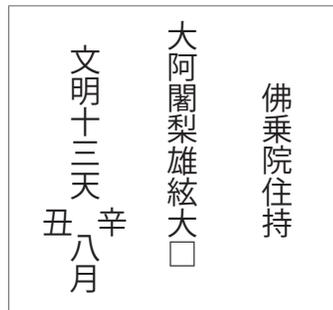
第8図 東福寺石塔第10・11・12・13号実測図



第16号 実測図



第14号 実測図



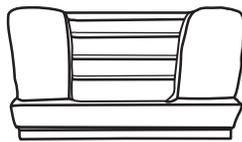
第16号 銘文



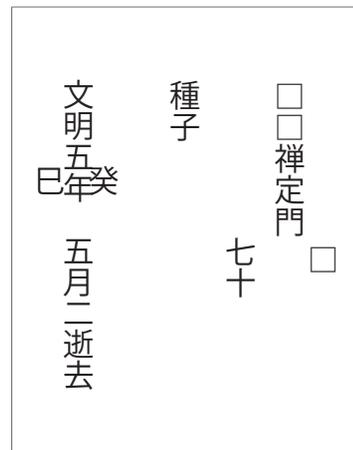
第20号 実測図



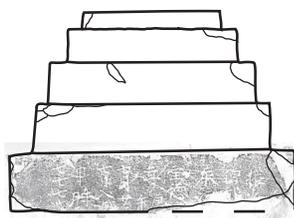
第14号 銘文



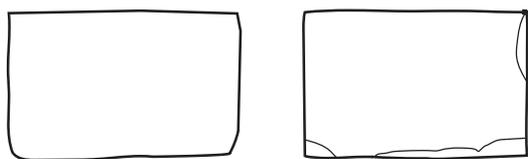
第21号 笠部
実測図



第20号 銘文



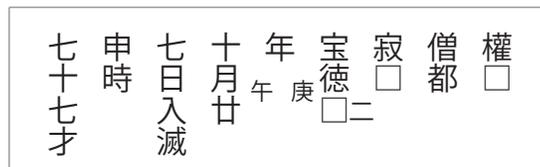
← 銘文



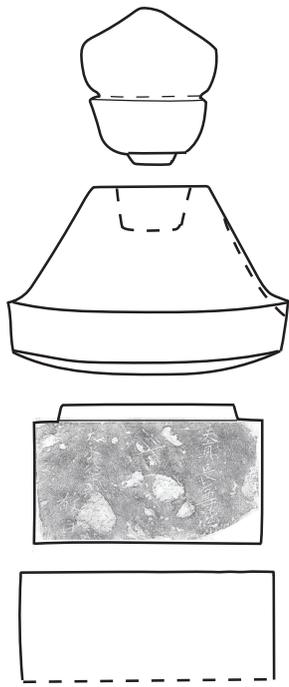
第21号 基礎 実測図



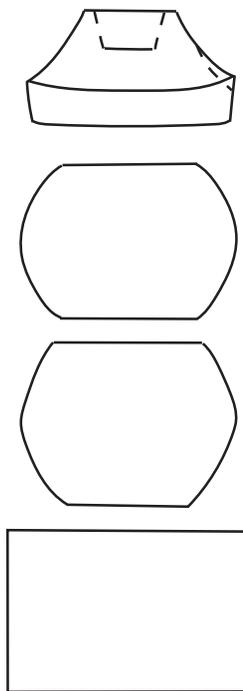
第21号 基礎最下段拓本



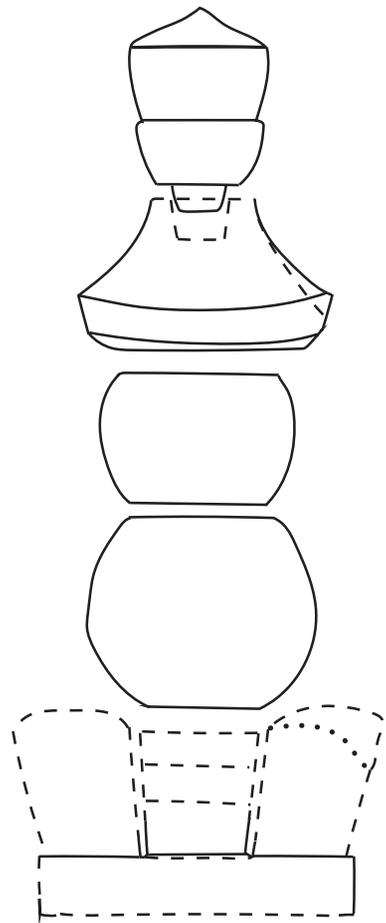
第21号 銘文



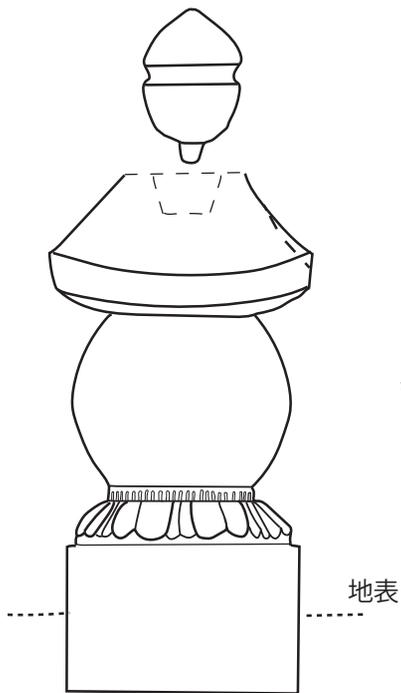
第 22 号 実測図



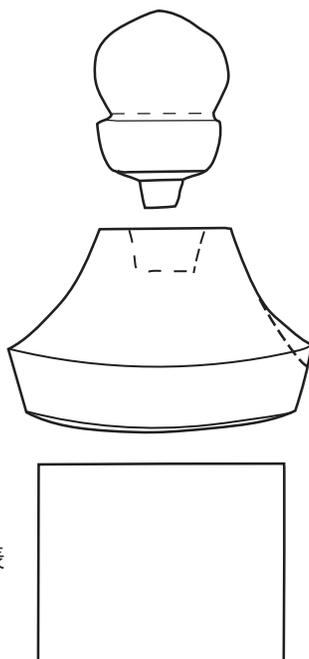
第 23 号 実測図



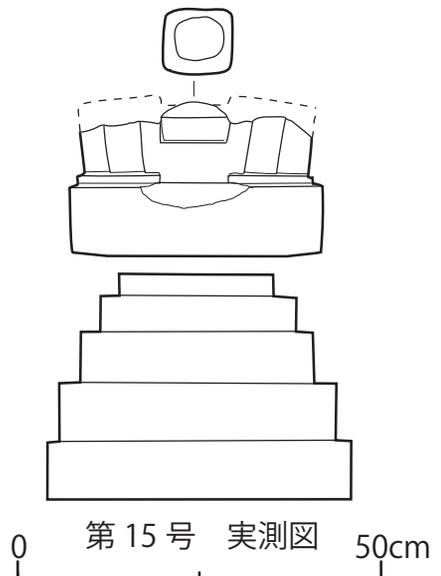
第 24 号 実測図



第 25 号 実測図

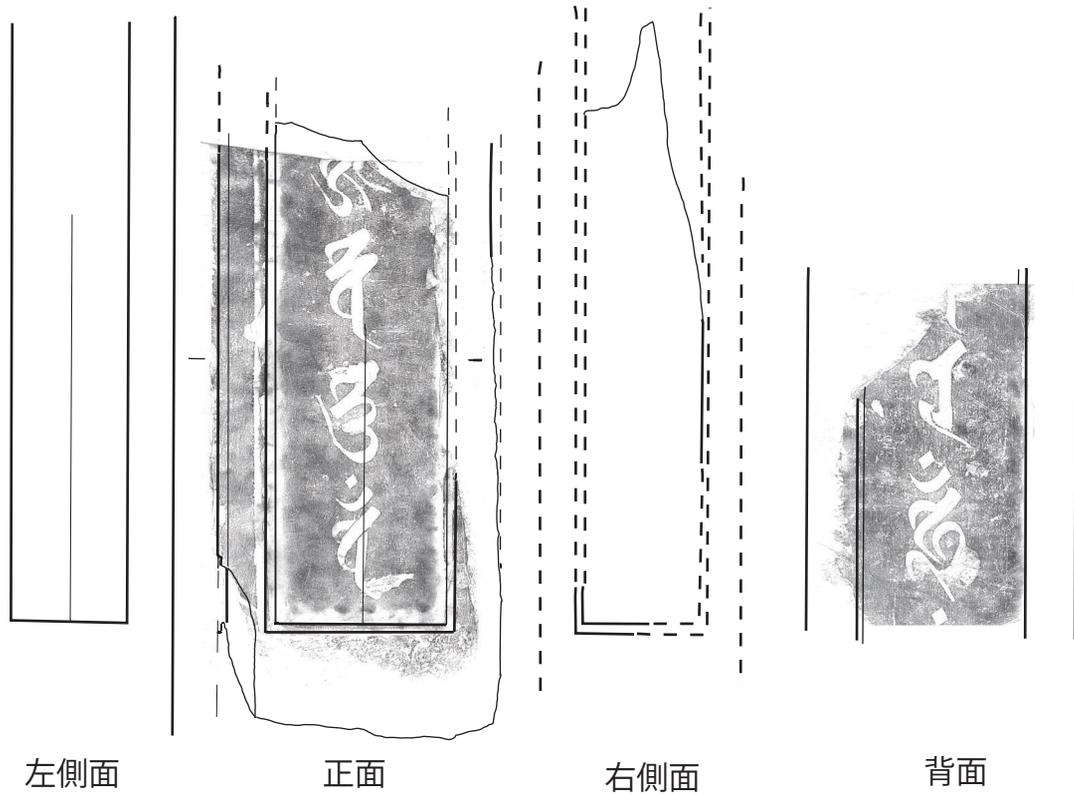


第 26 号 実測図



第 15 号 実測図

第 10 图 東福寺石塔 第 15 · 22 · 23 · 24 · 25 · 26 号実測図 (S = 1/10)



第 27 号 実測図



第 27 号左側面拓本

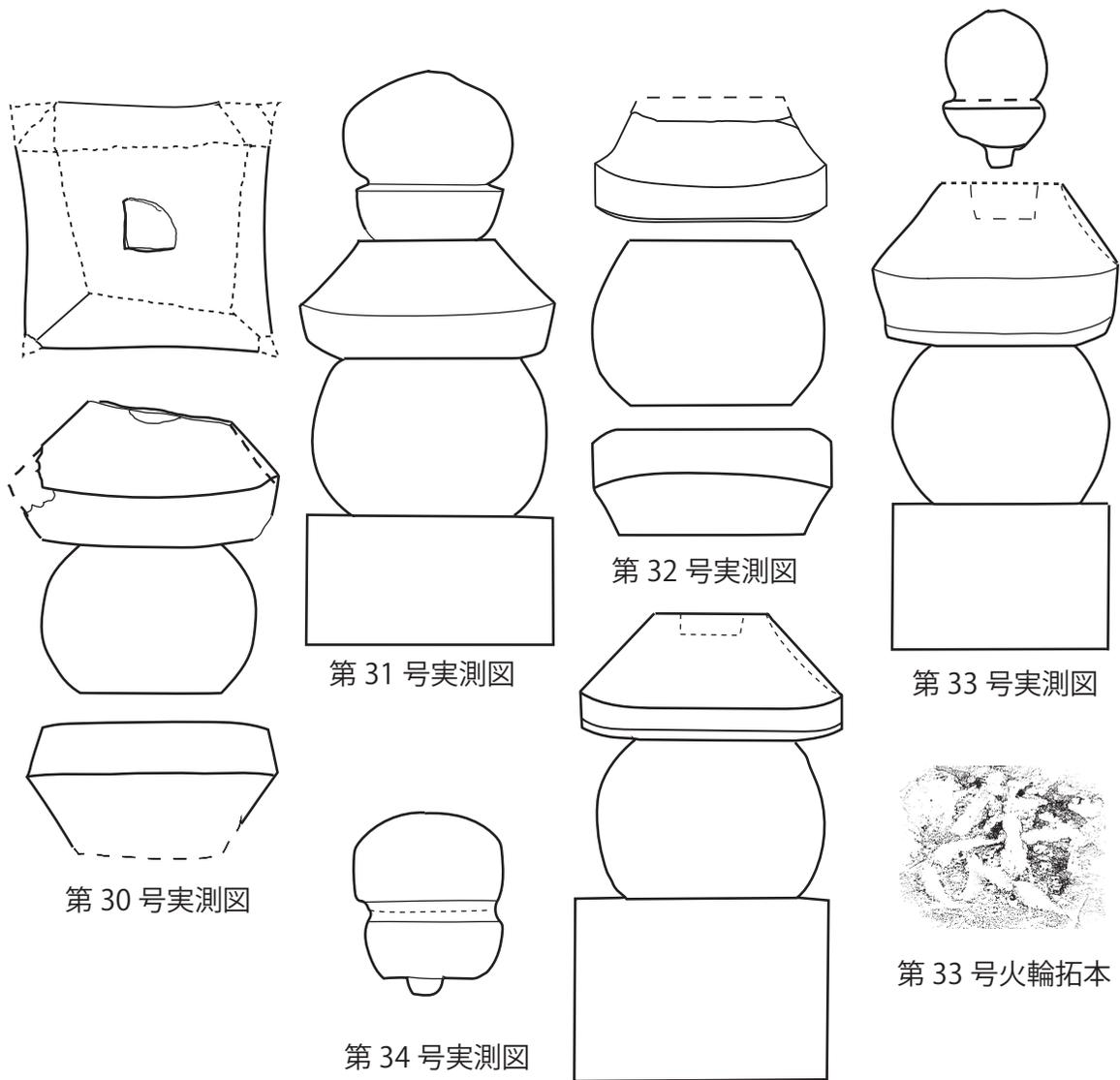
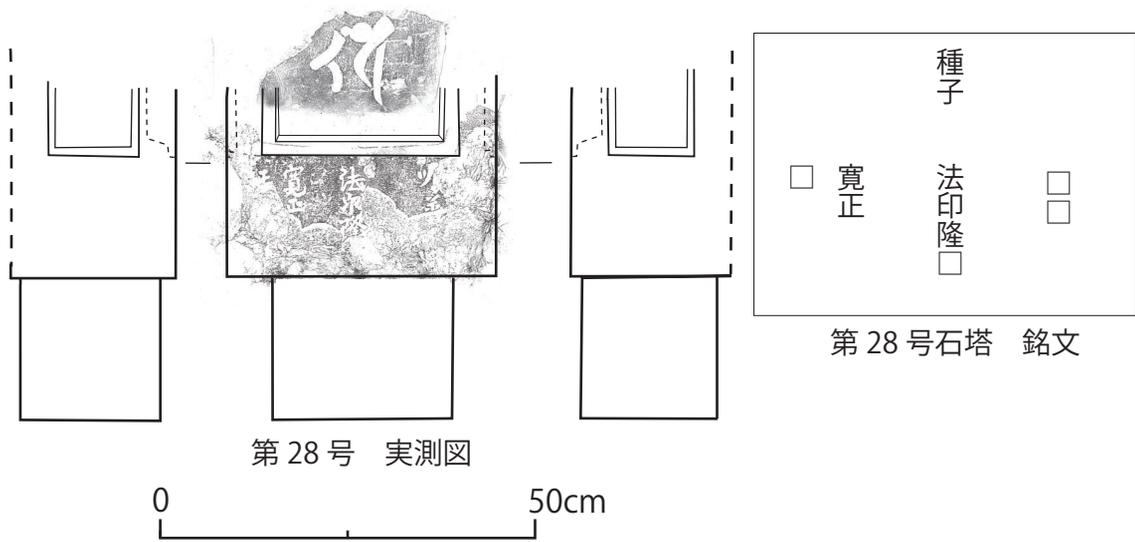
- 本 帰
- 命本覚心法身 常住妙法心蓮臺
- 来具足三身徳 三十七尊住心 □ 城



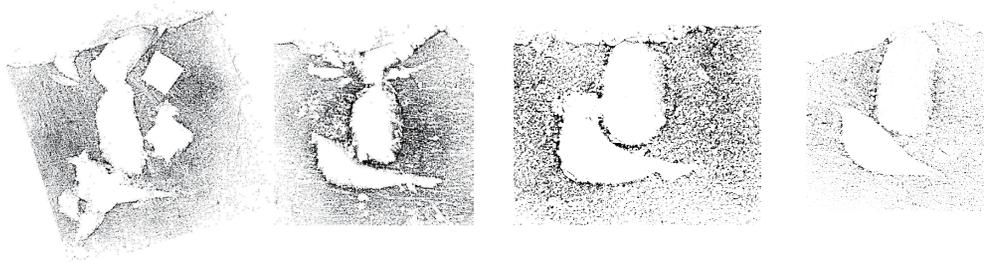
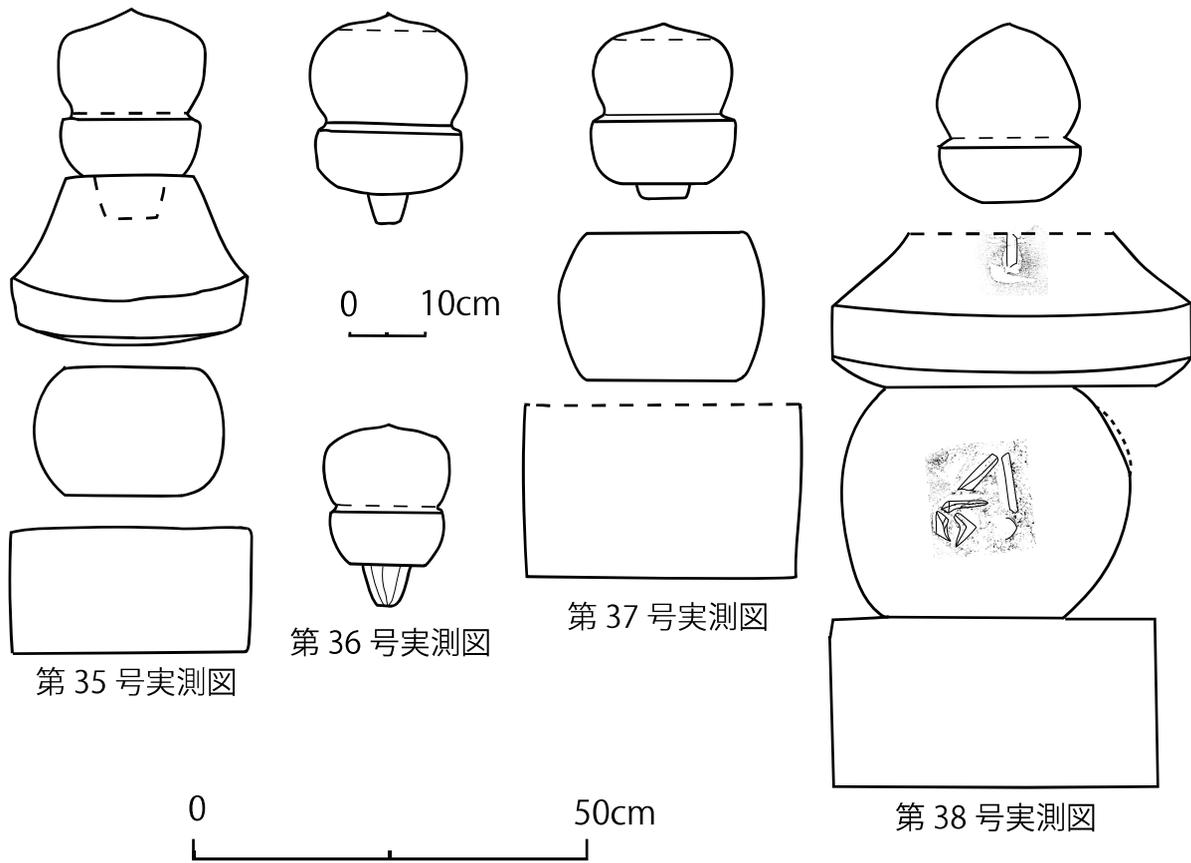
第 27 号右側面拓本

- 三 六大
- 密加持速疾顯 重重帝網名即身
- 無碍常瑜伽 四種曼荼各不離

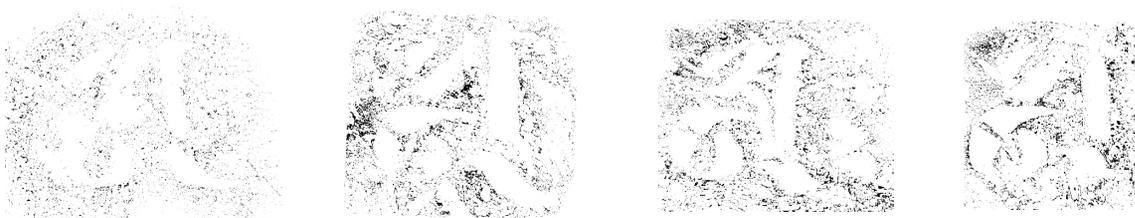
第 11 図 東福寺石塔第 27 号 実測図



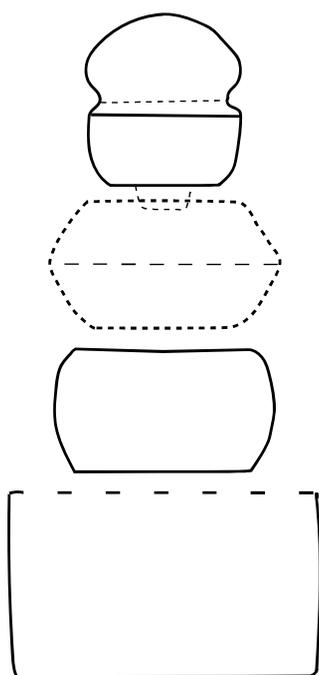
第 12 図 東福寺石塔 第 28・30・31・32・33・34 号 実測図 (S=1/10)



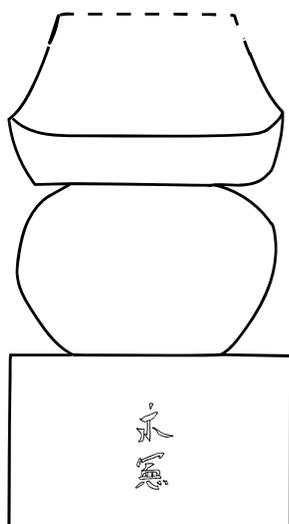
第 38 号日輪 拓本



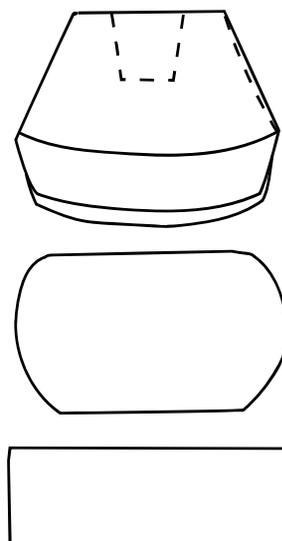
第 38 号水輪 銘文



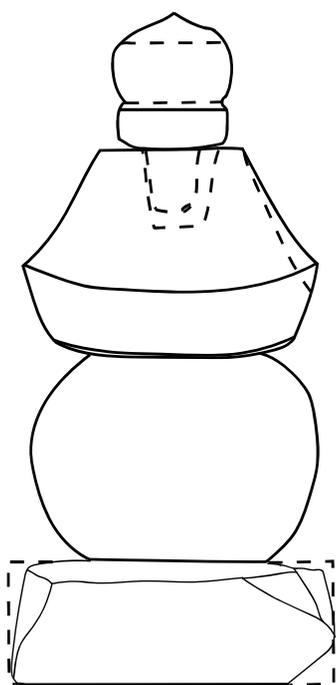
第 39 号石塔



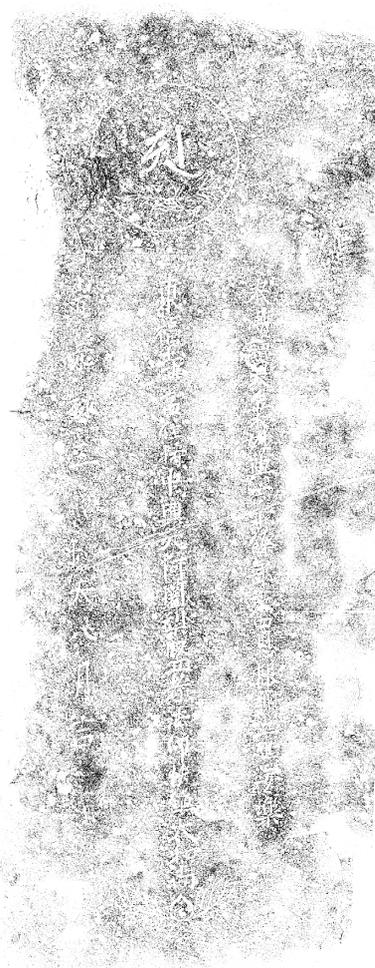
第 40 号石塔



第 41 号石塔



第 42 号石塔



第 47 号石碑拓本



逆
□ 修力

奉漸□大乘妙典六千餘部□四日報謝二世安樂
東福寺當住持中興大阿闍梨豎者法印快鎮大和尚
元祿三 庚午 天 八月吉祥日

第 47 号石碑銘文



第1号石塔（南から）



第2・3・4号石塔（南から）
向かって右手から2号、3号、4号



第5号石碑（南から）



第6号石碑（南から）



第7号石碑（南から）



第9号石塔銘文部（南から）



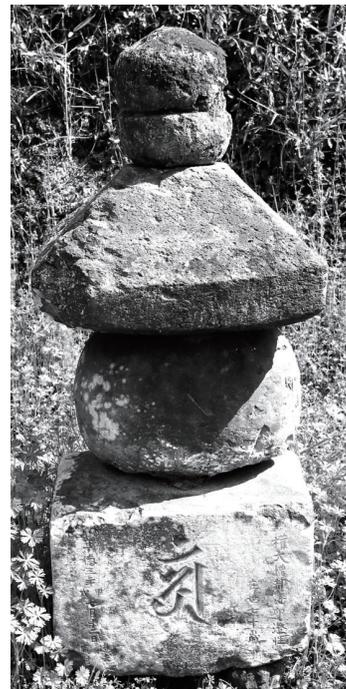
第8号石塔（南から）



第7号石塔銘文部（南から）



第8号石塔銘文部（南から）



第10号石塔（南から）



第 11 号石塔 (南から)



第 12 号石塔 (南から)



第 13 号石塔全景 (南から)



第 11 号石塔地輪 (南から)



第 13 号石塔塔身部
上下反転 (南から)



第 14 号石塔 (南から)



第 15 号石塔 (南から)

第 16 図 東福寺石塔 第 11・12・13・14・15 号 写真



第 16 号石塔（南から）



第 17 号石塔（南から）



第 20 号石塔（南から）



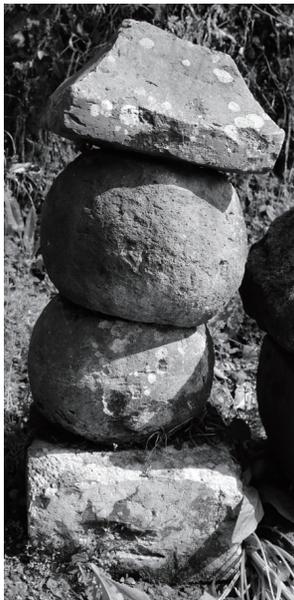
第 21 号石塔（南から）



石塔第 22 号（南から）



石塔第 22 号基礎（南から）



第 23 号石塔（南から）



第 24 号石塔（南から）



第 25 号石塔（南から）



第 26 号石塔 (南から)



第 27 号石塔正面 (東から)



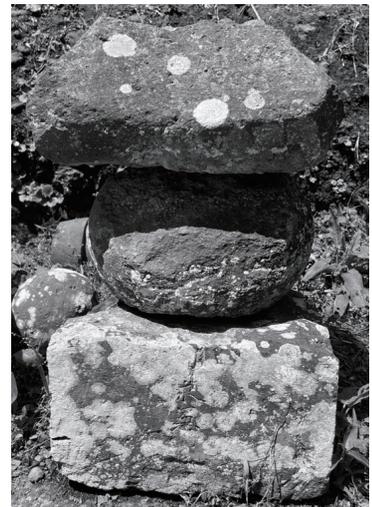
第 27 号石塔側面 (東から)



第 28 号石塔 (北から)



第 38 号石塔 (南から)



第 40 号石塔 (南から)



第 29 号石塔
(南西から)



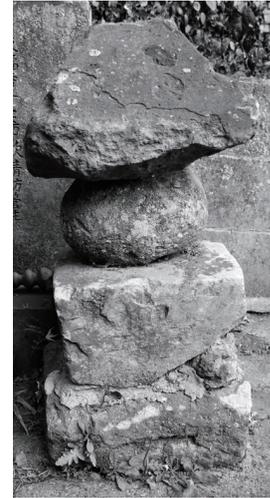
第 44 号石塔 (南から)



第 45 号石塔 全景 (南から)



第 45 号左塔 (南から)



第 45 号右塔 (南から)



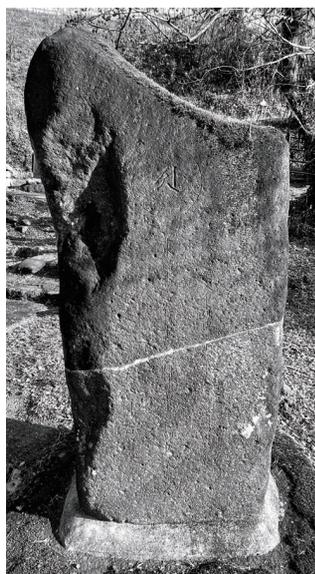
第 45 号 左塔地輪銘文 (南から)



第 48 号石塔 (南から)



第 46 号石塔 (南から)



第 47 号石碑 (南から)



第 49 号石塔 (南東から)



第 49 号正面 (南から)



第 49 号背面 (北から)



第 49 号右側面
(東から)



第 49 号左側面
(西から)



東福寺石塔 全景 (東から)

第 20 図 東福寺石塔 第 49 号、全景



川西宝篋印塔
(1314年)
六段基礎(一段一石)
笠部下段形一石二段
隅飾り別石
馬耳状三弧



元吾平神社宝篋印塔
(1319年)
六段基礎(一段一石)
隅飾り別石
馬耳状三弧



相良寺元泉水宝篋印塔
(紀年銘なし)
六段基礎(二段三石)
隅飾り笠部と一体
馬耳状三弧



平重盛供養塔(紀年銘なし) 型的には(古)左塔⇒中央塔⇒右塔(新)

左塔	中央塔	右塔
六段基礎(二石三段)	六段基礎(上二段、中央三段、下一段)	①基礎四段 ②基礎六段一石彫成(画期)
笠部下段形一石二段	笠部下段形一石二段か	笠部下段形一石二段か
塔身方形	塔身方形	塔身上部二段付き(Ⅰ型)
隅飾り笠部と一体型	隅飾り笠部と一体型	隅飾り笠部と一体型
馬耳状三弧隅飾り	馬耳状三弧隅飾り	馬耳状三弧隅飾り

第21図 菊鹿型宝篋印塔の型式変遷案1



寺尾野宝篋印塔
(1378年)
基礎六段一石彫成
塔身上二段段形
馬耳状三弧隅飾り
定型化



東福寺石塔第 16 号
宝篋印塔
(1481年)
塔身上二段段形
塔身のみ。小型化。



巨宝篋印塔
(無銘)
基礎六段一石彫成
塔身上二段段形
馬耳状三弧隅飾りの
痕跡がわずかに残る。
小型化



東福寺石塔第 21 号
宝篋印塔
基礎五段一石彫成



菊池兼朝墓
菊鹿型宝篋印塔の笠部と塔身に五輪塔の空風輪と水輪を組み
合わせる形。近くに兼朝が建立した正善寺がある。元々、古
墳があった場所を菊池一族の墓所として整備したものか。
菊池兼朝は文安元年（1444）に 63 歳で死去している。
菊鹿型宝篋印塔の笠部と六段基壇の特徴から判断して、
この石塔群の年代観は 15c ~ 16c であってもおかしくな
いが、武将の墓ではなく正善寺の僧侶の墓を、後世に菊池一
族の墓として再整備したものと考えている。



西福寺宝篋印塔
(1327年紀年銘 追刻か)
基礎五段一石彫成
笠部の隅飾りの巨大化。
菊池兼朝墓などを菊池一族
の墓であるという「モデル」
として当初より混成塔を製
作した可能性が考えられる。
16c ~ 17c

第 22 図 菊鹿型宝篋印塔の型式変遷案 2

北

后田村

北河原

北河原

北河原

北河原

北河原

南

今村

南

今村

北河原

神

北河原

北河原

小田村

北河原

今村

一田河原

北河原

北河原

北

春

今村